

福井県埋蔵文化財調査報告 第100集

中角遺跡 1

— I区上層編 —

— 九頭竜川等河川改修事業に伴う調査 —

2 0 0 8

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、平成7年度から16年度にかけて実施した、九頭竜川等河川改修事業に伴う、中角遺跡発掘調査の成果のうち、調査Ⅰ区の上層調査成果をまとめたものです。

中角遺跡は、福井市中角町を中心とした九頭竜川北岸一帯に所在し、中世（上層）ならびに弥生・古墳時代（下層）の二つの遺構面を持つ複合遺跡です。この地域では、古くから土器などの遺物が採集され、特に同町字多知地籍は、中世城館である「中角館」の跡地とされるなど、その存在は以前から広く知られていました。

本書で報告する成果として、特に注目されるのが、堀による大規模な土地区画です。各区画の内部から検出された、掘立柱建物や井戸などの生活遺構の様相が、区画ごとにさまざま異なるなど、中世の集落構造の一端をうかがわせる資料として、非常に興味深いものです。

今後、これらの資料が、埋蔵文化財に対する理解をより一層深める手がかりとなり、また、本書が学術研究ならびに郷土史研究のためなどに、広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至るまでに、関係諸機関をはじめ、地区住民の方々など、多くの皆様から多大なご協力とご支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 水 野 和 雄

例 言

- 1 本書は、建設省（現、国土交通省）九頭竜川等河川改修事業に伴い、平成7年度から16年度にかけて発掘調査を実施した中角遺跡（福井県福井市中角町）の発掘調査報告書のうち、調査Ⅰ区の上層遺構調査成果をまとめた、「中角遺跡Ⅰ - Ⅰ区上層編 -」である。
- 2 調査は建設省近畿地方建設局福井工事事務所（現、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所）の依頼を受け、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）が実施した。
- 3 Ⅰ区上層遺構調査は平成7年5月23日から平成10年11月25日にかけて実施した。年度別の担当者は以下の通りである（肩書は全て担当時）。
平成7年度：工藤俊樹（主査）、中森敏晴（文化財調査員）
平成9年度：月輪泰（主査）、中森敏晴（文化財調査員）
平成10年度：中森敏晴、白川綾（以上、文化財調査員）
- 4 遺物整理作業期間および実施場所は以下のとおりである。
平成8年4月1日～平成15年9月30日：県埋文安波賀本部・中角遺跡現場事務所整理棟
平成15年10月1日～平成20年3月28日：県埋文城東分室
- 5 本書の編集は中森（主査）がおこなった。執筆は中森と、月輪（主任）、田中勝之（主査）、奥井智子（嘱託）が分担した（肩書は全て担当時）。文責は以下のとおりである。
中森敏晴：第1～4章、第6章
月輪泰、奥井智子：第5章第1節（奥井執筆、月輪加筆）
田中勝之：第5章第2節
- 6 遺跡の空中写真撮影・空中測量図作成は株式会社パスコに、遺構・土器の図化と挿図作成は株式会社セビアスに、それぞれ業務を委託した。石製品の図化・挿図作成は田中がおこなった。その他の挿図作成は、主に中森がおこなった。
- 7 遺構写真撮影は工藤、月輪、中森、白川が、写真図版作成は中森がおこなった。土器写真撮影は株式会社セビアスと中森が、写真図版作成は中森がおこなった。石器写真撮影・写真図版作成は田中がおこなった。
- 8 本書に掲載した遺物と、調査に際して作成した図面・写真は、一括して県埋文に保管してある。
- 9 本遺跡に関わる成果について、過去に公表されたものと本書との間に齟齬がある場合には、本書の記述をもって、全て訂正されるものとする。
- 10 本書の作成にあたり、下記の方々よりご指導・ご教示を賜った（敬称略、五十音順）。
岩田隆 小野正敏 水野和雄 南洋一郎 吉岡泰英
- 11 調査にあたり、中野拓郎（敦賀市教育委員会）、森由佳（石川県埋蔵文化財センター）の両氏には、特に多大なるご協力を頂いた。

凡 例

- 1 挿図の縮尺は、全て各図内に示す。
- 2 挿図中の方位は、全て真北を示す。
- 3 遺構挿図中では、土坑を土（例：土坑1→土1）、ピットをp（例：ピット1→p1）とそれぞれ略する。

目 次

	頁
第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡と周辺の環境	
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 遺跡の概要	
第1節 層序	14
第2節 遺構の分布	16
第3節 遺物の出土状況	16
第4章 遺構	
第1節 遺構	17
第5章 遺物	
第1節 土器	37
第2節 石製品	50
第6章 まとめ	
第1節 遺跡	53
第2節 集落と館	54
報告書抄録	巻末

図 版 目 次

本文対照頁

図版第1	遺跡	(1) 遺跡遠景……………	1・7
		(2) I区-①全景……………	16-17
図版第2	遺跡	(1) I区-②全景……………	16-17
		(2) I区-③全景……………	16-17
		(3) I区-④全景……………	16-17
図版第3	遺構	(1) 掘立柱建物1・2(北より)……………	18・19
		(2) 掘立柱建物1・2(南より)……………	18・19
図版第4	遺構	(1) 掘立柱建物1(北より)……………	18
		(2) 掘立柱建物2(南より)……………	19
図版第5	遺構	(1) 堀1(南より)……………	16-17・21・22
		(2) 堀2・5(西より:平成7年度)……………	16-17・21・22
		(3) 堀2・5(西より:平成9年度)……………	16-17・21・22
		(4) 堀2・5断面(東より:平成9年度)……………	21
図版第6	遺構	(1) 堀3(南より)……………	16-17・23・24
		(2) 堀3断面(南より)……………	23
図版第7	遺構	(1) 堀3・4(北より:平成7年度)……………	16-17・24
		(2) 堀4(西より:平成9年度)……………	16-17・24
図版第8	遺構	(1) 堀6・7・8(北より)……………	16-17・25
		(2) 堀6・7・8断面(南より)……………	25
		(3) 堀6・7・8断面(南より)……………	25
図版第9	遺構	(1) 堀9(北より)……………	25
		(2) 堀9断面(南より)……………	25
図版第10	遺構	(1) 井戸1(東より)……………	27
		(2) 井戸3(北東より)……………	28
		(3) 井戸7(西より)……………	29
		(4) 井戸17(南より)……………	32
		(5) 井戸18(南より)……………	33
		(6) 井戸19(北より)……………	33
図版第11	遺構	(1) 井戸23・24・26・29・30(北東より)……………	34
		(2) 井戸20・21・27(北西より)……………	35
		(3) 井戸1・掘立柱建物3・土坑51(東より)……………	27・36
		(4) 井戸1・掘立柱建物3・土坑51(北より)……………	27・36
図版第12	遺物(土器)	(1) 堀1出土遺物……………	37
		(2) 堀2出土遺物……………	38
図版第13	遺物(土器)	(1) 堀3出土遺物……………	39

図版第13 遺物（土器）	(2) 堀4出土遺物	39
	(3) 堀5出土遺物	40
図版第14 遺物（土器）	(1) 堀7出土遺物	40
	(2) 堀9出土遺物	40
	(3) 井戸出土遺物	41
図版第15 遺物（土器）	(1) 土坑51出土遺物	42
	(2) 土坑出土遺物	44
図版第16 遺物（土器）	(1) 包含層出土遺物（須恵器）	46
	(2) 包含層出土遺物（土師質皿）	46
図版第17 遺物（土器）	(1) 包含層出土遺物（土師質皿）	47
	(2) 包含層出土遺物（越前焼壺・土錘）	47
図版第18 遺物（石製品）		50・51

挿 図 目 次

	頁
第1図 中角遺跡位置図・試掘実施箇所図	1
第2図 調査I区設定図	3
第3図 調査風景（I区-①）	4
第4図 調査風景（I区-①）	5
第5図 調査風景（I区-②・④）	6
第6図 中角遺跡周辺の地形	7
第7図 中角遺跡と周辺の中世遺跡分布図	9
第8図 中角館跡略測図	10
第9図 土層柱状模式図	15
第10図 調査I区上層遺構全体図（1）	16-17
第11図 調査I区上層遺構全体図（2）	16-17
第12図 掘立柱建物1実測図	18
第13図 掘立柱建物2実測図	19
第14図 堀1・2・5実測図	21
第15図 堀1・2・5断面図	22
第16図 堀3断面図	23
第17図 堀3・4断面図	24
第18図 堀6・7・8・9断面図	25
第19図 井戸1・掘立柱建物3実測図	27
第20図 井戸2・3実測図	28
第21図 井戸6・7実測図	29
第22図 井戸8・9実測図	30

第23図	井戸10・11・13・14実測図	31
第24図	井戸12・17実測図	32
第25図	井戸18・19実測図	33
第26図	井戸22・23・24・26・29・30実測図	34
第27図	井戸20・21・27・32・33・38実測図	35
第28図	土坑51実測図	36
第29図	堀1出土土器実測図	37
第30図	堀2出土土器実測図	38
第31図	堀3・4出土土器実測図	39
第32図	堀5・7・9出土土器実測図	40
第33図	井戸1・2・5・18・20・22・23・27出土土器実測図	41
第34図	土坑51出土土器実測図	42
第35図	土坑出土土器・包含層出土土器実測図	44
第36図	包含層出土土器実測図(1)	46
第37図	包含層出土土器実測図(2)	47
第38図	石製品実測図(1)	50
第39図	石製品実測図(2)	51

表 目 次

	頁	
第1表	掘立柱建物一覧表	19
第2表	堀一覧表	20
第3表	井戸一覧表	26・27
第4表	主要土坑一覧表	36
第5表	出土土器観察表	48・49
第6表	石製品組成表(1)	52
第7表	石製品組成表(2)	52
第8表	石製品観察表	52

第1章 調査の経緯と経過

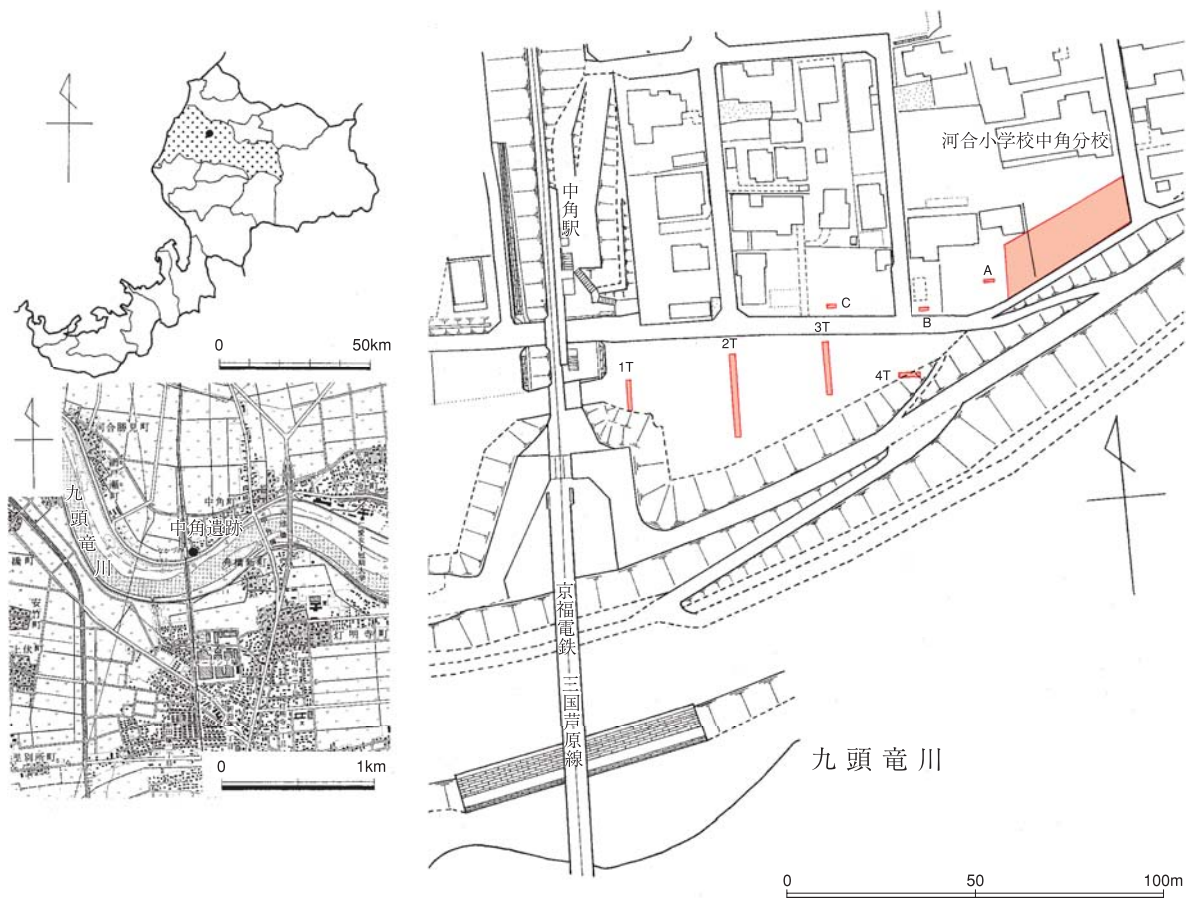
第1節 調査に至る経緯 [第1図]

福井県最大の河川である九頭竜川は、福井平野のほぼ中央、福井市北部を西へ流れ、支流の日野川を合わせて北西に向かい、坂井市三国町で日本海に注ぐ。その福井市から三国町までを結ぶ、京福電鉄（現、えちぜん鉄道）三国芦原線の九頭竜川橋梁付近は、川が曲流している上に、幅が極端に狭く、九頭竜川治水事業における最大の難所とされていた。

そこで、建設省近畿地方建設局福井工事事務所（現、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所。以下、福井工事事務所）は、九頭竜川等河川改修事業の一環として、洪水時における九頭竜川・日野川の水位低下を図るとともに、福井市街地の河川水位をも低下させ、治水安全度を向上させるために、九頭竜川の河道拡幅を実施する延堤工事を計画した。河道拡幅は、京福電鉄九頭竜川橋梁改築（昭和56年～平成元年（1981～1989）にかけて実施）も含め、北岸側に約2.016haの用地を取得した上で、総延長約640mにわたって、堤防を堤外地側に引いて新築することとなった。

その事業予定地となった福井市中角町の九頭竜川北岸一帯は、土器などの遺物の散布が古くから知られ、特に字多知地籍は中世城館「中角館」の跡地に比定されるなど、遺跡としてすでに周知されていた。

以上のような経緯を経て、平成4年（1992）8月26日、福井工事事務所は事業予定地の一部について、埋蔵文化財試掘調査を福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）に依頼、同年8月31日から9月1日にかけて、県埋文が試掘調査を実施した（第1図）。



第1図 中角遺跡位置図（左上：縮尺1/2,500,000 左下：縮尺1/50,000）・試掘実施箇所図（右：縮尺1/2,000）

調査の結果、第1～4トレンチ・Cグリッドでは、現地表下50～100cmに存在する茶褐色土層（上層）と、100～150cmに存在する黒褐色土層（下層）を確認、各層から遺構および遺物を検出した。これら二層は上層が南北朝時代の遺物を、下層が弥生時代～古墳時代の遺物をそれぞれ包含し、遺構も遺物同様に層位を違えて確認された。

また、A・Bグリッドでは、現地表下40～80cmに、後世の埋め戻しと思われる玉石の堆積を、その下層80～110cmに、中世および弥生～古墳時代の遺物を混在する黒色土層をそれぞれ確認した。玉石の埋め戻し層は、かつて周辺が低地であった事実を示唆するとともに、当地が中角館跡比定地の外縁部に近いことから、館の環濠跡に相当する可能性も想定された。

結論として、本遺跡は二時期の異なる層位を有する重複遺跡であり、その範囲は事業区域全域におよび、遺存状況はきわめて良好、出土遺物も多量という、非常に密度の濃い内容であることが判明した。

以上の調査内容に基づき、工事実施前には、記録保存のための本格的調査の実施が必要となる旨を、福井工事事務所に回答したが、調査対応については、直ちに具体的な協議はされなかった。ただ、すでに事業は開始されて久しく、加えて、事業には堤防上を走る市道の改修、具体的には三国芦原線の踏切を廃して、市道を線路の高架下に通す立体交差化事業も含まれていたため、事業進捗を求める声は日々高まりつつあった。

平成6年（1994）に入り、福井県教育庁文化課、^{すがやえぼし}県埋文、福井工事事務所の三者は合議の末、九頭竜川等河川改修事業の一環として、当時実施中であった菅谷烏帽子遺跡発掘調査を、平成6年度末で急遽中止し、平成7年度より^{なかつのいせき}中角遺跡・^{なかつのやかたあと}中角館跡発掘調査へ調査体制を振り替えることで合意した。

なお、工事計画区域の一部が中角館跡比定地にきわめて近接していたため、本発掘調査事業における遺跡名は「中角遺跡・中角館跡」とされた。しかし、結果として、館本体もしくはそれに関連すると断定し得る遺構や遺物は検出されなかったため、本書における遺跡名は、「中角遺跡」のみとする。

第2節 調査の経過 [図版第1・2、第2～5図]

(1) 全体の経過

中角遺跡発掘調査は、平成7年(1995)5月23日より開始し、平成16年(2004)12月8日に完了した。調査区の総延べ面積は21,148m² (10,574m²×2面) を測る。

調査にあたっては、京福電鉄三国芦原線を挟んで、上流側（東方）の調査区をⅠ区、下流側（西方）の調査区をⅡ区、とそれぞれ設定し、Ⅱ区のさらに下流側の送電線鉄塔移設予定地をⅢ区とした。

Ⅰ～Ⅲ区の各延べ調査面積と調査期間は以下のとおりである。

Ⅰ区 (2,690m²×2) : 平成7年5月23日～平成11年3月12日

Ⅱ区 (7,740m²×2) : 平成8年7月15日～平成16年11月26日

Ⅲ区 (144m²×2) : 平成16年8月18日～12月8日

調査は、基本的にⅠ区の完了後にⅡ区へ移行する予定だったが、Ⅰ区には住宅地のほか、市道や市立^{かわい}河合小学校中角分校校庭の一部なども含まれていたため、住宅の立ち退きや道路の付け替え、学校の廃校手続き等の事情により、小規模な区割での段階的な調査を余儀なくされた。そのため、平成8年度からは、Ⅰ区調査の完了を待たずに、Ⅱ区調査にも順次着手し、全体として進捗を図った。

その後、平成11年度には、^{ひがしふるいち}鳴鹿大堰建設にかかわる^{ひがしふるいちなわて いせき}東古市地区暫定盛土工事に伴う、東古市縄手遺跡現地調査に対応するため、平成11年(1999)6月23日から同年11月1日まで、調査を一時中断した。また、

平成16年度に調査を実施したⅢ区は、非常に小規模であったため、Ⅱ区と同時並行で調査を進めた。

以上、途中4ヶ月弱の中断を挟んだものの、本調査は、開始から完了まで9年5ヶ月にわたる、長期かつ大規模なものとなった。当然ながら、その成果も膨大であるため、調査報告書の構成は、まずⅠ区とⅡ・Ⅲ区の調査区で二分し、それぞれを上・下層でさらに二分する四部構成とした。報告書の刊行順と内容（いずれも予定）は、以下のとおりである。

1. 中角遺跡1 - Ⅰ区上層編 - (Ⅰ区上層調査成果)
2. 中角遺跡2 - Ⅰ区下層編 - (Ⅰ区下層調査成果)
3. 中角遺跡3 - Ⅱ・Ⅲ区上層編 - (Ⅱ・Ⅲ区上層調査成果)
4. 中角遺跡4 - Ⅱ・Ⅲ区下層編 - (Ⅱ・Ⅲ区下層調査成果)

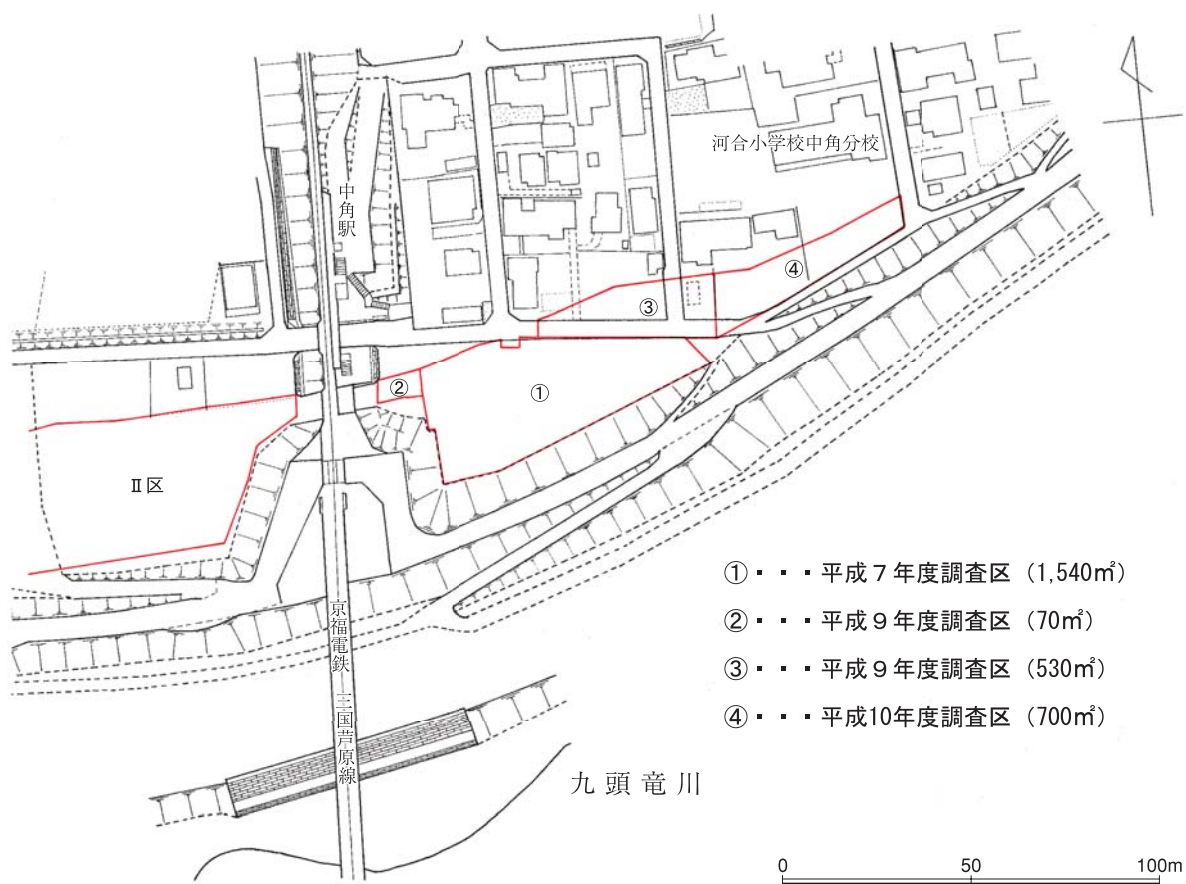
本書は『中角遺跡1 - Ⅰ区上層編-』にあたり、Ⅰ区上層調査成果をまとめたものである。

(2) Ⅰ区上層調査の経過

Ⅰ区の区割と各面積、および上層調査期間は以下のとおりである（第2図）。

- ① (1,540㎡) : 平成7年5月23日～12月14日
- ② (70㎡) : 平成9年10月6日～12月5日 (①下層調査と並行)
- ③ (530㎡) : ②に同じ
- ④ (550㎡) : 平成10年9月9日～11月25日

グリッド割りは一辺を5mとし、南北をアルファベット（A～M）、東西にアラビア数字（1～26、98～100）を付してグリッド名とした。

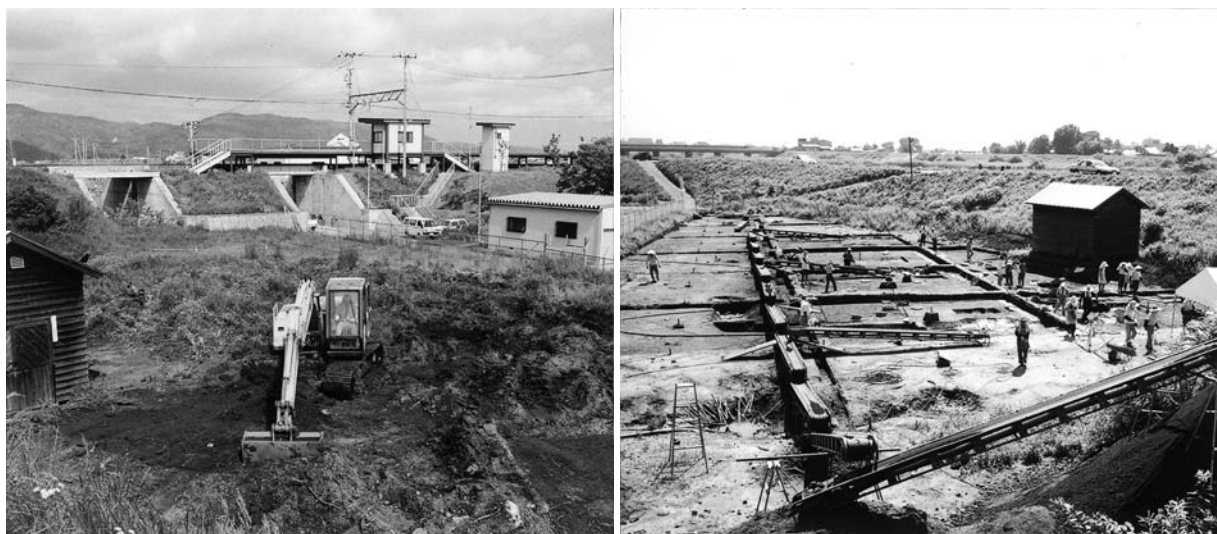


第2図 調査Ⅰ区設定図 (縮尺1/2,000)

以下、I区上層調査の調査日誌を抄録する。

① 平成7年度

- 5月23日 重機による表土剥ぎ。
6月5日 作業開始。測量杭打ち、草刈り。
6月6日 トレンチ調査。地表下20～30cmに中世包含層の上面を、地表下40cm前後に弥生・古墳包含層（黒褐色土）の上面をそれぞれ確認。
6月12日 表土掘削開始。中世包含層の上面を露出し、遺構の検出を試みる。
7月19日 遺構検出作業を続けるも判然とせず、中世包含層自体の明確な分層も困難なことから、現状での遺構検出を断念、弥生・古墳包含層上面を遺構検出面とし、中世包含層を全て掘削・除去することとする。
8月22日 中世包含層除去完了、遺構検出作業再開。
8月23日 井戸（井戸1）、大型の土坑（土坑51）検出。
9月18日 堀1検出、掘削開始。
9月26日 堀2検出、掘削開始。
10月11日 堀1完掘、底部に井戸（井戸7）検出。堀2完掘。
10月17日 排土置き場に一部使用していたC2～F2区の中世包含層掘削開始。
10月26日 堀3検出、掘削開始。
11月16日 堀4検出、掘削開始。
11月22日 堀3完掘。
11月23日 堀4完掘。
11月28日 遺構個別写真撮影（～29日）。
12月1日 空中測量。
12月14日 作業終了。



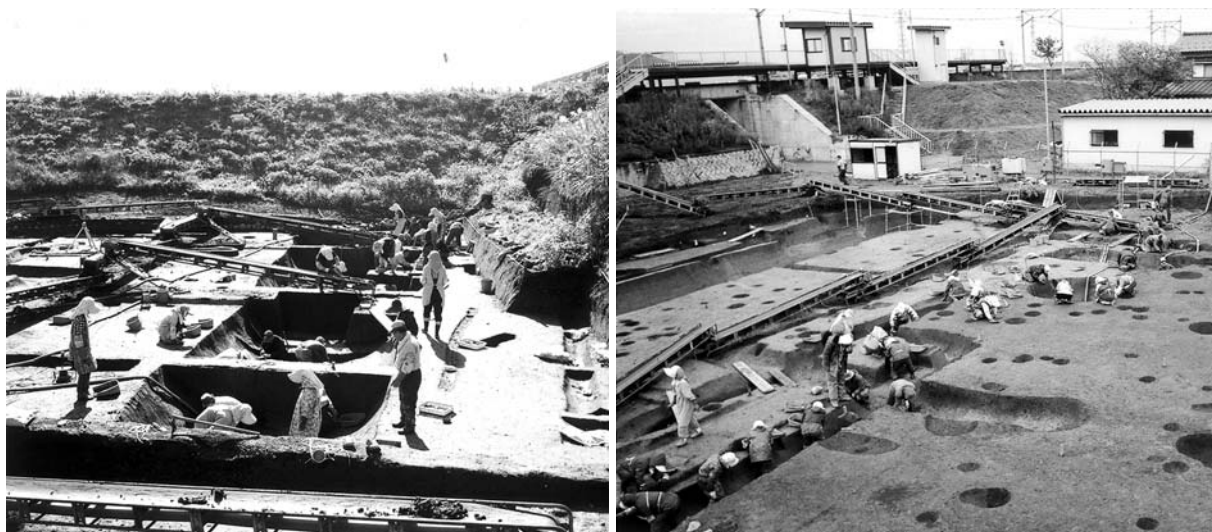
第3図 調査風景（I区-①） 左：表土剥ぎ 右：包含層掘削

② 平成9年度

- 10月6～9日 表土剥ぎ。
11月4日 中世包含層掘削開始。
11月6日 堀4検出、掘削開始。
11月7日 攪乱部分を重機で掘削、除去。深い箇所は地山層直上まで及ぶ。
11月11日 調査区北壁際に井戸17検出。
11月14日 井戸17掘削開始。
11月19日 井戸17より井戸枠検出、曲物の外側に支え板が入る。
11月20日 井戸17、井戸枠以下が深く、北壁面崩壊のおそれがあるため、以後の作業を断念、井戸枠内に土のうを充填し、崩壊を防ぐ。
11月25日 堀4完掘。
12月1日 遺構掘削完了。
12月5日 空中測量。全体・個別遺構写真撮影。

③ 平成9年度

- 10月6～9日 表土剥ぎ。
10月13日 中世包含層掘削開始。
10月15日 堀2検出、トレンチ掘削。
10月31日 堀2の底部で段差を検出。堀が2条重複していると判断、北側の浅い段を堀5とする。
11月11日 断面観察より、堀2埋没後に堀5を新たに掘削したことが判明。
11月12日 堀2・5完掘。
11月14日 井戸18～20検出。掘削開始。
11月28日 井戸18～20完掘。
12月1日 遺構掘削完了。
12月5日 空中測量。全体・個別遺構写真撮影。



第4図 調査風景（I区-①） 左：堀3掘削 右：調査区精査

④ 平成10年度

- 9月2日 重機による表土剥ぎ開始。調査区東半部（もと、学校校庭）は中世包含層が残るも、厚さ5cmほどときわめて薄い。調査区西半部（もと、住宅地）は、現地表下60～70cmまで大量の玉石で埋まる。
- 9月9日 作業開始。調査区西半部は大部分について地山まで掘削が及び、堤防際にわずかに下層遺構が残るほかは、遺構・遺物ともほとんど失われていたため、上層遺構については、調査の必要なしと判断する。
東半部は中世包含層掘削。
- 9月18日 遺構検出作業開始。K～L23グリッド付近に南北方向に縦断する堀を検出。井戸、次々と検出。
- 9月29日 前述の堀を堀6・7・8と認定。
- 10月7日 井戸20・21完掘、写真撮影。
- 10月20日 井戸25完掘、写真撮影。井戸23完掘。
- 10月28日 井戸27完掘。
- 10月29日 井戸20・21・27、井戸23・24・26・29・30の集合写真撮影。
- 10月30日 堀9検出。
- 10月31日 井戸31完掘、写真撮影。
- 11月5日 堀9、井戸32ほぼ完掘。
- 11月6日 井戸33完掘。井戸32写真撮影。
- 11月9日 堀9、井戸33写真撮影。
- 11月12日 堀6・7・8、写真撮影。
- 11月16日 遺構調査完了。ベルトコンベア、一旦撤収。
- 11月25日 空中測量。のち、全景写真撮影。上層調査終了。

参考文献

九頭竜川流域誌編集委員会 編 2000 『九頭竜川流域誌 水との闘いそして共生』



第5図 調査風景（I区-②・④） 左：調査区精査（I区-②） 右：遺構掘削（I区-④）

第2章 遺跡と周辺の環境

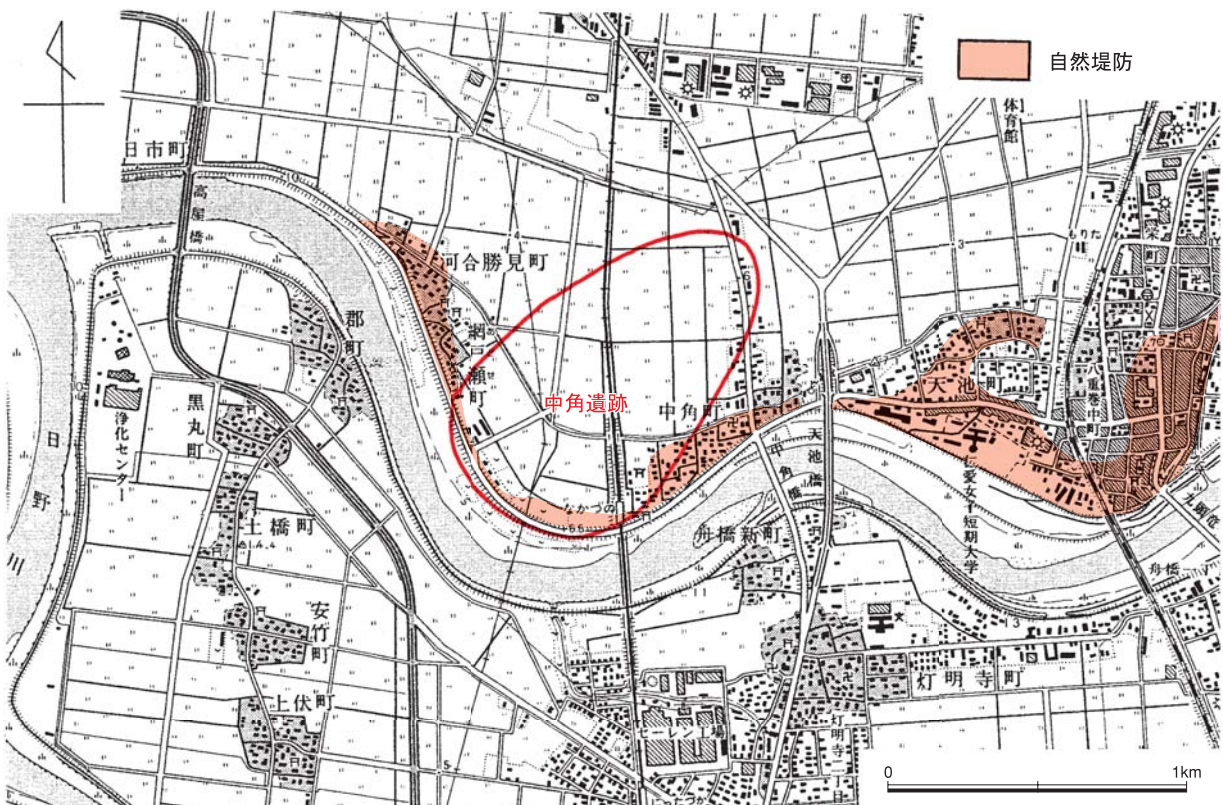
第1節 地理的環境 [第6図]

福井県は、昔の国名で言う越前と若狭の両国から構成され、本州日本海沿岸のほぼ中央近く、本州が西から次第に北東へ折れ曲がるあたりに位置する。現在では敦賀市の東方、木ノ芽山嶺を境に、以北を嶺北、以南を嶺南と呼び、行政的にも大別される。嶺北地方は古代の越前国にほぼ相当し、嶺南地方は古代の若狭国と越前国敦賀郡までを含む。

嶺北地方には、九頭竜川が広大な水系を形成しているが、その支流の中でも特に長大な日野川・足羽川を含めた三つの河川による、相乗的な沖積作用で形成されたのが福井平野である。この平野をほぼ東西に横断する九頭竜川を境に、北部地域は特に坂井平野とも呼ばれ、その坂井平野の南端部、九頭竜川と日野川の合流域付近の九頭竜川北岸一帯では、かつて禁裏御領（皇室の荘園）として開発・経営された、河合庄が存在したとされる。現在でも、「河合」の名は地区名として地元にも強く根付いており、中角遺跡の所在する福井市中角町は、その河合地区の南端部に位置する。

中角は九頭竜川の渡し（渡船場）の一つとして古くから有名で、交通の要衝であった。また、九頭竜川と日野川との合流点にも近く、江戸時代には「米河戸」とも呼ばれ、年貢米の積み出しがおこなわれるなど、近代に入って陸運手段が急速に発達するまでは、陸路と水路の両利を得た通運拠点として、活用されていたものと考えられる。

地形的に見ると、現在の中角集落は、主に九頭竜川北岸に展開する広大な自然堤防（第6図朱網部）上に立地している。中角遺跡の総面積は推定で65万㎡あまりにおよぶ⁽¹⁾（同図朱線内）が、やはりその中心は、中角集落周辺の自然堤防上に展開しているものと推測される。



第6図 中角遺跡周辺の地形（縮尺1/25,000）（国土地理院 2004『1:25,000 土地条件図 福井』を参照）

第2節 歴史的環境 [第7・8図]

(1) 中角遺跡とその周辺

ここでは、中角遺跡の周辺域、特に九頭竜川北部地域の主要な中世遺跡について概説する。

河合庄 かわいおのしょう 皇室および仁和寺・醍醐寺領荘園。平安末期に成立した。正確な範囲は不明だが、北は福井市川合鷺塚町、南・西は九頭竜川、東は永平寺町柝原に接する広大な範囲に広がっていたと推測される。

九頭竜川の北岸にあるので、当初は「河北庄」と呼ばれたが、応仁の乱以降、越前国の実権を掌握した朝倉氏が、同字異音の在所である「河北」(現在の福井市上河北町・下河北町付近)と曲解し、皇室への年貢額を一方的に切り下げたため、朝廷は「河合庄」と名を改めた。その後、朝廷は朝倉氏に年貢額の是正を再三督促したが、ついに応じられぬまま、朝倉氏の滅亡とともに、河合庄も事実上消滅した。

法土寺遺跡 (第7図4) ほうどじいせき 福井市江上町字法土寺・字漆谷に所在する。「法土寺」の字名や、遺跡の北約2kmにある善正寺(福井市浄土寺町)に、同寺がかつて当地にあったという由緒が伝わることなどから、寺院跡である可能性が従来から指摘されていた。

平成6～11年度にかけて、国道416号改良工事に伴い、県埋文が調査を実施し、弥生時代の墳丘墓や古墳時代の群集墳、中世の寺院跡などを検出した。特に、中世の寺院跡については、14世紀前後から16世紀にわたって展開し、大規模な地形造成を経て、最終的には堀切・土塁を備えた城館的な寺院に変容していった過程が明らかにされている。

漆谷遺跡 (第7図5) うるしだにいせき 福井市江上町字漆谷に所在する。平成5年度に、国道416号改良工事に伴い、県埋文が調査を実施した。古墳5基、中世墓11基以上、近世以降の所産と考えられる火葬土壙墓60基以上を検出し、当地が古代から近世まで長期間にわたって、墓域として維持されていたことを確認した。

石盛遺跡 (第7図9) いしもりいせき 福井市石盛町に所在する。同町館ノ中・館ノ前地籍は、中世城館「石丸館」跡地に比定されるが、これについては次項で詳述する。

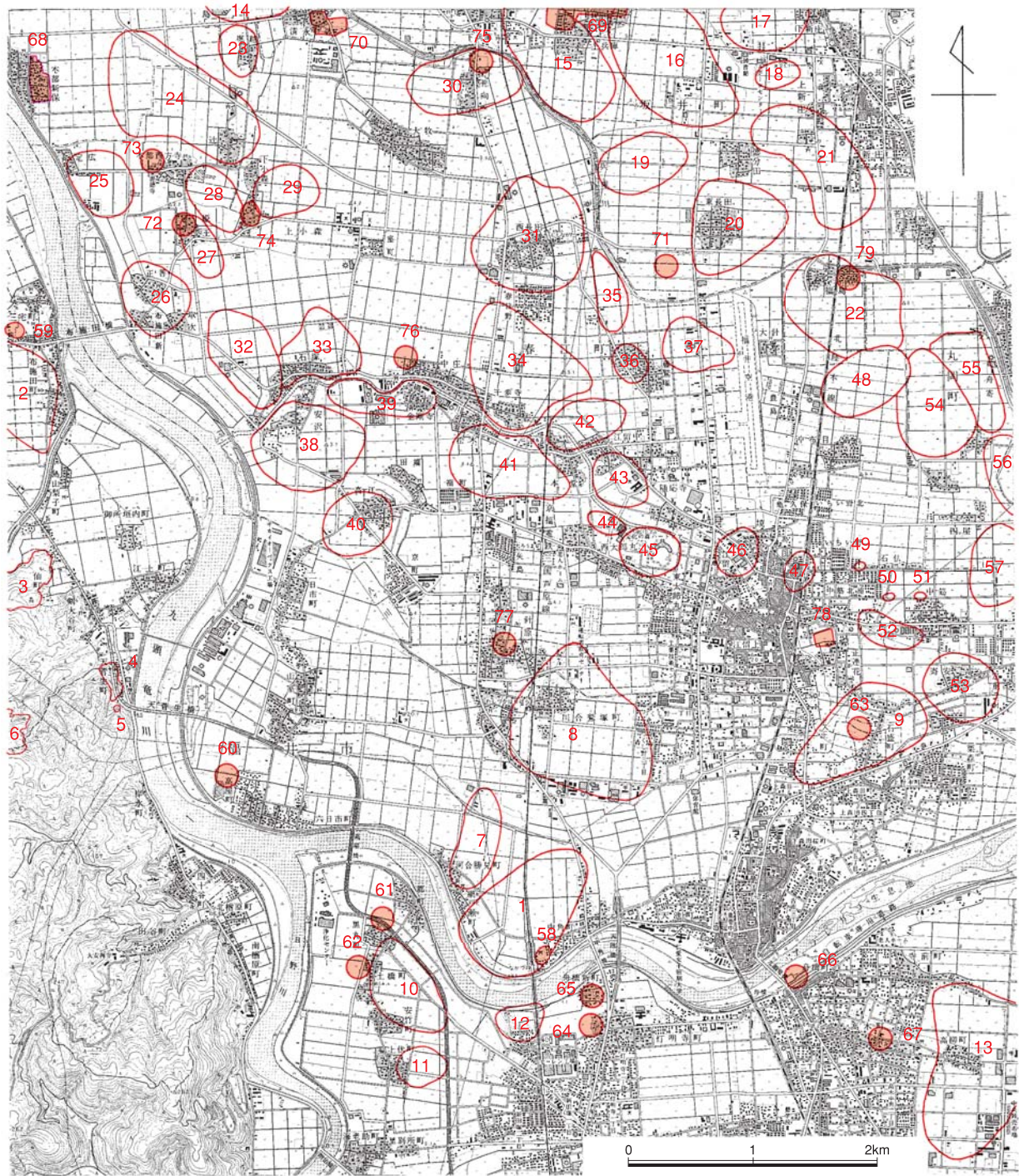
平成14・15・18年度の3か年度にわたって、森田北東部土地区画整理事業に伴い、福井市文化財保護センターが、館ノ中・館ノ前地籍で発掘調査を実施し、堀を伴う室町時代の館跡や掘立柱建物、区画溝などを確認した。また、下層からは古墳時代の集落跡や弥生時代の環濠の一部を検出した。

上兵庫西遺跡・上兵庫東遺跡 (第7図15・16) かみひょうごにしいせき かみひょうごひがしいせき いずれも坂井市坂井町上兵庫に所在する。平成8～12年度にかけて、県営担い手育成基盤整備事業に伴い、県埋文が発掘調査を実施し、縄文・弥生・古墳・平安・鎌倉・室町の各時代の集落跡を確認した。中世(鎌倉～室町時代)の遺構として、掘立柱建物や多数の井戸などが検出されている。

西太郎丸遺跡 (第7図44) にしたろうまるいせき 坂井市春江町西太郎丸に所在する。平成5年度に、公共施設建設事業に伴い、県埋文の指導のもと、旧春江町教育委員会が発掘調査を実施し、古墳時代、奈良・平安時代、中世(鎌倉～南北朝時代)までの期間に、断続的に営まれたと思われる集落跡を確認した。特に、中世集落跡は遺構密度が濃く、大規模な集落であった様子がうかがえる。

東太郎丸遺跡 (第7図45) ひがしたろうまるいせき 坂井市春江町東太郎丸に所在する。平成7年度に、福井県児童科学館建設事業に伴い、県埋文が発掘調査を実施し、古墳時代から近世に至る集落跡を確認した。

江留下遺跡境元町地区 (第7図46) えだめしも いせきさかいもとまちちく 坂井市春江町境元町に所在する。平成6年度に、住宅宅地基盤特定治水施設等整備事業と町道敷設事業に伴い、県埋文が調査を実施し、古墳時代前期と鎌倉時代後期を中心とする集落跡であることを確認した。



- | | | | | |
|-----------|-------------|------------|------------|---------------|
| 1 中角遺跡 | 17 下新庄遺跡 | 33 石塚遺跡 | 49 石仏遺跡 | 65 舟橋新村館跡 |
| 2 西中野遺跡 | 18 上新庄五十石遺跡 | 34 千歩寺遺跡 | 50 中筋水久保遺跡 | 66 勝虎城跡 |
| 3 仙古墳群 | 19 徳分田遺跡 | 35 藤鷲塚高遺跡 | 51 中筋高場遺跡 | 67 構ヶ城跡 |
| 4 法土寺遺跡 | 20 東長田遺跡 | 36 藤鷲塚東遺跡 | 52 中筋遺跡 | 68 向氏館跡 |
| 5 漆谷遺跡 | 21 上新庄遺跡 | 37 藤鷲塚東遺跡 | 53 寄安遺跡 | 69 上兵庫館跡 |
| 6 竜興寺跡 | 22 福島遺跡 | 38 安沢遺跡 | 54 舟寄遺跡 | 70 清永館跡 |
| 7 河合勝見遺跡 | 23 堀越遺跡 | 39 金剛寺遺跡 | 55 舟寄正堺遺跡 | 71 東長田館跡 |
| 8 鷲塚遺跡 | 24 辻遺跡 | 40 高江遺跡 | 56 北横地中才遺跡 | 72 向駿河館跡・姫屋敷跡 |
| 9 石盛遺跡 | 25 定広遺跡 | 41 松木遺跡 | 57 北横地石橋遺跡 | 73 西方寺城跡 |
| 10 土橋遺跡 | 26 正善遺跡 | 42 本堂遺跡 | 58 中角館跡 | 74 上小森館跡 |
| 11 上伏遺跡 | 27 姫王遺跡 | 43 江留下鷲狩遺跡 | 59 大黒丸館跡 | 75 海神城跡 |
| 12 舟橋新遺跡 | 28 木部西方寺遺跡 | 44 西太郎丸遺跡 | 60 高屋館跡 | 76 後鳥羽院御所跡 |
| 13 高柳遺跡 | 29 下小森遺跡 | 45 東太郎丸遺跡 | 61 黒丸城跡 | 77 春近城跡 |
| 14 島遺跡 | 30 井向遺跡 | 46 江留下遺跡 | 62 土橋城跡 | 78 正蓮華館跡 |
| 15 上兵庫西遺跡 | 31 西長田遺跡 | 47 为国遺跡 | 63 石丸城跡 | 79 福島館跡 |
| 16 上兵庫東遺跡 | 32 石塚源取遺跡 | 48 沖布目北遺跡 | 64 灯明寺城跡 | |

※城館跡のうち、○印は比定範囲が未確定なもの

第7図 中角遺跡と周辺の中世遺跡分布図（縮尺1/50,000）（国土地理院 平成12年6月1日発行 1：25,000地形図「越前森田」使用）

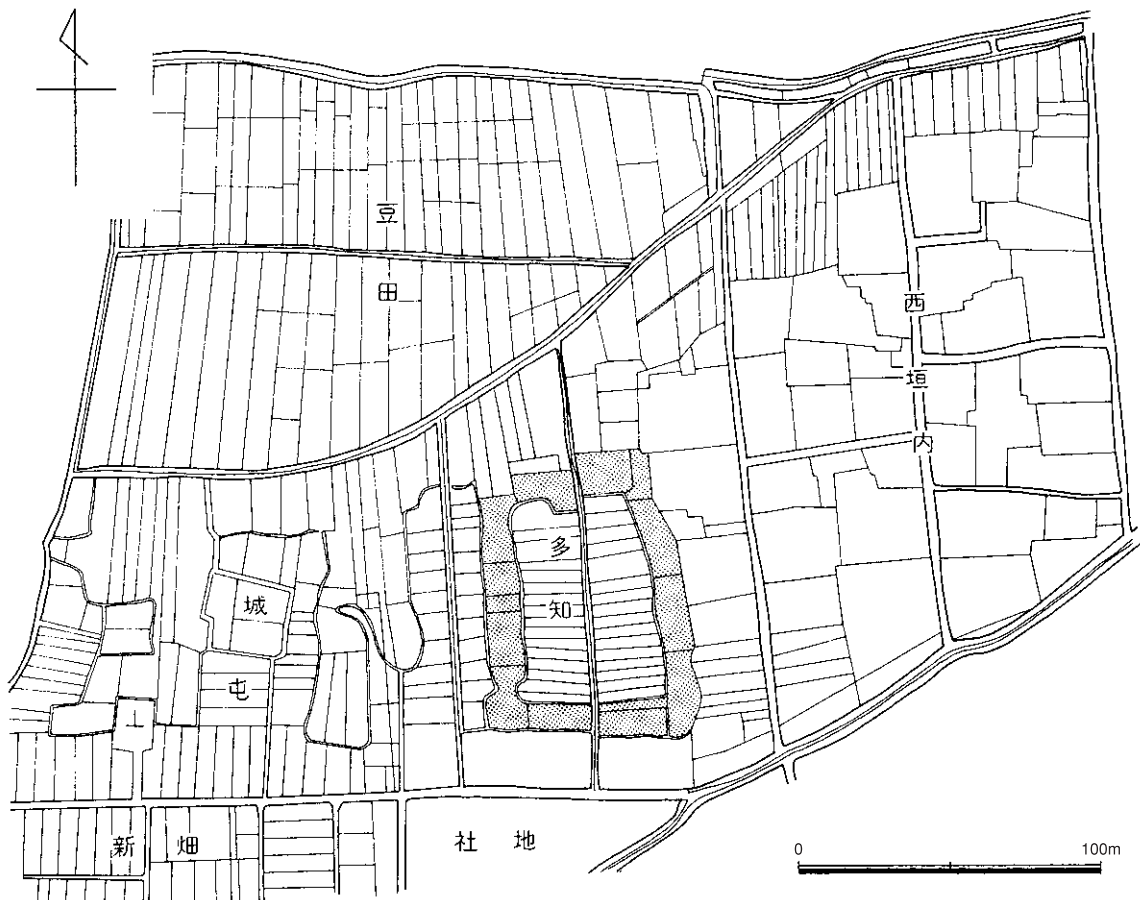
(2) 中角遺跡周辺の中世城館跡

ここでは、中角遺跡と非常に関連が深いと考えられる中角館跡と、周辺地域の主要な中世城館跡について概述する。

中角館跡（第7図58、第8図）^{なかつのやかたあと} 福井市中角町^{たち}多知^{たち}に所在する。『越前国名蹟考』^{えちぜんのくにめいせきこう}（以下、『名蹟考』）には、朝倉氏の家臣、乙部勘解由左衛門の居館として、「中角村際申西方畑之中四十間二十間計之所堀形有」と記される。明治初年の地籍図では、多知地籍内の畑地（南北72m、東西36m）を囲んで、水田が約9m幅で巡っているように見受けられるため、『名蹟考』にある中角館と、その環濠跡と目されている（第8図）。現況は住宅地および水田などで、遺構などは確認できない。

館の主である乙部の名は、貞治三年（1364）十月二十七日付八坂神社文書に初めて見え、当初は室町幕府管領家斯波氏の守護使であったが、朝倉氏の台頭とともに朝倉氏の家臣に転身している。下って、『守光公記』^{もりみつこうき} 永正十六年（1519）二月二十二日条広橋守光宛半井明重書状の追筆に、河合庄の給人（代官）として、「乙部右京亮」^{おとべうきやうりやう}の名が見えるが、その頃には勢力が著しく衰えていた様子もうかがえる⁽²⁾。さらに、『朝倉始末記』によれば、朝倉氏滅亡後の天正二年（1574）、乙部氏は一向一揆軍に攻められ、館を追われた、とある。一方、『名蹟考』には、吉田郡藤巻村（現在の吉田郡永平寺町藤巻）^{ふじまき} 字勘解由殿^{かげゆどん}にある藤巻館^{ふじまきやかた}⁽³⁾の主として、「朝倉家 南部勘解由左衛門義綱 乙部トモ」と記される。

これらのことから、乙部氏が中角館を追われ、藤巻に落ち延びた際、名を南部と改め、藤巻館に居住した、という経緯が推測されていたが、近年発見された新資料『一乗録』^{いちじやうろく}には、それとは似て非なる顛末⁽⁴⁾が記されており、中角館および乙部氏の盛衰については、今後再検討を要するものと考えられる。



第8図 中角館跡略測図（縮尺1/2,500）（福井県教育委員会 1987『福井県の中・近世城館跡』より転載、一部改変）

大黒丸館跡（第7図59） おおくろまるやかたあと 福井市三宅町みやけちやうに所在する。三宅黒丸城みやけくろまるじやうとも呼ばれ、『名蹟考』では「三宅村ヨリ二町計東方山之四十間四方計之所搔上形有之」とある。かつては、朝倉氏が一乗谷に移る以前の居城とされていたが、現在では後述の黒丸城の誤りとする説が有力である。

遺跡のほとんどが土砂採取で削平・破壊されており、昭和36年頃の調査によれば、東辺と北辺の東半に幅5m、高さ2mの土塁と、その外側に幅4～7m、深さ1mほどの堀跡が残り、約70m四方の単濠単郭式構造の城であったとされる。遺跡からは五輪塔なども出土しているため、寺院跡の可能性も指摘されるが、その形態や規模から、当初は交通の要衝に築かれた城跡であったと考えられている。

黒丸城跡（第7図61） くろまるじやうあと 福井市黒丸町字浜田北割くろまるちやう ほまだきたわりに所在するとされる。前述の三宅黒丸城（大黒丸館跡）と区別して、小黒丸城こくろまるじやうとも呼ばれ、『名蹟考』には「黒丸村ヨリ一町計北方畑之内九尺計四方之城台其外田畑之内石垣所々有之」とある。

九頭竜川と日野川の合流点を間近に望む要害の地にあり、南北朝期の争乱時には、北朝方斯波高経の本陣となった。また、永正三年（1506）七月、加賀一向一揆軍が越前に侵攻してきた際には、朝倉軍二千騎がここを陣所とし、中角に布陣した一揆軍に対峙した。現在は集落西方の水田中に碑が残るが、遺構らしきものは確認されていない。

石丸城跡（第7図63） いしまるじやうあと 福井市石盛町字館ノ中・館ノ前いしまりちやう たちのなか たちのまえに所在するとされる。『名蹟考』には「石森村ヨリ四十間計長方畑之中二十間三十間計」とあり、南北朝期の争乱時には、南朝方新田義貞の本陣にったよしきだとなった。のち、戦国期には朝倉氏の家臣、佐伯勘解由左衛門の居城となるが、一向一揆により焼亡した。

前項で触れたように、平成14・15・18年度の3ヶ年度にわたって、福井市文化財保護センターが、館ノ中・館ノ前地籍で発掘調査を実施している。まず、館ノ中地籍では、字境に沿った南北2ヶ所に堀を、堀割の内部に掘立柱建物・区画溝・井戸などをそれぞれ検出した。南堀の規模は幅10m、深さ2.2mを測り、堀幅も含めた区画の規模は南北84mにおよぶ。また、館を造る際の盛土（約0.5m厚）による堀割内の整地の痕跡も確認した。

一方、館の外側にあたる館ノ前地籍でも、掘立柱建物・区画溝・井戸・土坑などを検出した。特に、区画溝は堀に並行、または直交する方向に掘られ、間隔も南北方向で30～35m前後と、規格性が認められた。この溝で区切られた区画ごとに掘立柱建物が建つことから、一区画が建物一棟分の敷地に相当するものと推定される。

勝虎城跡（第7図66） しょうとらじやうあと 福井市舟橋町ふなばしちやうに所在するとされる。名の由来は、南北朝期に北朝方勝虎政澄しょうとらまさすみが居城したためと言われ、黒龍城、舟橋城とも呼ばれる。『名蹟考』には、「舟橋村之内五十間二三五間計之屋敷」とある。北陸街道の渡河点に立地し、江戸期以降は舟橋奉行の屋敷とされた。

明治36年（1903）の九頭竜川改修によって解体、跡地は河川敷となった。昭和26年（1950）の九頭竜川架橋工事の際には、石垣に使用したと思われる大石を掘り出している。

向氏館跡（第7図68） むかいしやかたあと 坂井市坂井町木部新保字館屋敷・字岡田屋敷きべしんぼ たちやしき おかだやしきに所在する。『名蹟考』では、朝倉氏の分家筋である向駿河守久家の居館として、「木部新保村際東畑之内五間二百間計三方折廻堀之内二三拾五間計四方之屋敷跡有」とある。

九頭竜川東岸の自然堤防上に立地し、対岸には大黒丸館跡がある。明治初年の地籍図によれば、64m四方の郭の周囲を幅8mの堀が池として巡り、現在も堀の一部が現存する。また、その外側には道路区画された約160m四方の外郭が見て取れる。一方、南側の字覆町にも、72m四方の畑地を囲む幅12mの水田があり、これも館跡と思われる。

^{かみひょうごやかたあと}
上兵庫館跡（第7図69） 坂井市坂井町上兵庫に所在する。平成8～12年度に、県営担い手育成基盤整備事業に伴い、県埋文が比定地周辺で発掘調査を実施、上兵庫口地区調査区南側から、掘削角度が急で、遺構確認面から約110cmの深度を有する遺構を確認し、館の堀の一部の可能性を指摘している。

^{きよながやかたあと}
清永館跡（第7図70） 坂井市坂井町清永字館・字南垣内一帯に所在するとされる。『名蹟考』には、朝倉氏家臣伊勢帯刀の屋敷跡として、「木部郷清長村際異方畑之内十六七間ニ二十五間計之所当時神明宮有之」と記される。東側には兵庫川、南側にはこれに流入する小水路があり、この落合に館が構築され、堤防をも兼ねた土塁跡も見て取れる。字南垣内には明治三十二年（1899）まで神明宮があり、一部堀跡も残っていたという。南隣して字辰ノ腰、西には門口の小字名も残る。

^{かいじんじょうあと} ^{はるえちよういのわかい} ^{ほりえひょうごかげしげ}
海神城跡（第7図75） 坂井市春江町井向に所在する。『名蹟考』では、坂井郡の豪族堀江兵庫景重の居館とされ、兵庫城とも呼ばれる。なお、「海神」の名は、景重の母親が大蛇（竜神）の化身であった、という伝説により、後世命名されたと言われる。字堀田を本丸とし、西側の字腰堀は通称「二ノ丸」と呼ばれ、字堀田に今も居住する岡部氏は、堀江氏の末裔と伝えられる。

^{しょうれんげやかたあと} ^{しょうれんげ} ^{たちあと}
正蓮華館跡⁽⁵⁾（第7図78） 坂井市春江町正蓮花字館跡に所在する。『名蹟考』には朝倉近江守の館跡として、「正蓮華村際北方畑之内在三十四、五間四方之所」とあり、朝倉近江守とは、朝倉氏の分家筋である勝蓮華近江守景基を指すものと考えられている。

明治初年の地籍図には、東西60m×南北70mの畑地の周囲に、幅約18mの水田（近年まで湿田）が水濠跡として残り、通称「お堀」と呼ばれる。周辺には大門先・人切場の通称や、古馬場・蓮華寺などの字名が残る。

註

(1) 『福井県遺跡地図』（福井県教育委員会 1993）に示される中角遺跡の範囲は、南隣する九頭竜川の堤外地までを含む。しかし、平成16年（2004）に堤外地一帯で実施した試掘調査では、遺構・遺物等が一切検出されず、遺跡はもともと存在しないか、もしくは河川の浸食を受け、全て消失したものと結論付けた。本書ではこの新事実を重視し、中角遺跡の範囲を図示する（第6・7図）にあたって、堤外地部分を除外することとした。

(2) 朝廷は河合庄の年貢納入の正常化を図って、明重に朝倉氏との交渉にあたらせたが、明重が守光へ交渉の仔細を報告した書状の追記として、「彼給人乙部右京亮、一段無力者候、河合五郎兵衛、以他足進上申候云々（河合庄給人である乙部右京亮は、困窮して財力がなく、河合五郎兵衛が他所で年貢を調達、納入した）」とある。

(3) 藤巻館遺跡は、中部縦貫自動車道建設事業に伴い、平成12～15年（2000～2003）にかけて、県埋文が発掘調査を実施しており、堀・土塁・掘立柱建物など、16世紀代の館跡と思われる遺構を確認している。

(4) 『朝倉始末記』には、「天正二年正月廿八日国中之一揆蜂起 爰ニ河合之八杉ト云フ者 一揆之大將トシテ先乙部勘解由左衛門カ館エ推寄テ攻ケレハ 乙部手向フ事モナク落チ行ケレハ 八杉彼館エ入替リ居住ス」とある。

一方、『一乗録』第二冊巻四には「八杉喜兵衛、大野郡河合郷人、奉義景長女、以至大坂急馳帰、使次女剃髮、喜兵衛太疾義景諸臣叛、起兵先攻吉田郡藤巻村人乙部勘解由左衛門義綱館、取而抛焉、従一揆為將、撃叛臣有功、遂闘死」とある。

「八杉氏に攻められた事と八杉氏が館を取って替わった事は、『朝倉始末記』と共通する内容である。ただし、最大の問題点は、大野郡河合郷の八杉氏が攻めた南部氏の館が、藤巻館である可能性が高いことにある。当館の遺構の実年代からは、『一乗録』記載記事の内容とも、矛盾しないと言える。つまり、両記事から得られる2つの解釈は、当館の調査結果から、どちらが正しいとも判断がつかない状態である。（中略）今後、中角館が調査されれば、あるいは、この問題に結論が出る可能性もあろう」（月輪・宮崎 2007 79頁）。

『朝倉始末記』には、乙部氏が攻め取られたのが、どこの館かは一切書かれていないが、『一乗録』には「吉田郡藤巻村」とはっきり地名が記されている。また、従来「河合」は、中角周辺を含めた河合庄域一帯を指しているものと思われたが、『一乗録』にあるとおり、大野郡にも「河合」（現在の太野市川合か）はある。上記の『藤巻館遺跡』での指摘のとおり、この問題の真否は、中角館の実年代の検証に全て収斂するであろう。

(5) 「正蓮華」という呼称については、「正蓮花」や「勝蓮華」のほか、「勝蓮花」、「青蓮華」、「青蓮花」など、文献によって一々異なるほど、同音異字表記が多い。本書では、主に『福井県史』（福井県 1994）や、『福井県の中・近世城館跡』（福井県教育委員会 1987）の表記に従った。

参考文献

- 大川進 2007 「石盛遺跡」『第22回福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 小葉田淳 監修 1981 『福井県の地名』日本歴史地名体系第18巻 平凡社
- 河原純之・島田正彦・隼田嘉彦・松浦義則 責任編集 1989 『角川日本地名大辞典 18 福井県』角川書店
- 国土地理院 2004 『1：25,000 土地条件図 福井』
- 齋藤與次兵衛 編 1969 『春江町史』春江町
- 佐藤圭 2002 「『一乗録』について」『一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要2001』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
- 月輪泰・櫛部正典 編 2003 『法土寺遺跡Ⅱ』福井県埋蔵文化財調査報告第63集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 月輪泰・宮崎認 編 2007 『藤巻館遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第95集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中川佳三 編 2004・2005 『坂井兵庫地区遺跡群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』福井県埋蔵文化財調査報告第73・81・82集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 福井県 1994 『福井県史 通史編2 中世』
- 福井県教育委員会 1987 『福井県の中・近世城館跡』
- 福井県教育委員会 1993 『福井県遺跡地図』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1995 『年報9 平成5年度』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1996 『年報10 平成6年度』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1997 『年報11 平成7年度』
- 福井市 1990 『福井市史 資料編1 考古』
- 福井市 1997 『福井市史 通史編1 古代・中世』
- 福井市文化財保護センター 2004 「石盛遺跡」『第19回福井県発掘調査報告会資料』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 松原信之 1982 「第一章 河合地区の古代中世」『河合村誌』河合村誌編纂委員会
- 松原信之 2007 「第四章第六節 中世の城館跡」『坂井町史』坂井町史編さん委員会
- 三澤繁忠 1997 「石盛遺跡 遺跡発掘事前総合調査事業に伴う試掘調査概報」『開発遺跡・高柳遺跡・石盛遺跡』遺跡発掘事前総合調査Ⅱ 福井市教育委員会

第3章 遺跡の概要

第1節 層序 [第2・9図]

中角遺跡は、九頭竜川北岸の自然堤防地形の微高地上に立地する。調査Ⅰ区の規模は、北東 - 南西方向に約150m、北西 - 南東方向に10~30m、総面積は2,690㎡を測る。引堤事業であるために、調査区は川の弯曲に沿って長く延び、上流側（北東側）ほど幅は狭くなる。周辺の現況は住宅地で、区内の事業以前の状況は、第2図①・②が白山神社の敷地、同図③が道路と住宅地、同図④が住宅地と学校校庭であった（第2図）。

上層遺構検出面の標高は、南西 - 北東5.600~6.400m、南東 - 北西6.800~7.000mと、下流側・川側に下降しているが、全体として起伏は緩やかで、ほぼ平坦な地形と見てよい。

標準層序は、おおむね以下のように大別できる。なお、表土層は最近の整地・宅地造成などによる攪乱が著しく、自然堆積層としては評価しがたいので、ここでは省略する。

Ⅰ層：褐灰色～茶褐色粘質土で構成される遺物包含層。かわらけ・越前焼など、中世の遺物を主に含む、上層遺物包含層である。現地地表下40~50cmのところにあり、堆積の厚さは30~50cmほどになる。

Ⅱ層：暗褐色～黒褐色粘質土で構成される遺物包含層。弥生土器・土師器など、弥生～古墳時代の遺物を主に含む、下層遺物包含層である。堆積の厚さは30~50cmほどになる。

Ⅲ層：黄褐色～黄緑褐色粘質土で構成される地山層。深度の深いところや湧水の状況によっては還元色（青緑灰色～青灰色など）に変わる。

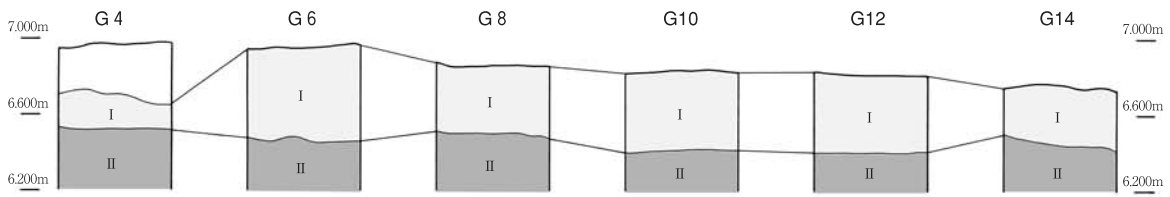
土質はⅠ～Ⅲ層とも共通しており、粘りはやや弱く、砂質ぎみで、特にⅢ層はその傾向が強い。堆積状況は、地形同様ほぼ平坦である（第9図）。

本来はⅠ層中に上層生活面が存在していたものと推測されるが、第1章でも述べたように、Ⅰ層の平面・断面いずれにおいても、遺構等の視認が困難であったため、確実に視認可能なⅡ層上面を遺構検出面と定め、上層遺構調査を実施した。したがって、面掘削は基本的にⅡ層上面でとどめたが、前述のとおり、いたるところに攪乱が見られ、そのほとんどがⅢ層にまで達していた。

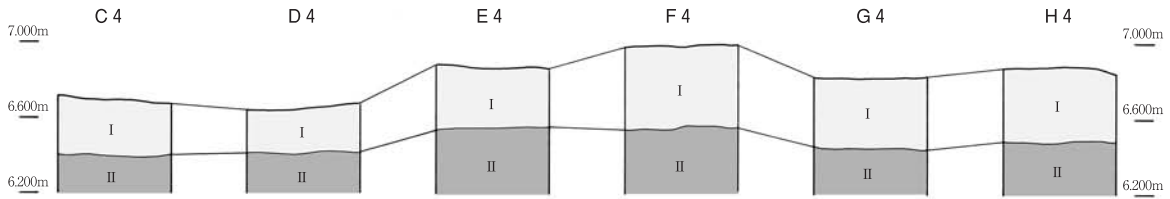
中でも、③の東端部や④の西半部では、広範囲にわたってⅠ・Ⅱ層が完全に欠失し、代わりに多量の玉石と砂が地表近くまで充填されていた。地元の方の証言によれば、昭和30年代ごろまでは、この周辺は水田ではあったが、神社境内の森に遮られて常に日陰がちである上、湧水がひどく、まるで沼のようであった。そこで、宅地にするにあたっては、地面が沈まないよう、玉石を大量に放り込まねばならなかった、という。事実、調査中も、少しずつではあったが、随所から水が滲出し、排水ポンプを常に稼働させなければ、早晚水浸しになる有様であった。

これらのことから、③の東端部および④の西半部は、もとは低湿地もしくは沼地で、③の東半部で見られる間層（Ⅳ層）も、周辺から流れ込んだⅠ～Ⅲ層の混合堆積層であろうと考えられる。

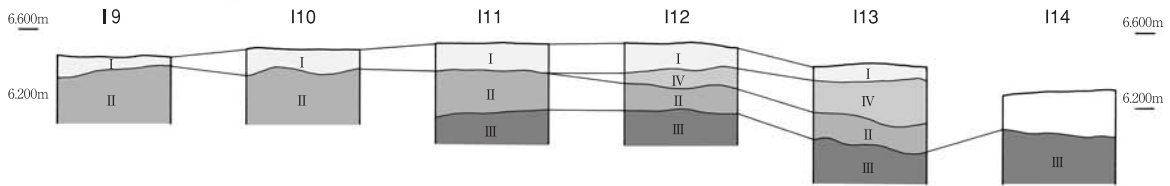
I 区-① 東西



I 区-① 南北



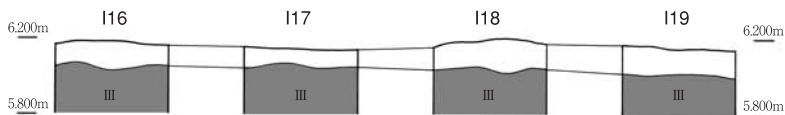
I 区-③ 東西



I 区-③ 南北



I 区-④ 東西



第9図 土層柱状模式図

第2節 遺構の分布 [図版第1・2、第10・11図]

I区で検出した上層遺構は、掘立柱建物3棟、堀9条、井戸38基などである(第10・11図)。なお、土坑・ピットについては、基本的に遺物が出土した遺構にのみ、遺構番号を付した。

第1章で述べたように、I区は3ヶ年度、4調査区に分かれるが、ここで提示する全体図は、各成果を接合・編集したものである。特に、平成7年度調査区(第2図①)と平成9年度調査区(第2図②・③)の境界上に存在する遺構(堀2・5、堀4など)の表現には、推定線も含まれる。

遺構の分布状況は、全体としてはほぼ一様にも見えるが、堀を土地区画の境界として捉えたと、いくつかの区画で若干の偏りが認められる。まず、堀3以東-堀2・5以南の区画(第2図①にはほぼ相当)は、やや南寄りに分布が偏る傾向がある。また、堀2・5以北-堀9以西の区画(第2図③と④の西半部)は、堀や溝を除くと、遺構が非常に少ない。堀6～8以東の区画(第2図④の東半部)は、狭い区画内に井戸が多数密集している。

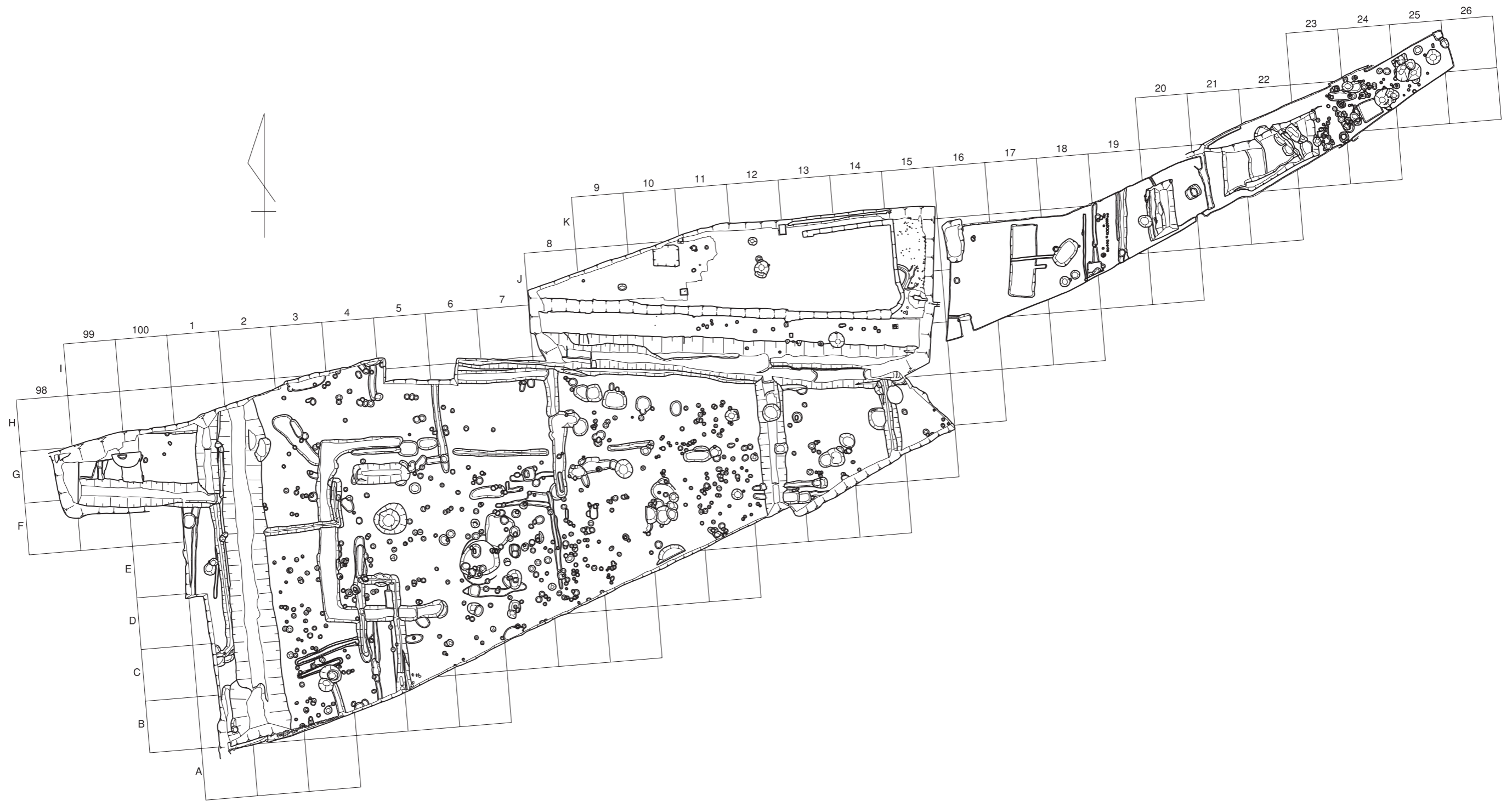
第3節 遺物の出土状況

I区上層調査の出土遺物は、平成7年度で80箱(大コンテナ、以下同じ)、平成9年度で22箱、平成10年度で7箱、総量で109箱を得た。全体に出土量は少なく、特に遺構遺物が乏しい。

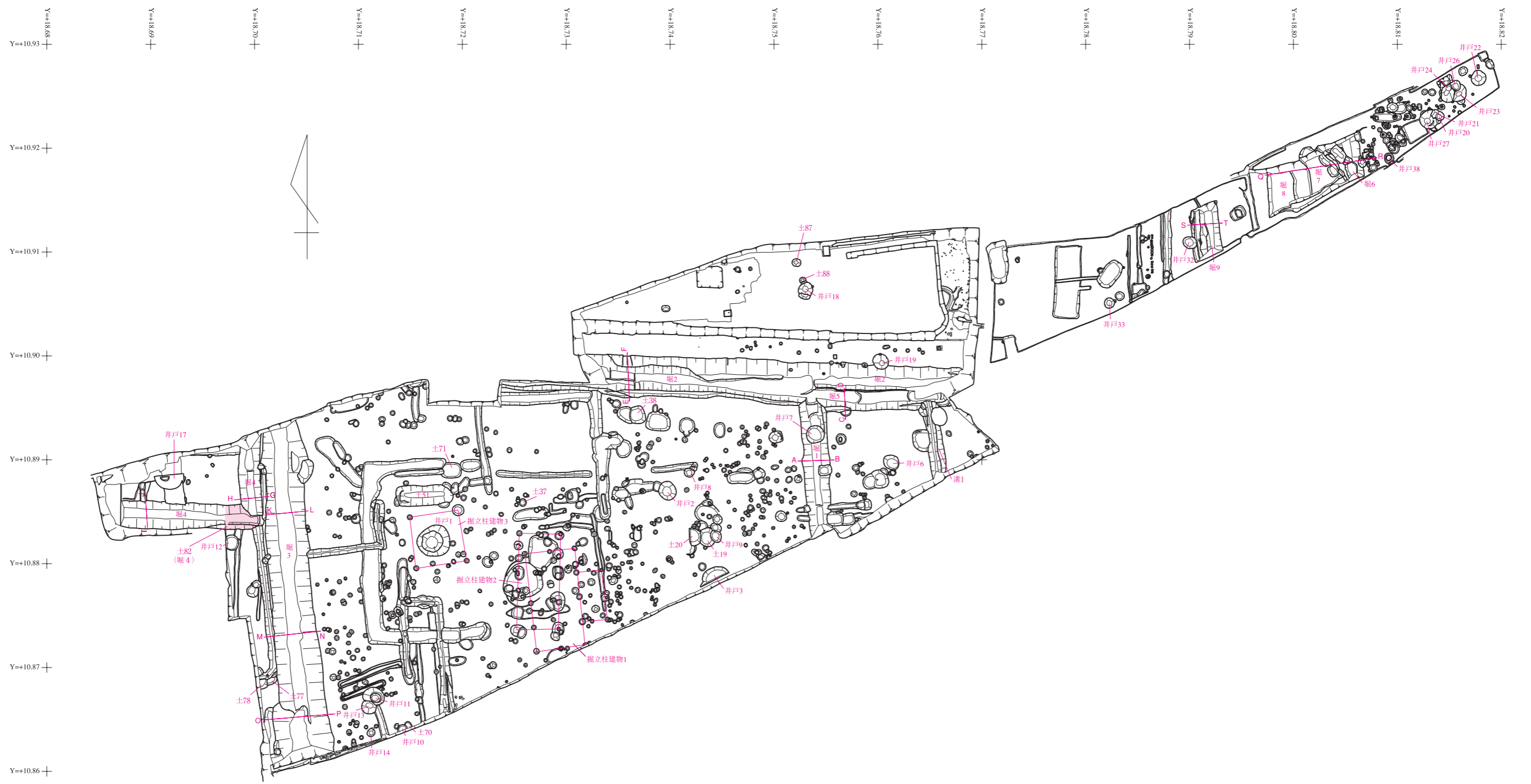
なお、上層調査時には、弥生土器・土師器などの下層遺物も相当量得られたが、これらについては、基本的に上層遺構との関連性はないものと判断、すべて下層包含層遺物として扱い、同調査区の下層調査成果とあわせて整理・検討する。したがって、本書でも下層遺物について、特に言及はしない。

上層遺物は、律令期・中世・近世の各時期に属するものが得られたが、やはり中世遺物が大多数で、律令期・近世の各遺物は少数である。中世遺物の所属時期幅は、13世紀代から16世紀代まで、ほぼ中世全期間に及ぶが、量で主体となるのは15世紀代で、中でも15世紀中葉がその大半を占める。内容は土師質皿、いわゆる「かわらけ」が主で、これに越前焼や古瀬戸、青磁・白磁などの陶磁器が若干含まれる。

なお、主に井戸などの深い遺構から、曲物や箸などの木製品も数点検出したが、点数はわずかであり、図化に耐え得るものもないため、これらの記述は省く。



第10図 調査I区上層遺構全体図(1) (縮尺1/400)



第11図 調査I区上層遺構全体図(2) (縮尺1/400)

第4章 遺構

I区上層調査で検出した遺構は、掘立柱建物、堀、井戸、溝、土坑、ピットなどである。遺構出土遺物の詳細については、第5章を参照されたい。なお、各遺構の規模（長さ・幅・深さなど）や方位（角度）についての数値は、すべて遺構検出面を基準として、測量図上で測定・算出した概測値である。

第1節 遺構 [図版第3～11、第11～28図、第1～4表]

I 掘立柱建物

掘立柱建物は総数で3棟を検出したが、掘立柱建物3は井戸1に伴うと考えられるため、井戸の項であわせて図示している。以下、各建物について概述する。

(1) 掘立柱建物1 (第12図)

平面形は、全体としてほぼ整った長方形を呈しているが、桁行の柱穴の数が東西で異なり、その配置も変則的であるため、柱間距離も著しくばらついているように見える。ただ、各柱穴列を、東はp150 - 建1p7 - 建1p5、西はp206 - 建1p4 - 建1p1の、「2間」として見なすと、等間隔でこそないものの、その数値は北から順に3.8m - 5.6mと、東西の列とも一致している。梁行が3.8mであることから考えると、2×1間を基本として、東桁行では各1間に柱穴1基を、西桁行では各1間に柱穴2基を、それぞれ入れ込んだ状況が想定できる。

実際、各1間での柱間距離も、東桁行は、北側が1.9m、南側が2.8m、西桁行は、北側が1.2～1.3m、南側が1.6～2.3mと、西桁行の南側でやや不規則になるほかは、全体としてある程度の規則性を意識していた様子をうかがわせる。

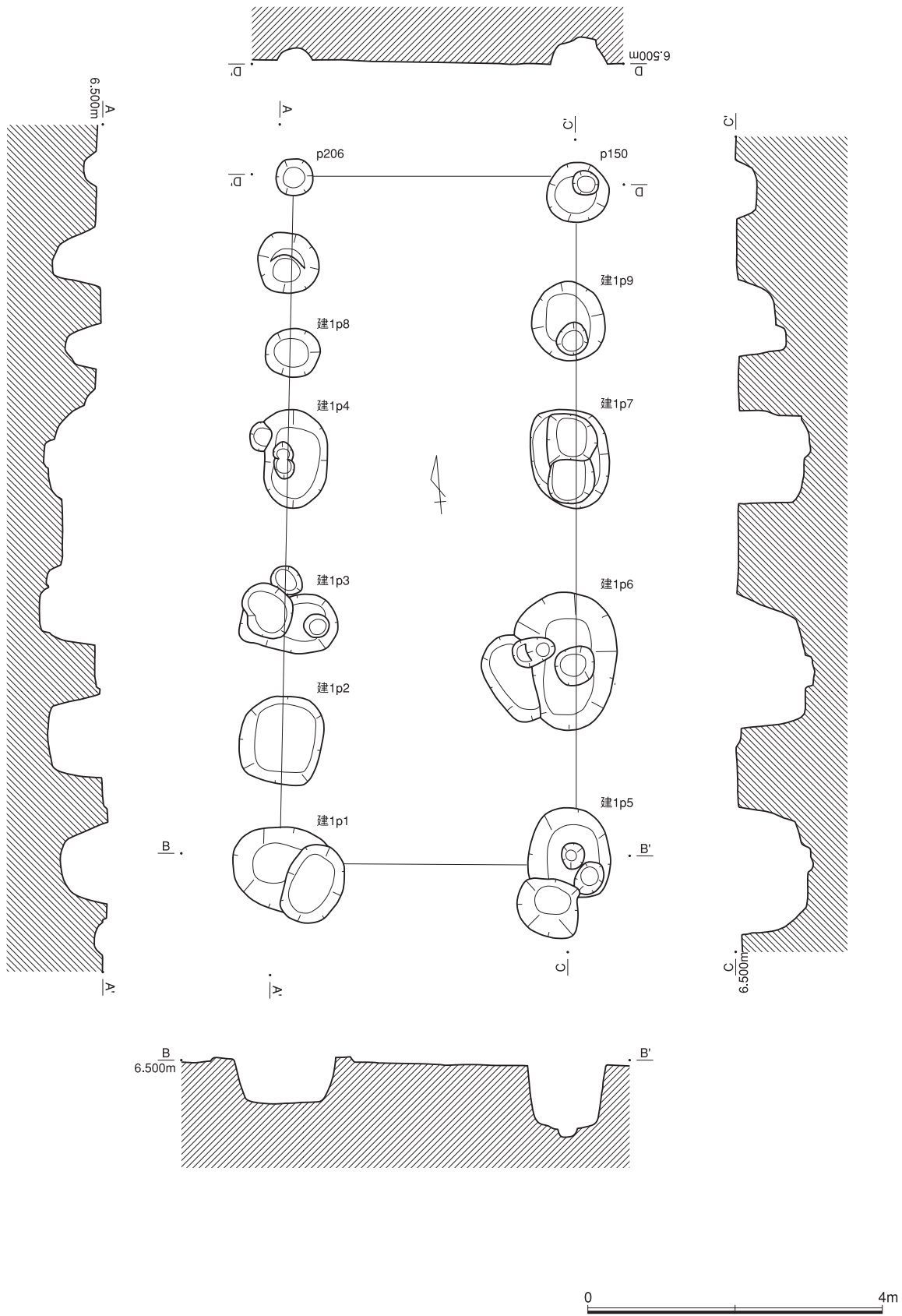
個々の柱穴の平面形状や規模についても、全体としての統一性はないが、それでも前述のように2×1間として見ると、建物北寄りの1間（建1p4・建1p7を除く）には、小さく浅めの柱穴が、南寄りの1間（建1p4・建1p7を含む）には、大きく深めの柱穴が、それぞれ偏っているように見受けられる。建物北寄りの柱穴は、掘り方を持つものと持たないものがあり、平面形が直径0.5～1.0mの円形、深さは0.2～0.6mと、大きくばらつきがある。一方、建物南寄りの柱穴は、すべて楕円形ないし方形の掘り方を持ち、その規模は建1p6（1.9×1.4m前後）が特に大きいものの、それ以外はほぼ1.3×1.1m前後の範囲内に収まる。深さは0.7～1.1mと、大きくばらつきがある。

(2) 掘立柱建物2 (第13図)

母屋の東側に庇状の張り出し部を有する。掘立柱建物1と位置が重複している（第11図参照）が、互いの柱穴が直接切り合う箇所がなく、先後関係は検証できない。柱間距離は、母屋が桁行・梁行とも2.3～2.5m、張り出しは桁行が2.1～2.9m、梁行が2.4mと、全体にややばらつきがあり、張り出しの桁行では特に著しい。柱穴は、平面形が直径0.4～0.6m前後の円形で、掘り方を持たない。遺構確認面からの深さは0.2～0.6mと、かなりばらつきがある。

(3) 掘立柱建物3 (第19図)

平面形はほぼ正方形を呈する。井戸1が掘立柱建物のほぼ中央に位置することから、井戸に伴う上屋建物の跡と判断される。柱穴の平面形状・規模は、土坑53（直径1.0m、深さ0.3m）を除いてはほぼ一様で、直径0.4～0.5mの円形を呈し、深さは0.2m程度に収まる。

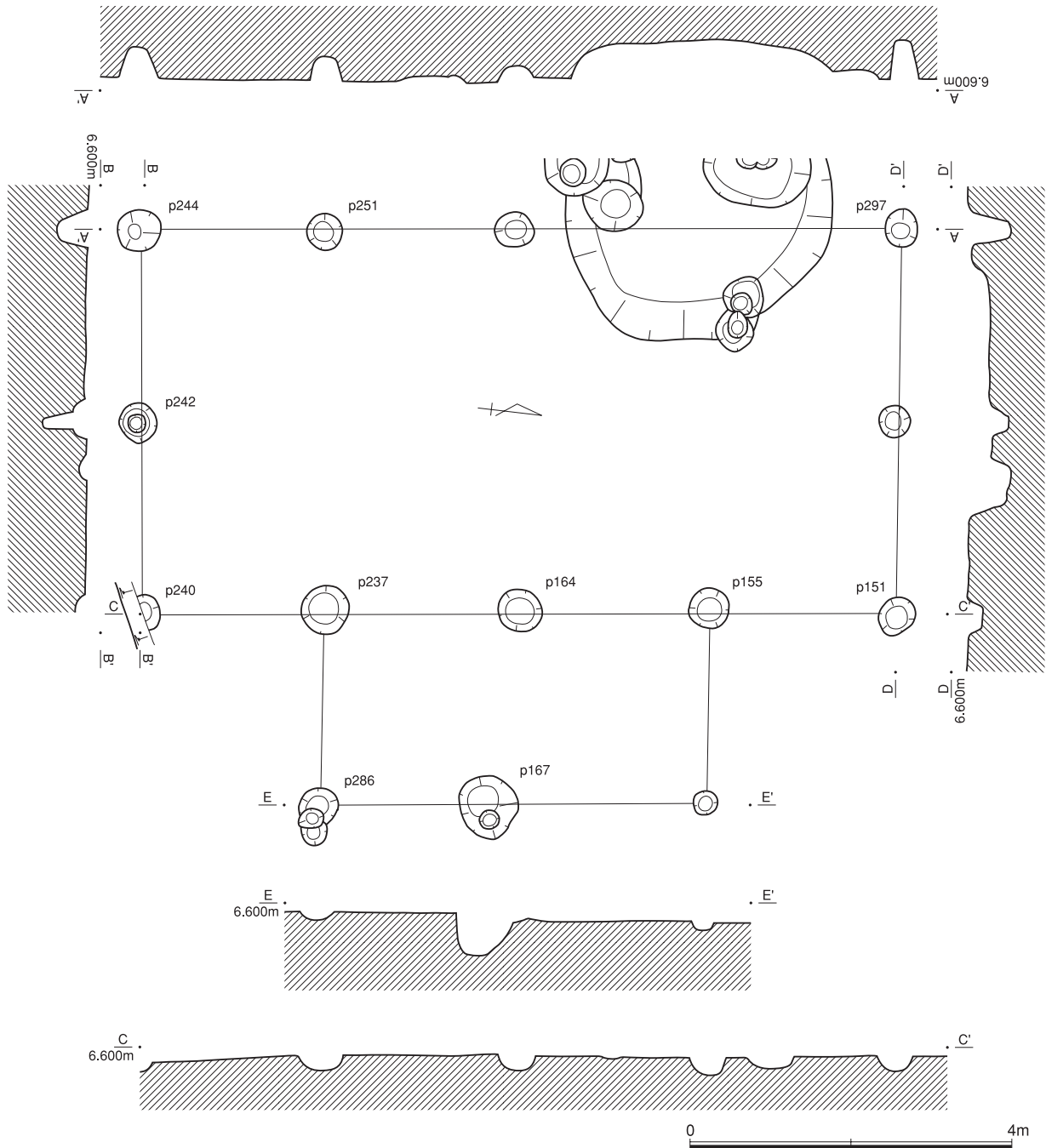


第12図 掘立柱建物1実測図(縮尺1/80)

第1表 掘立柱建物一覧表

遺構名	地区	桁×梁	構造	方位	桁行(m)	梁行(m)	出土遺物	備考	挿図No.
掘立柱建物1	D~E6・7	4(東桁)・6(西桁) ×1	側柱	N1° E (桁行方向)	9.4	3.8	—	東西の桁行で柱穴の 数が異なる	第12図
掘立柱建物2	C~E6・7	4×2(母屋) 2×1(張り出し)	側柱	N5° W (桁行方向)	9.5(母屋) 4.7(張り出し)	4.7(母屋) 2.4(張り出し)	土師質皿(細片で図化 不能)	庇状の張り出しを有 する	第13図
掘立柱建物3	E~F4・5	1×1	側柱	N7° W	5.0	5.0	土師質皿(細片で図化 不能)	井戸1の上屋と思わ れる	第19図

桁行・梁行の長さの数値はすべて概測値



第13図 掘立柱建物2 実測図 (縮尺1/80)

II 堀

堀は総数で9条を検出した。主に土地区画のために掘削されたものと考えられる。各々規模に差はあるものの、いずれも方位はおおむね東西・南北方向に準拠しており、方位を意識して区画を構成していた様子がうかがえる。また、いずれの堀の覆土も有機物層や粘土層の堆積に乏しく、特に底部においても、それらの堆積はほとんど見られないか、あってもごくわずかで、空堀であった可能性も指摘できる。

(1) 堀1・2・5 (第11・14・15図)

堀1と堀2・5との交差部分の断面図(第14図)を観察すると、堀1がある程度埋没したのちに、堀2が掘削されていることが判る。そして、その堀1・2の覆土の一部を、地山層(黄褐色土)の掘削土と考えられる埋土が覆い、さらに堀5覆土が堆積する。ゆえに、先後関係は堀1→堀2→堀5となる。

さらに、堀2・5については、東半部では北側が堀2、南側が堀5と二又に分かれているが、中間部付近で交錯、西半部ではほぼ完全に重複している。断面図(第15図)を観察すると、やはり第14図で確認した先後関係と合致するが、堀5覆土が堀2覆土の上層部まで完全に切り込んでおり、堀2がほとんど埋没した段階で、堀5を掘削していることが判る。

以上の状況から、これらの変遷は人為的埋立および再掘削によるものと判断される。

堀2・5の出土遺物については、堀の重複が調査途中で判明したことや、その重複もほとんど同体であることなどから、その大部分が混在しているものと考えられ、峻別は難しい。

(2) 堀3 (第11・16・17図)

幅・深さとも最大の規模を有する堀である。特に南端部は幅が広く、底が深くなる傾向が著しい。

(3) 堀4 (第11・17図)

今回検出した堀の中で唯一、屈曲部を検出した。

(4) 堀6・7・8 (第11・18図)

上半部の攪乱は、昭和23年(1948)の福井震災時に出た瓦礫やごみなどを埋めた跡である。この攪乱が堀の形状や規模を大きく損ねており、特に堀7は東壁を残すのみとなっている。

堀7・8は中央の浅い段差で分かれており、先行する堀8が埋没した段階で、堀7を掘削したものと思われる。出土遺物も前述の堀2・5と同様、かなり混在していると見なければならない。

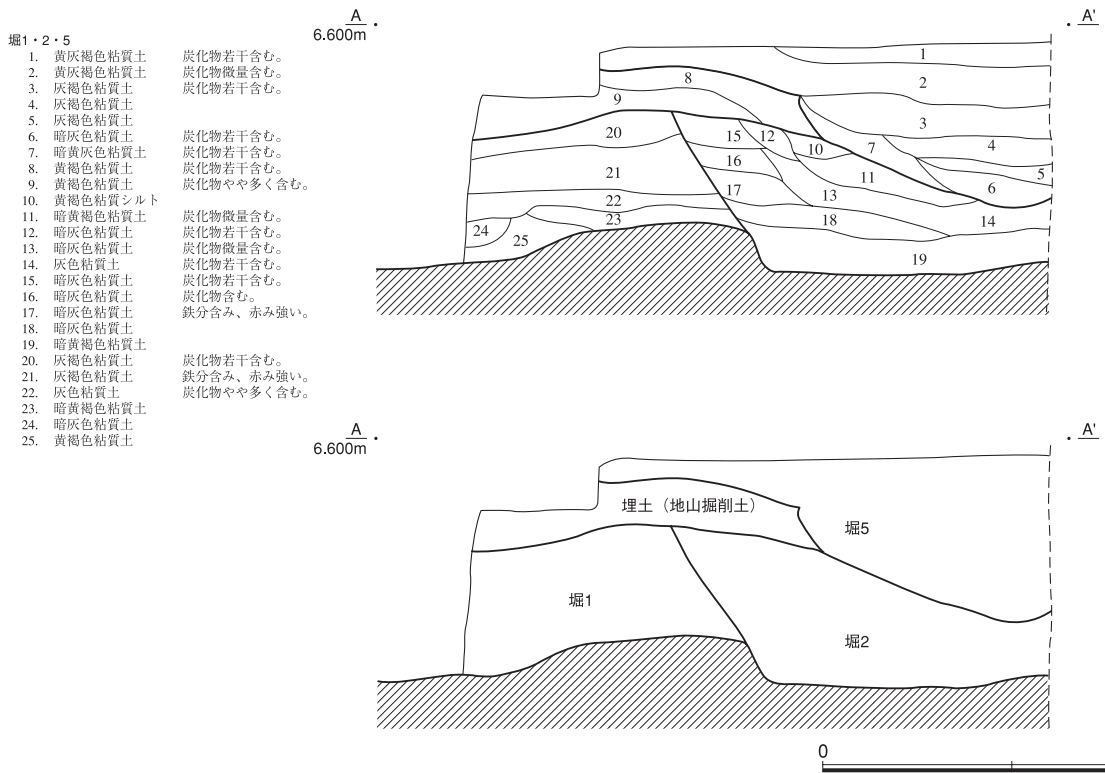
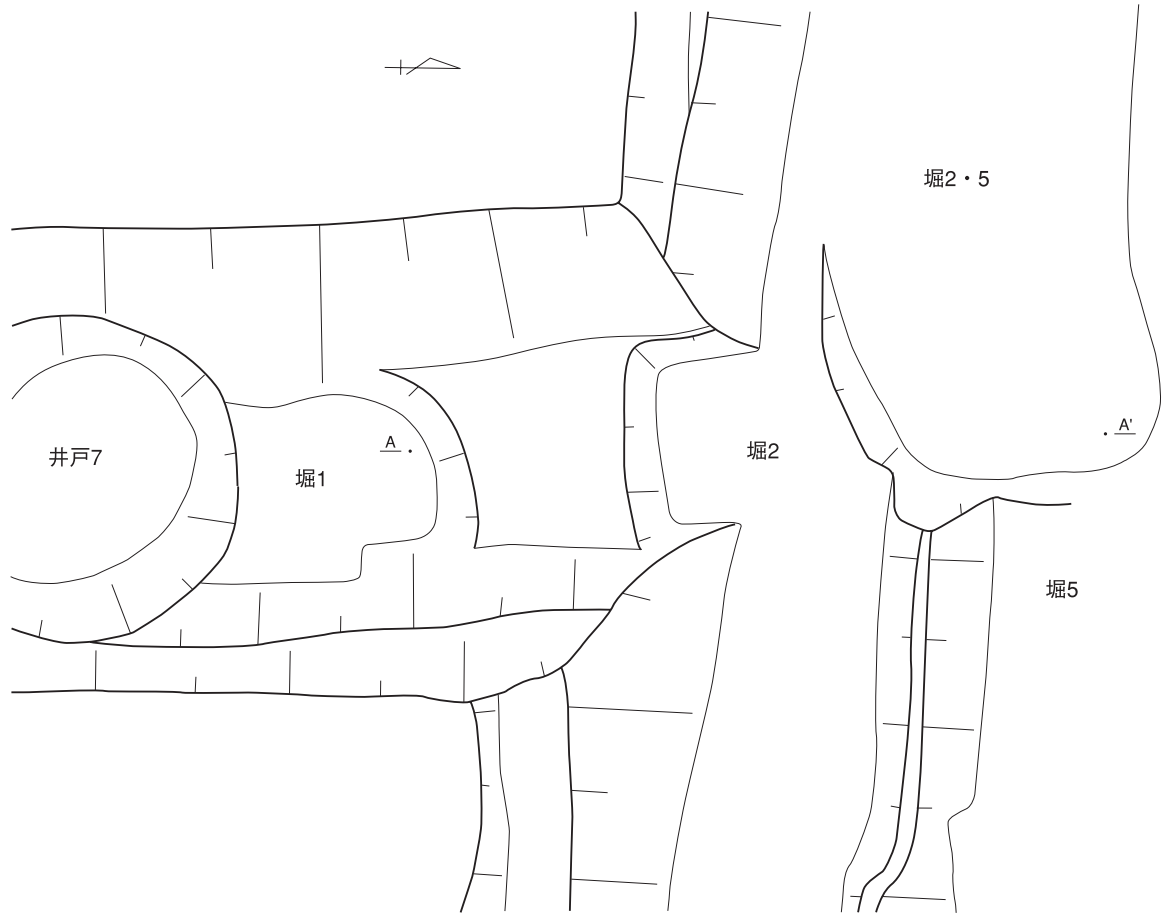
(5) 堀9 (第11・18図)

西壁側のみいくつかの段差を有するが、断面観察では明確な区別はできない。ただ、最西壁側の段差は、堀9がある程度埋まった時点で掘削された溝である可能性が高い。

第2表 堀一覧表

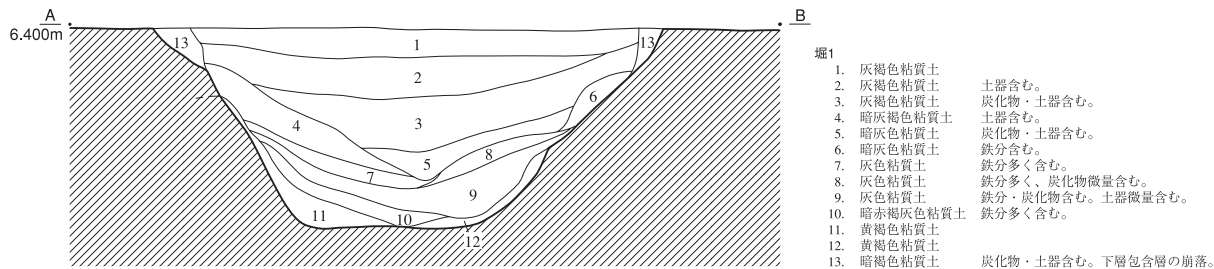
遺構名	地区	方位	幅(m)	深さ(m)	底の傾斜	出土遺物	備考	挿図No.
堀1	E~G12	N3° W	2.1~2.6	0.9~1.2	南方へ下降	土師質皿、青磁碗・瓶	堀2と交差、堀2に先行	第14・15図
堀2	H・I8~G・H15	N86° W	3.8~4.0	0.9~1.5	西方へ下降	土師質皿、越前焼甕・擂鉢、古瀬戸碗・鈿皿・天目碗、青磁碗、白磁破片	堀5と重複、堀5に先行	第14・15図
堀3	B1・2~H1・2	N5° W	3.5~4.4	1.3~1.5	南方へ下降	土師質皿、越前焼甕・擂鉢、青磁碗	南側で幅・深さとも拡大	第16・17図
堀4	F・G99~1(東西) F・G1~H1(南北)	N86° W(東西) N3° W(南北)	2.3~2.7(東西) 2.0~2.2(南北)	0.9~1.2(東西) 1.2~1.3(南北)	東方へ下降(東西)	土師質皿、越前焼甕・擂鉢、白磁皿	東西-南北方向に屈曲	第17図
堀5	H・I8~G・H15	EW	3.6~4.1	1.1	不明	土師質皿、青磁碗	堀2と重複	第14・15図
堀6	K・L22	N8° W	1.6~1.7	0.7	不明	土師質皿、越前焼		第18図
堀7	K21~23	N43° W	6.0~8.5	0.3~0.7	不明	越前焼鉢・擂鉢、青磁・白磁、土錘		第18図
堀8	K21~23	N5° W	5.0	0.3~0.4	不明	越前焼	堀7と重複、堀7に先行	第18図
堀9	J・K20	N6° W	2.5~2.8	1.0~1.1	不明	土師質皿、越前焼擂鉢、白磁皿、土錘		第18図

幅・深さの数値はすべて概測値

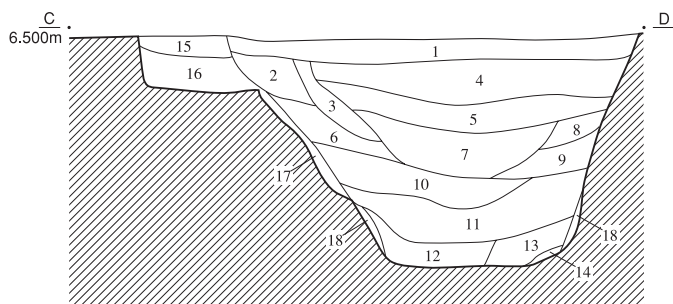


第14図 堀1・2・5実測図 (縮尺1/40)

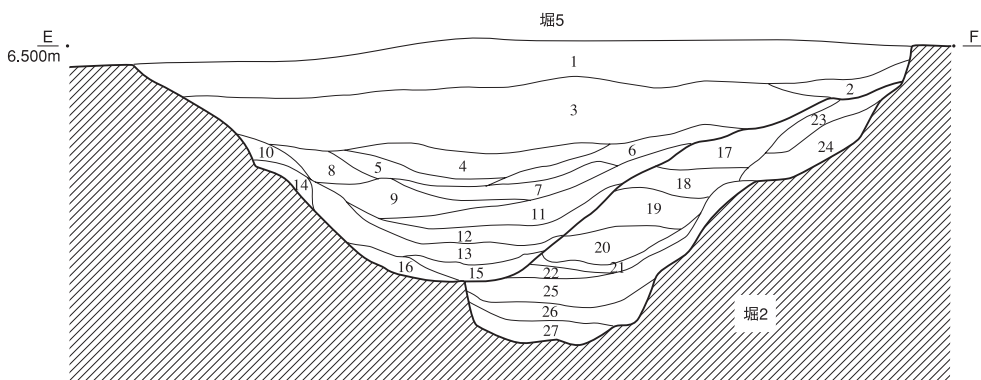
第4章 遺構



- 堀1
- 1. 灰褐色粘質土 土器含む。
 - 2. 灰褐色粘質土 炭化物・土器含む。
 - 3. 灰褐色粘質土 土器含む。
 - 4. 暗灰褐色粘質土 炭化物・土器含む。
 - 5. 暗灰褐色粘質土 鉄分含む。
 - 6. 暗灰色粘質土 鉄分多く含む。
 - 7. 灰色粘質土 鉄分多く、炭化物微量含む。
 - 8. 灰色粘質土 鉄分・炭化物含む。土器微量含む。
 - 9. 灰色粘質土 鉄分多く含む。
 - 10. 暗赤褐色粘質土 鉄分多く含む。
 - 11. 黄褐色粘質土
 - 12. 黄褐色粘質土
 - 13. 暗褐色粘質土 炭化物・土器含む。下層包含層の崩落。



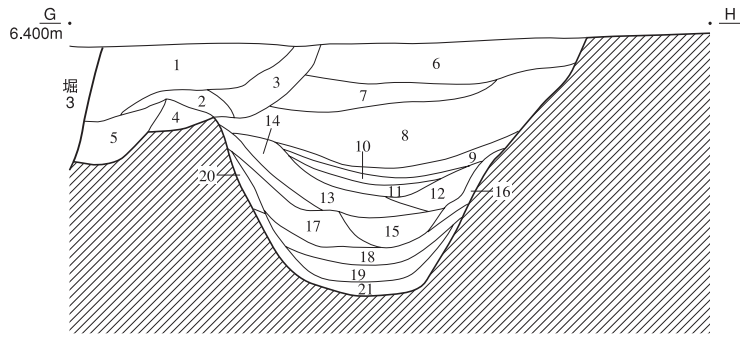
- 堀5
- 1. 灰褐色粘質土 土器微量含む。
 - 2. 暗灰褐色粘質土
 - 3. 黄白褐色粘質土
 - 4. 灰褐色粘質土
 - 5. 暗灰褐色粘質土 鉄分多く含む。
 - 6. 暗灰褐色粘質土 鉄分多く含む。
 - 7. 暗灰褐色粘質土 鉄分多く含む。
 - 8. 灰褐色粘質土 鉄分非常に多く含む。
 - 9. 暗灰褐色粘質土 鉄分・炭化物含む。
 - 10. 暗灰色粘質土 鉄分多く含む。
 - 11. 暗灰色粘質土 鉄分多く含む。
 - 12. 暗灰色粘質土 鉄分多く含む。
 - 13. 暗灰色粘質土 鉄分多く含む。
 - 14. 暗黄灰色砂質土 鉄分多く含む、一部赤褐色に変色。
 - 15. 灰褐色粘質土
 - 16. 黒褐色粘質土 下層包含層。
 - 17. 黄褐色粘質土 鉄分多く含む。地山。
 - 18. 黄白褐色粘質土 鉄分含む。地山。



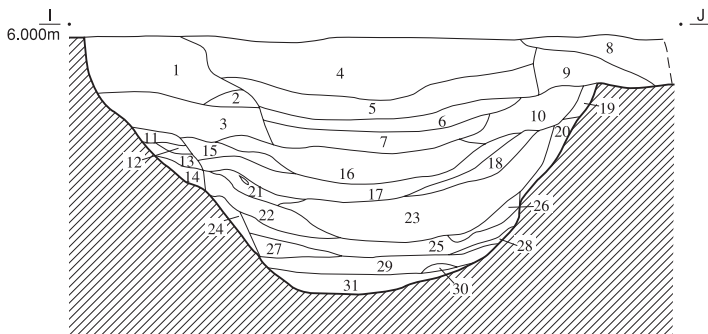
- 堀5、堀2
- 1. 茶褐色粘質土 炭化物・土器含む。
 - 2. 茶褐色粘質土
 - 3. 茶褐色粘質土 土器含む。
 - 4. 茶褐色粘質土
 - 5. 明灰褐色粘質土 炭化物含む。
 - 6. 明灰褐色粘質土
 - 7. 明灰褐色粘質土
 - 8. 灰色粘質土
 - 9. 明灰褐色粘質土
 - 10. 褐灰色粘質土
 - 11. 明灰褐色粘質土
 - 12. 明灰褐色粘質土
 - 13. 明灰褐色粘質土
 - 14. 赤褐色粘質土
 - 15. 暗灰色粘質土
 - 16. 青灰色粘質土
 - 17. 暗茶褐色粘質土
 - 18. 暗黄褐色粘質土 炭化物含む。
 - 19. 暗灰褐色粘質土 地山の崩落。
 - 20. 暗灰褐色粘質土
 - 21. 暗灰色粘質土
 - 22. 暗灰色粘質土
 - 23. 暗茶褐色粘質土
 - 24. 暗茶褐色粘質土
 - 25. 暗茶褐色粘質土
 - 26. 暗灰色粘質土 有機物多量に含む。
 - 27. 青灰色粘質土 砂質さみ。

0 2m

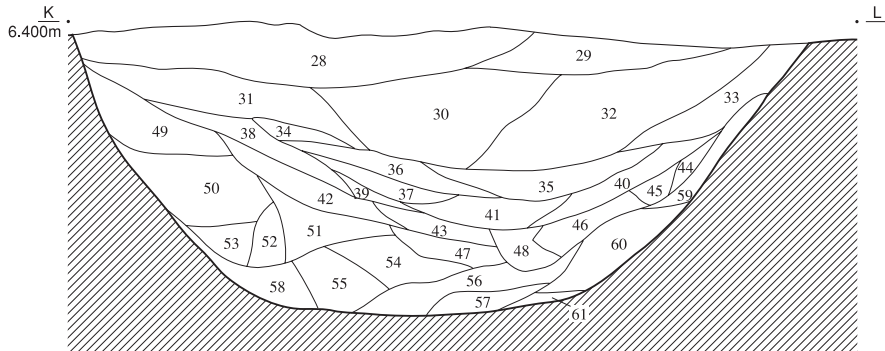
第15図 堀1・2・5断面図(縮尺1/40)



- 堀4
- 1. 暗茶褐色粘質土 炭化物若干含む。
 - 2. 暗茶褐色粘質土 炭化物やや多く含む。
 - 3. 暗茶褐色粘質土
 - 4. 暗黄褐色粘質土
 - 5. 暗灰褐色粘質土 炭化物やや多く含む。
 - 6. 暗灰褐色粘質土 炭化物若干含む。
 - 7. 暗青灰色粘質土 炭化物若干含む。
 - 8. 暗灰褐色粘質土 炭化物やや多く含む。
 - 9. 黄緑色粘質土
 - 10. 暗灰色粘質土
 - 11. 灰色粘質土 炭化物若干含む。
 - 12. 黄緑色シルト
 - 13. 暗灰色シルト
 - 14. 暗灰色粘質土 炭化物やや多く含む。
 - 15. 暗灰色シルト
 - 16. 明黄緑色シルト
 - 17. 黒灰色粘質土 炭化物やや多く含む。
 - 18. 黒灰色粘質土
 - 19. 黄褐色シルト
 - 20. 暗黄褐色粘質土
 - 21. 黄色シルト



- 堀4
- 1. 茶褐色粘質土 炭化物少量含む。
 - 2. 茶褐色粘質土
 - 3. 茶褐色粘質土 鉄分微量含む。
 - 4. 灰色粘質土 炭化物少量、土器含む。
 - 5. 灰褐色粘質土
 - 6. 褐色粘質土 鉄分少々含む。
 - 7. 茶褐色粘質土 鉄分少々含む。
 - 8. 灰茶褐色粘質土 小石・砂多量に混入。カクラン。
 - 9. 茶褐色粘質土
 - 10. 灰茶褐色土 鉄分多量、土器含む。
 - 11. 暗灰茶褐色粘質土
 - 12. 暗茶褐色粘質土
 - 13. 暗茶褐色粘質土
 - 14. 明黄色粘質土 鉄分少々含む。
 - 15. 灰褐色粘質土
 - 16. 淡青灰褐色粘質土 炭化物微量含む。
 - 17. 青灰褐色粘質土 炭化物含む。
 - 18. 灰茶褐色粘質土 鉄分少々含む。
 - 19. 茶褐色粘質土
 - 20. 暗茶褐色粘質土
 - 21. 淡青灰褐色粘質土 鉄分・土器少々含む。
 - 22. 淡青灰褐色粘質土 鉄分多く含む。
 - 23. 淡青灰褐色粘質土
 - 24. 明黄色粘質土 鉄分少々含む。
 - 25. 暗青灰褐色粘質土 鉄分多量含む。
 - 26. 暗青灰褐色粘質土 土器含む。
 - 27. 暗青灰褐色粘質土 鉄分少々含む。
 - 28. 淡灰色粘質土 鉄分多量含む。
 - 29. 淡黄灰色粘質土 鉄分少々含む。
 - 30. 淡黄白色粘質土
 - 31. 淡黄白色粘質土 鉄分含み、全体に赤い。



- 堀3
- 28. 暗灰褐色粘質土 炭化物若干含む。
 - 29. 暗灰褐色粘質土
 - 30. 灰褐色粘質土 炭化物若干含む。
 - 31. 灰色粘質土
 - 32. 暗灰褐色粘質土 炭化物若干含む。
 - 33. 黒褐色粘質土 炭化物やや多く含む。
 - 34. 灰色粘質土 炭化物若干含む。
 - 35. 暗灰色粘質土 炭化物若干含む。
 - 36. 暗灰色粘質土 炭化物若干含む。
 - 37. 灰色シルト 炭化物若干含む。
 - 38. 灰色粘質土
 - 39. 黒灰色粘質土 炭化物若干含む。
 - 40. 暗茶褐色粘質土
 - 41. 灰色粘質土
 - 42. 暗黄褐色粘質土 炭化物やや多く含む。
 - 43. 暗灰色粘質土 炭化物やや多く含む。
 - 44. 暗黄褐色粘質土
 - 45. 暗茶褐色粘質土
 - 46. 暗黄褐色粘質土
 - 47. 暗黄灰色シルト
 - 48. 暗灰色粘質土 炭化物やや多く含む。
 - 49. 暗黄褐色粘質土
 - 50. 暗茶褐色粘質土 炭化物若干含む。
 - 51. 灰色粘質土 炭化物やや多く含む。
 - 52. 黄褐色粘質土
 - 53. 暗灰色粘質土
 - 54. 暗灰色粘質土 炭化物若干含む。
 - 55. 暗黄灰色粘質土
 - 56. 暗黄灰色粘質土
 - 57. 黒灰色粘質土
 - 58. 黄褐色シルト
 - 59. 黄褐色粘質土
 - 60. 黄褐色シルト
 - 61. 暗黄灰色シルト

0 2m

第17図 堀3・4断面図 (縮尺1/40)

Ⅲ 井戸

井戸は総数で38基を検出した。以下、主要なものについてのみ概述する。

井戸1（第19図）は、前述のとおり、上屋建物（掘立柱建物3）を伴うと考えられ、I区では最大の規模を有する。

井戸7（第21図）は堀1の底面に位置するが、遺構検出面上で視認できなかったため、堀1に先行して掘られたものと判断される。断面を観察すると、底部近くで壁面が大きく崩落した痕跡が見られるため、本来の規模はこれよりも一回り小さかったものと考えられる。

井戸17（第24図）は曲物の井戸枠を有し、周囲に支え板が入る。底面西側の半円形の落ち込みは、井戸枠検出時の試掘坑であり、井戸の掘り方が二段構造になっているわけではない。調査区北際での検出であったため、遺構断面の高さが地表面までを含めると3m近くにもなり、安全面での懸念から、井戸枠取り上げ等の作業を断念した。断面図が不明瞭なのはそのためである。

井戸23・24・26・29・30（第26図）は、調査の進捗に応じて遺構番号を付したが、密集状況から推測して、それぞれ別個に掘削したものではなく、同じ場所で繰り返し掘削された可能性が高い。井戸29は井戸24の底部をさらに一段掘り下げたような状態で、井戸枠を設置した痕跡の可能性もあり、基本的には井戸24と同一遺構とみなすべきであろう。

井戸20・21・27（第27図）の断面図は井戸21と井戸27にかかるが、両遺構の切り合いは不明瞭で、一様に埋没したように見える。規模の大きい井戸27が主たる井戸であろうと考えられるが、埋没状況から推測すると、井戸21は先行して掘削後、放置されたか、あるいは井戸27を補助する目的で後から掘削されたか、いずれにせよ、ほぼ同時期に併存していた可能性が高い。

井戸33（第27図）では、井戸枠と思われる曲物が底面近くで出土したが、少量の断片が散在するのみで、原位置を保った状況とは考えられず、ここでは提示しなかった。

第3表 井戸一覧表

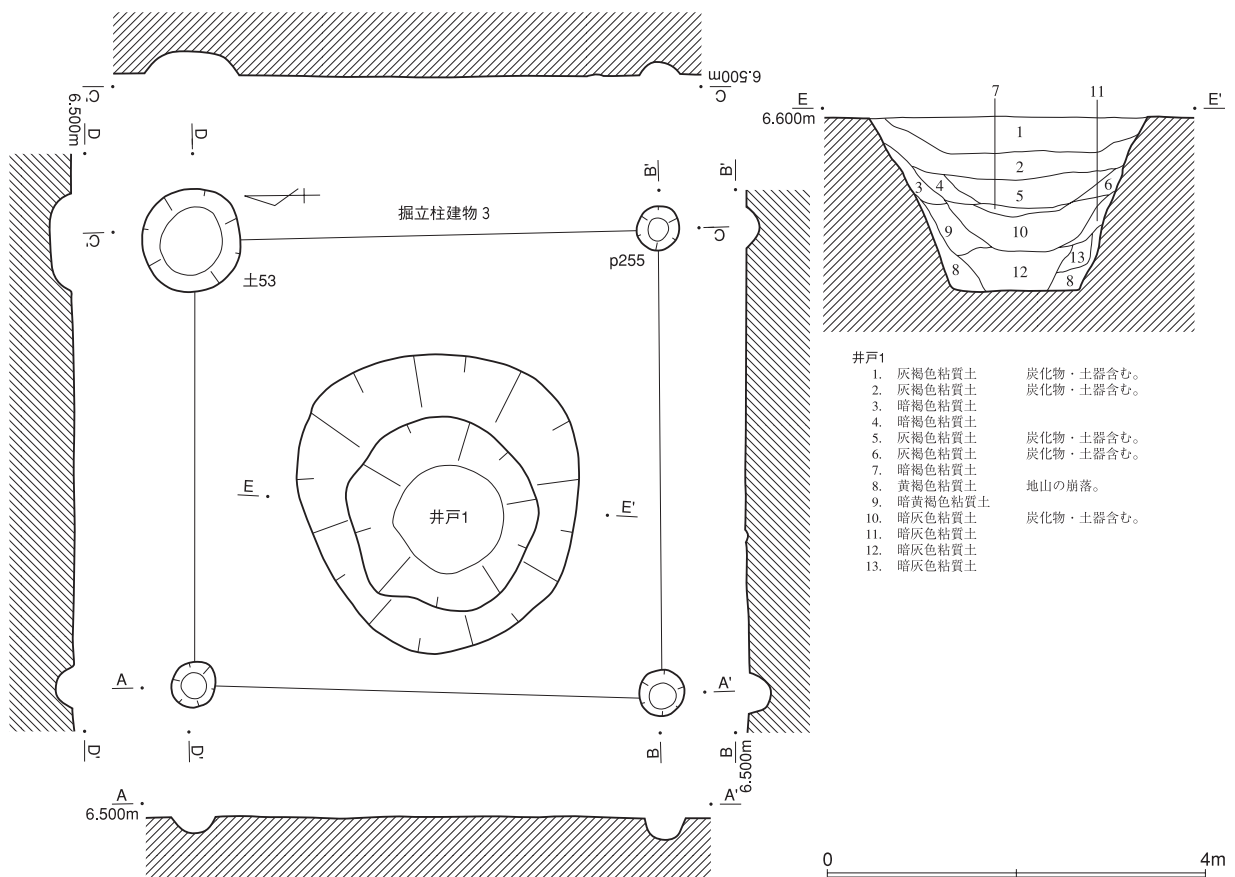
遺構名	地区	平面形状	平面規模(m)	深さ(m)	井戸枠	出土遺物	備考	挿図No.
井戸1	E・F4~5	偏円形	3.2×3.0	1.9	未検出	土師質皿	上屋建物を伴う	第19図
井戸2	F9	楕円形	1.7×1.6	1.9	未検出	土師質皿、越前焼		第20図
井戸3	D・E10	—	2.6(最大径)	1.2	未検出	土師質皿、弥生土器(下層遺物)	北半部のみ。下層遺物多量混入	第20図
井戸4	G11	楕円形	1.3×1.1	1.5	未検出			—
井戸5	F12	楕円形	1.3×1.0	1.7	未検出	土師質皿	堀1に先行	—
井戸6	F13~14	楕円形	1.6×1.4	1.5	未検出			第21図
井戸7	G12	歪円形	1.7(直径)	2.3	未検出	土師質皿	堀1に先行	第21図
井戸8	F・G9~10	楕円形	0.9×0.8	1.3	未検出	土師質皿		第22図
井戸9	E10	楕円形	1.3×1.0	1.7	未検出	土師質皿		第22図
井戸10	B4	—	1.0(最大径)	1.3	未検出		北半部のみ	第23図
井戸11	B・C3	楕円形	2.1(最大径)	1.8	未検出	土師質皿	井戸13と切り合い	第23図
井戸12	F1	楕円形	1.5×1.2	1.8	未検出			第24図
井戸13	B・C3	楕円形	1.4(最大径)	1.5	未検出	土師質皿、越前焼	井戸11と切り合い	第23図
井戸14	B3	楕円形	0.8×0.7	1.5	未検出			第23図
井戸15	F13	歪円形	0.9(最大径)	0.9	未検出		下層調査時に検出	—
井戸16	H11	円形	0.8(直径)	0.8	未検出		下層調査時に検出	—
井戸17	G99~100	—	2.8(最大径)	1.2	曲物枠	土師質皿	未完掘	第24図
井戸18	J12	偏円形	1.4(直径)	1.7	未検出	瓦質浅鉢、古瀬戸(天目碗)		第25図
井戸19	H13	楕円形	1.6×1.4	1.4	未検出			第25図
井戸20	L24	円形	0.8(最大径)	1.3	未検出	土師質皿、越前焼	井戸21・27と切り合い	第27図
井戸21	L24	不明	—	1.0	未検出	越前焼(槽鉢)	井戸20・27と切り合い	第27図
井戸22	M25	偏円形	1.5(直径)	1.9	未検出	土師質皿、須恵器、越前焼		第26図

平面規模・深さの数値はすべて概測値

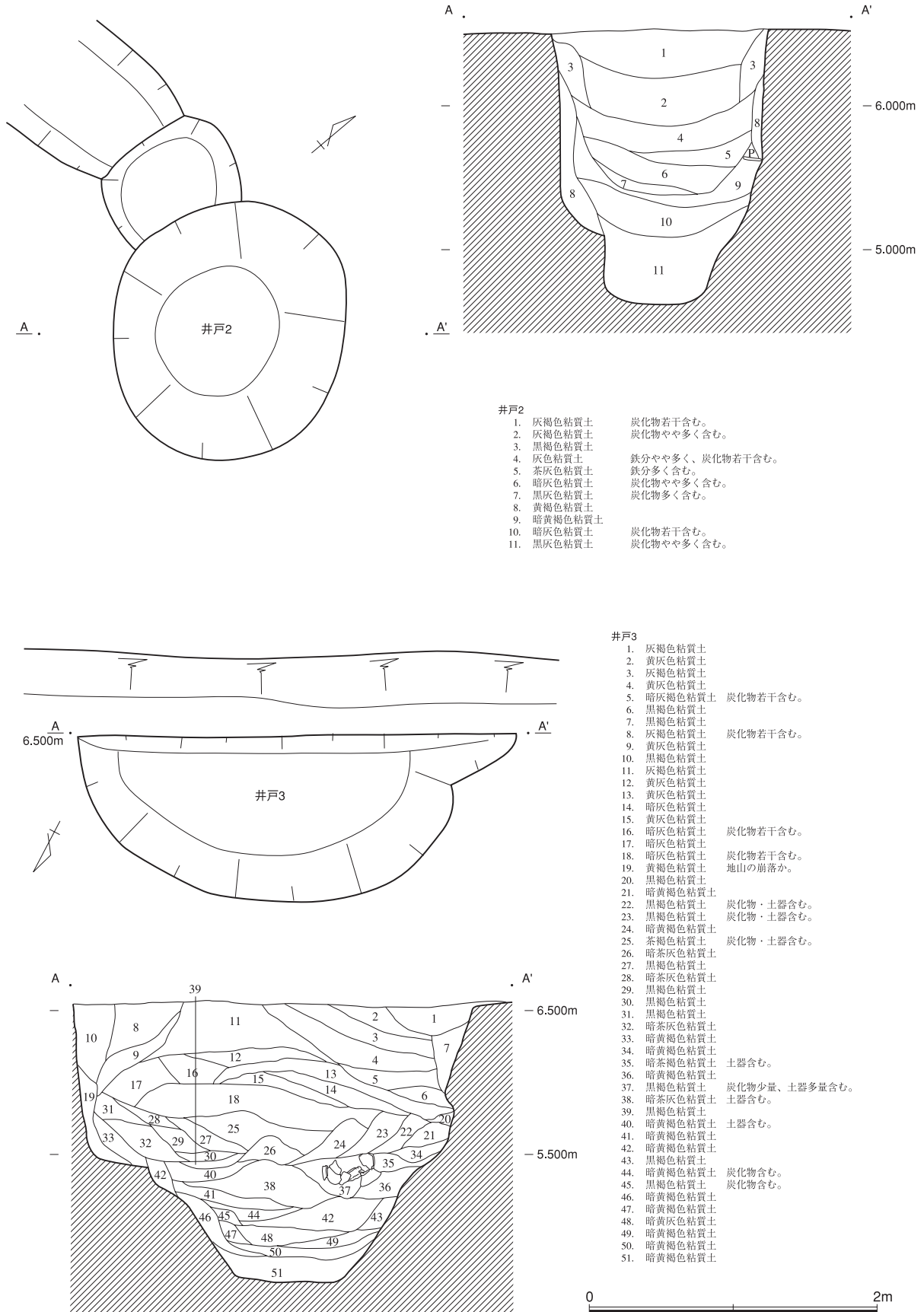
第1節 遺構

遺構名	地区	平面形状	平面規模(m)	深さ(m)	井戸枠	出土遺物	備考	挿図No.
井戸23	L・M24～25	偏円形	1.7(最大径)	1.4	未検出	土師質皿、土錘、須恵器、越前焼(播鉢)	井戸24と切り合い	第26図
井戸24	L・M24～25	楕円形	2.1(最大径)	1.8	未検出	越前焼	井戸23と切り合い	第26図
井戸25	L23～24	楕円形	1.1×0.9	1.5	未検出	越前焼(播鉢)、天目碗		—
井戸26	L・M24～25	ほぼ円形	1.0(直径)	1.8	未検出	越前焼(播鉢)		第26図
井戸27	L24	円形	1.8(直径)	1.7	未検出	土師質皿、越前焼(壺口縁・播鉢)	井戸20・21と切り合い	第27図
井戸28	M25	楕円形	0.9×0.8	1.1	未検出	土師質皿(破片)、白磁(破片)		—
井戸29	L・M24～25	—	—	—	未検出	土師質皿、越前焼(破片)、白磁	井戸24の底の段差部分	—
井戸30	L・M24～25	—	1.2(最大径)	1.4	未検出	土師質皿(破片)、須恵器(甕・杯)、越前焼、白磁	南半部のみ	第26図
井戸31	M25	円形	1.0(最大径)	1.6	未検出	—	西半部のみ	—
井戸32	J19～20	楕円形	1.4×1.1	1.7	未検出	土師質皿、須恵器、越前焼	堀9と切り合う	第27図
井戸33	I18	円形	1.0(直径)	1.6	曲物枠	土師質皿、越前焼	曲物は断片のみ	第27図
井戸34	M24	楕円形	1.5×1.1	—	未検出	越前焼播鉢、青磁、陶器皿(漆接合跡)	下層調査時に検出	—
井戸35				—	未検出	—	下層調査時に検出	—
井戸36				—	未検出	—	下層調査時に検出	—
井戸37	—	—	—	—	—	—	欠番(井戸30と同じ遺構)	—
井戸38	K23	楕円形	1.0×0.9	1.3	未検出	—	下層調査時に検出	第27図
井戸39	L23	円形	0.9(直径)	1.0	未検出	—	下層調査時に検出	—

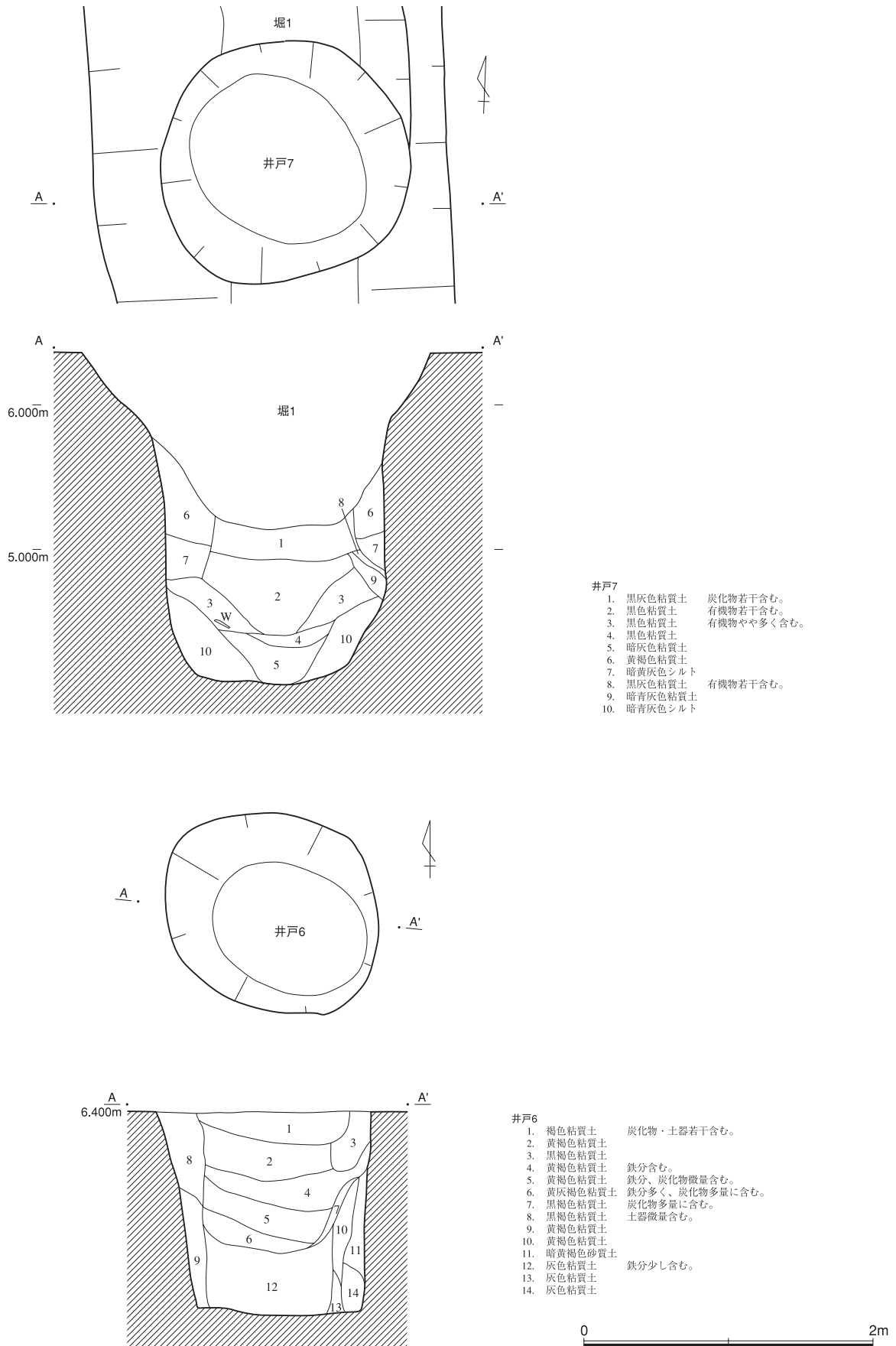
平面規模・深さの数値はすべて概測値



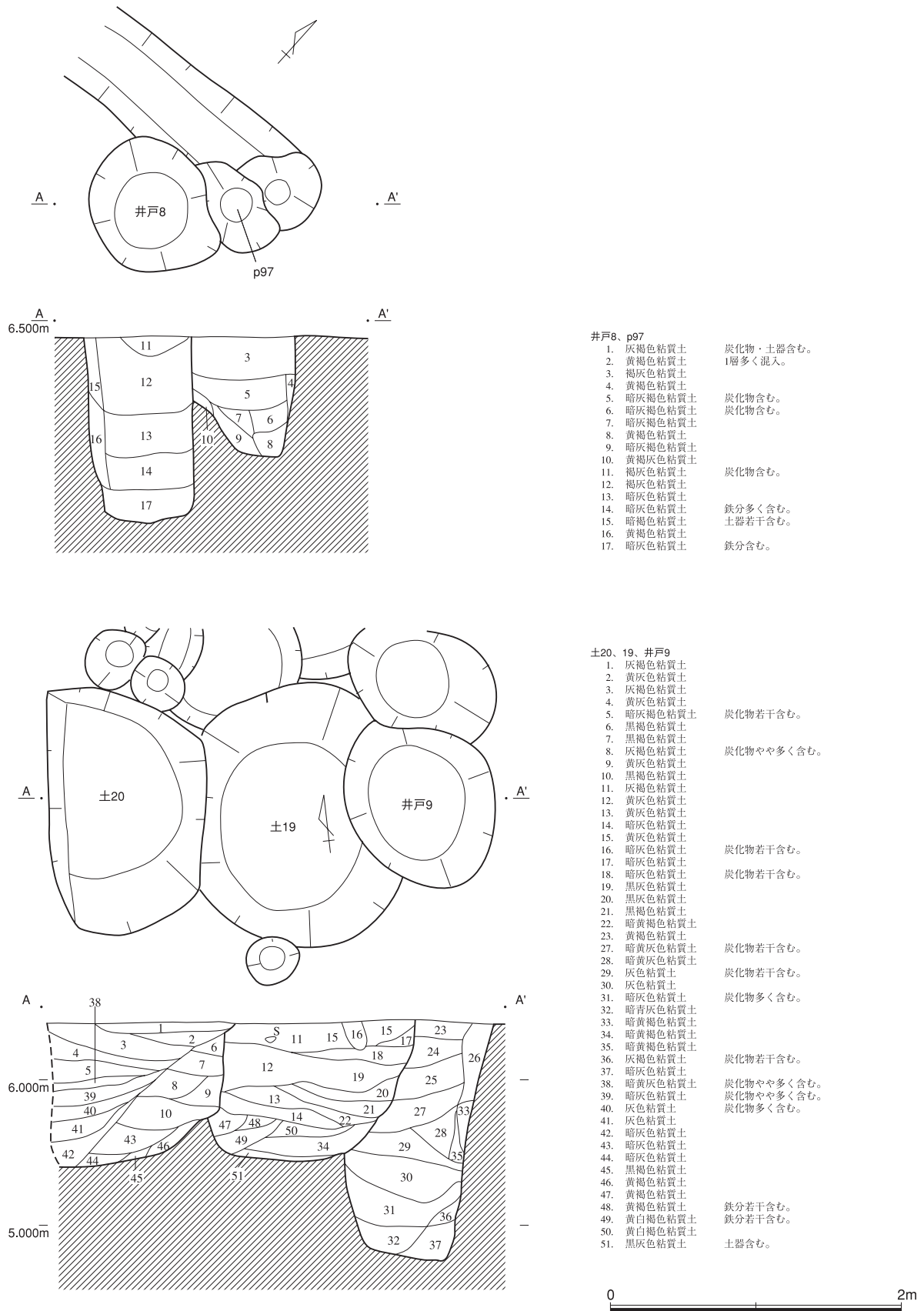
第19図 井戸1・掘立柱建物3実測図(縮尺1/80)



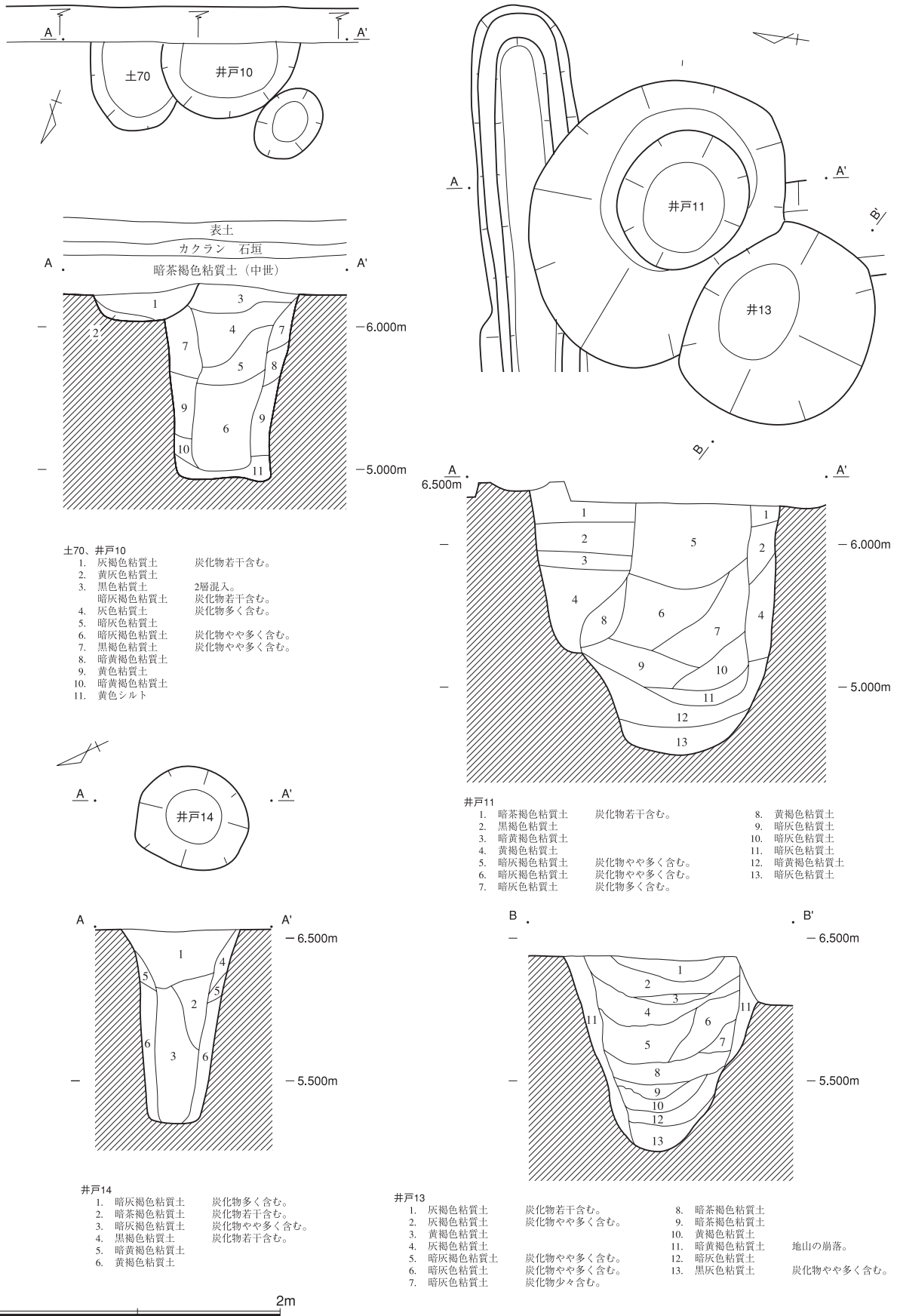
第20図 井戸2・3実測図(縮尺1/40)



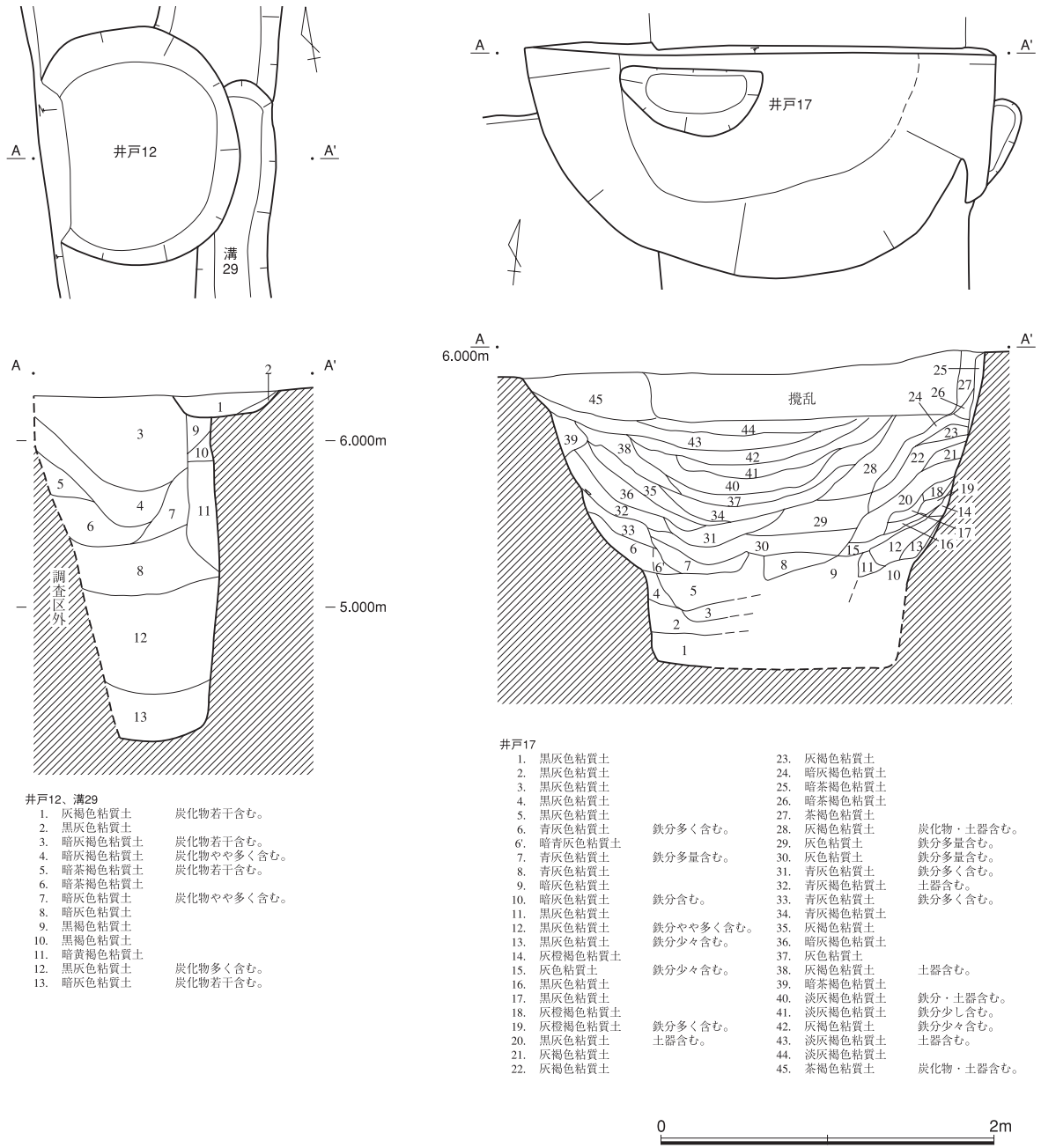
第21図 井戸6・7実測図(縮尺1/40)



第22図 井戸8・9実測図 (縮尺1/40)



第23図 井戸10・11・13・14実測図 (縮尺1/40)



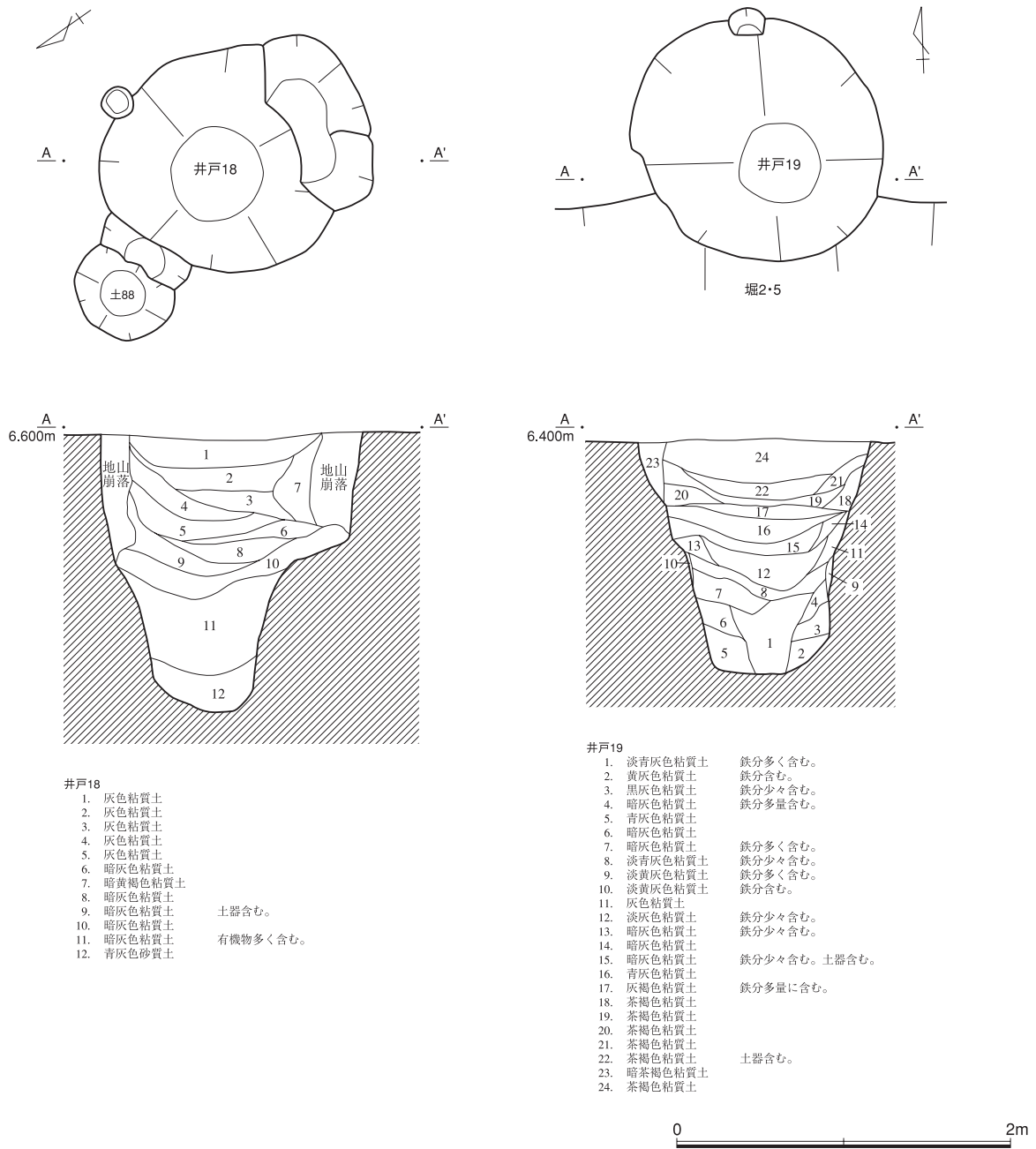
井戸12、溝29

- | | |
|-------------|------------|
| 1. 灰褐色粘質土 | 炭化物若干含む。 |
| 2. 黒灰色粘質土 | |
| 3. 暗灰褐色粘質土 | 炭化物若干含む。 |
| 4. 暗灰褐色粘質土 | 炭化物やや多く含む。 |
| 5. 暗茶褐色粘質土 | 炭化物若干含む。 |
| 6. 暗茶褐色粘質土 | |
| 7. 暗灰色粘質土 | 炭化物やや多く含む。 |
| 8. 暗灰色粘質土 | |
| 9. 黒褐色粘質土 | |
| 10. 黒褐色粘質土 | |
| 11. 暗黄褐色粘質土 | |
| 12. 黒灰色粘質土 | 炭化物多く含む。 |
| 13. 暗灰色粘質土 | 炭化物若干含む。 |

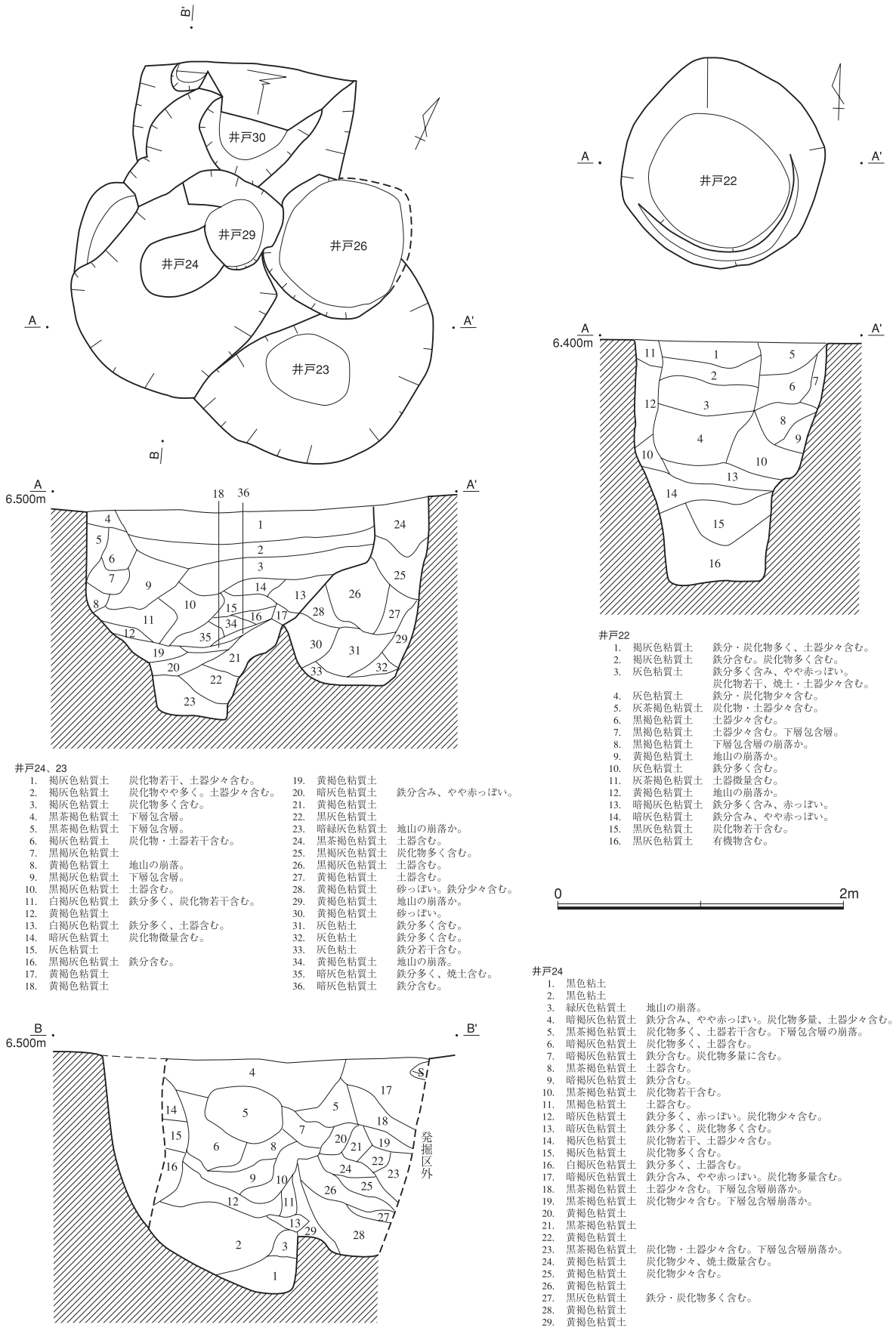
井戸17

- | | | |
|-------------|-------------|-----------|
| 1. 黒灰色粘質土 | 23. 灰褐色粘質土 | |
| 2. 黒灰色粘質土 | 24. 暗灰褐色粘質土 | |
| 3. 黒灰色粘質土 | 25. 暗茶褐色粘質土 | |
| 4. 黒灰色粘質土 | 26. 暗茶褐色粘質土 | |
| 5. 黒灰色粘質土 | 27. 茶褐色粘質土 | |
| 6. 青灰色粘質土 | 28. 灰褐色粘質土 | 炭化物・土器含む。 |
| 7. 青灰色粘質土 | 29. 灰色粘質土 | 鉄分多量含む。 |
| 8. 青灰色粘質土 | 30. 灰色粘質土 | 鉄分多量含む。 |
| 9. 暗灰色粘質土 | 31. 青灰色粘質土 | 鉄分多く含む。 |
| 10. 暗灰色粘質土 | 32. 青灰褐色粘質土 | 土器含む。 |
| 11. 黒灰色粘質土 | 33. 青灰色粘質土 | 鉄分多く含む。 |
| 12. 黒灰色粘質土 | 34. 青灰褐色粘質土 | |
| 13. 黒灰色粘質土 | 35. 灰褐色粘質土 | |
| 14. 灰橙褐色粘質土 | 36. 暗灰褐色粘質土 | |
| 15. 灰色粘質土 | 37. 灰色粘質土 | |
| 16. 黒灰色粘質土 | 38. 灰褐色粘質土 | 土器含む。 |
| 17. 黒灰色粘質土 | 39. 暗茶褐色粘質土 | |
| 18. 灰橙褐色粘質土 | 40. 淡灰褐色粘質土 | 鉄分・土器含む。 |
| 19. 灰橙褐色粘質土 | 41. 淡灰褐色粘質土 | 鉄分少々含む。 |
| 20. 黒灰色粘質土 | 42. 灰褐色粘質土 | 鉄分少々含む。 |
| 21. 灰褐色粘質土 | 43. 淡灰褐色粘質土 | 土器含む。 |
| 22. 灰褐色粘質土 | 44. 淡灰褐色粘質土 | |
| | 45. 茶褐色粘質土 | 炭化物・土器含む。 |

第24図 井戸12・17実測図 (縮尺1/40)

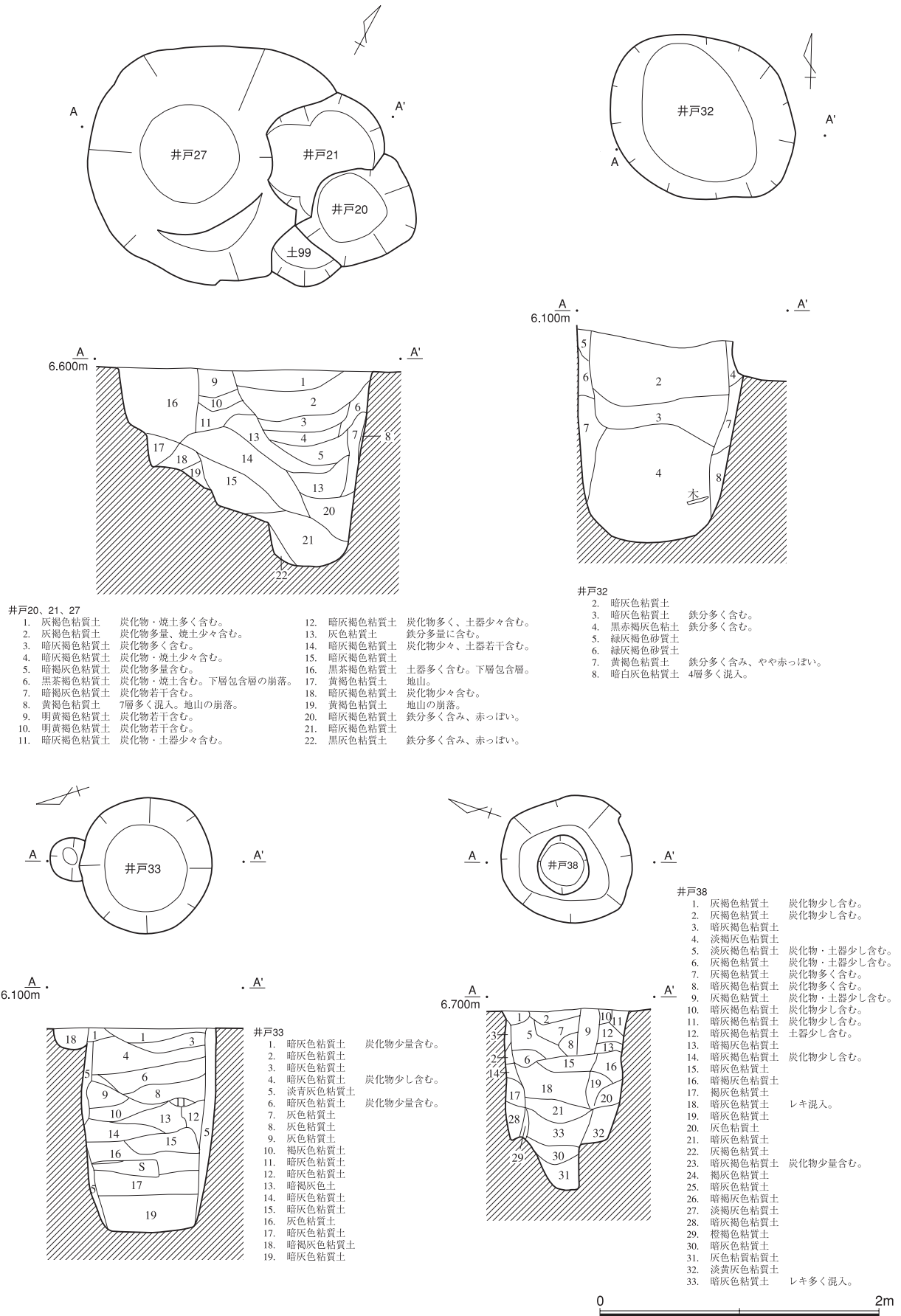


第25図 井戸18・19実測図（縮尺1/40）



第26図 井戸22・23・24・26・29・30実測図 (縮尺1/40)

第1節 遺構



第27図 井戸20・21・27・32・33・38実測図（縮尺1/40）

IV その他の遺構

その他の遺構として、溝37条、土坑101基、ピット452基（いずれも遺物を検出したもののみ）をそれぞれ検出した。ただし、すでに述べたように、遺構遺物の出土量自体少なく、出土状況や遺構自体についても、特記すべきものはほとんどない。よって、ここでは特に注目すべきと考えられる土坑51のみ提示し、次章で出土遺物を図示する他の遺構については、一覧表をもって記述に代えたい。

(1) 土坑51

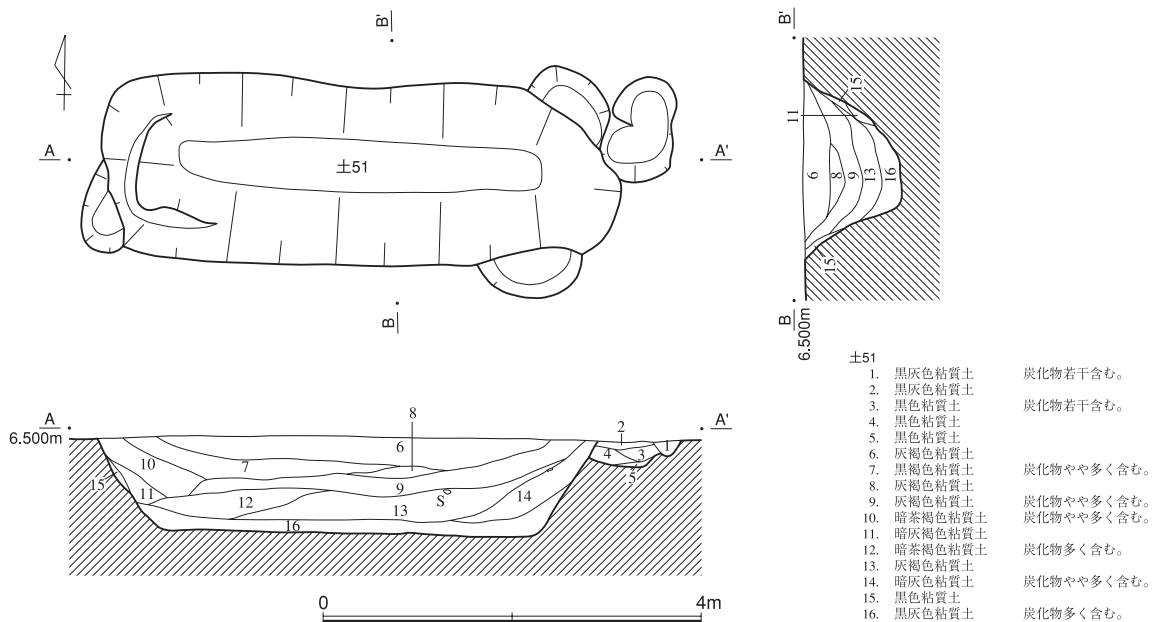
F・G4～5区で検出した（第28図）。平面形状は隅丸長方形に近い長楕円形、断面形状は長軸・短軸いずれも舟形を呈する。長径5.6m、短径2.0m、深さ1.5mを測り、堀以外では、I区で最大の部類に入る遺構である。方位は長軸方向でEW、すなわち東西方向を向く。

なお、この土坑51と前述の井戸1・掘立柱建物3を、コの字形にとり囲むように廻っている溝（溝19、第11図参照）は、近年まで当地にあった白山神社拝殿の基壇跡で、中世遺構ではない。

遺物は土師質皿が多く、ほかに青磁碗・大皿・小鉢、古瀬戸花瓶などが出土した。

第4表 主要土坑一覧表

No.	遺構名	地区	平面形状	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考	挿図No.
1	土坑20	E9・10	楕円形	168×108	100	土師質皿	半部のみ	第22図
2	土坑37	F6	楕円形	74×68	10	播鉢		—
3	土坑38	H8・9	偏方形	170×150	47	土師質皿		—
4	土坑51	F・G5	長楕円形	560×200	150	土師質皿、青磁碗・大皿・八角小鉢、古瀬戸花瓶		第28図
5	土坑71	G5	隅丸長方形	200×148	20	土師質皿		—
6	土坑77	C1	楕円形	—	33	土師質皿	一部のみ。溝30の壁面か。	—
7	土坑78	C1	楕円形	—	46	土師質皿	一部のみ。溝30の壁面か。	—
8	土坑82	G1	—	—	—	土師質皿、青磁小皿	堀41と同じ	—
9	土坑87	J12	偏円形	86×72	97	土師質皿		—
10	土坑88	J・I12	偏円形	64×46	90	土師質皿		第25図
11	土坑91	K23	楕円形	88×74	70	古瀬戸平碗、青磁碗		—
12	土坑96	L23・24	長楕円形	275×104	18	土師質皿		—



第28図 土坑51実測図（縮尺1/80）

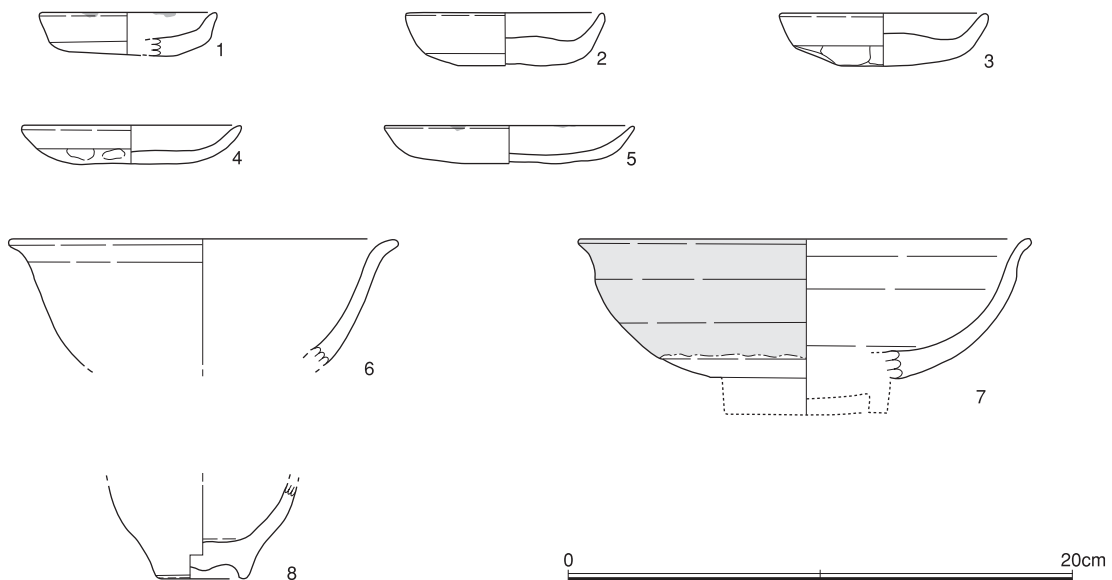
第5章 遺物

第1節 土器 [図版第12~17、第29~37図、第5表]

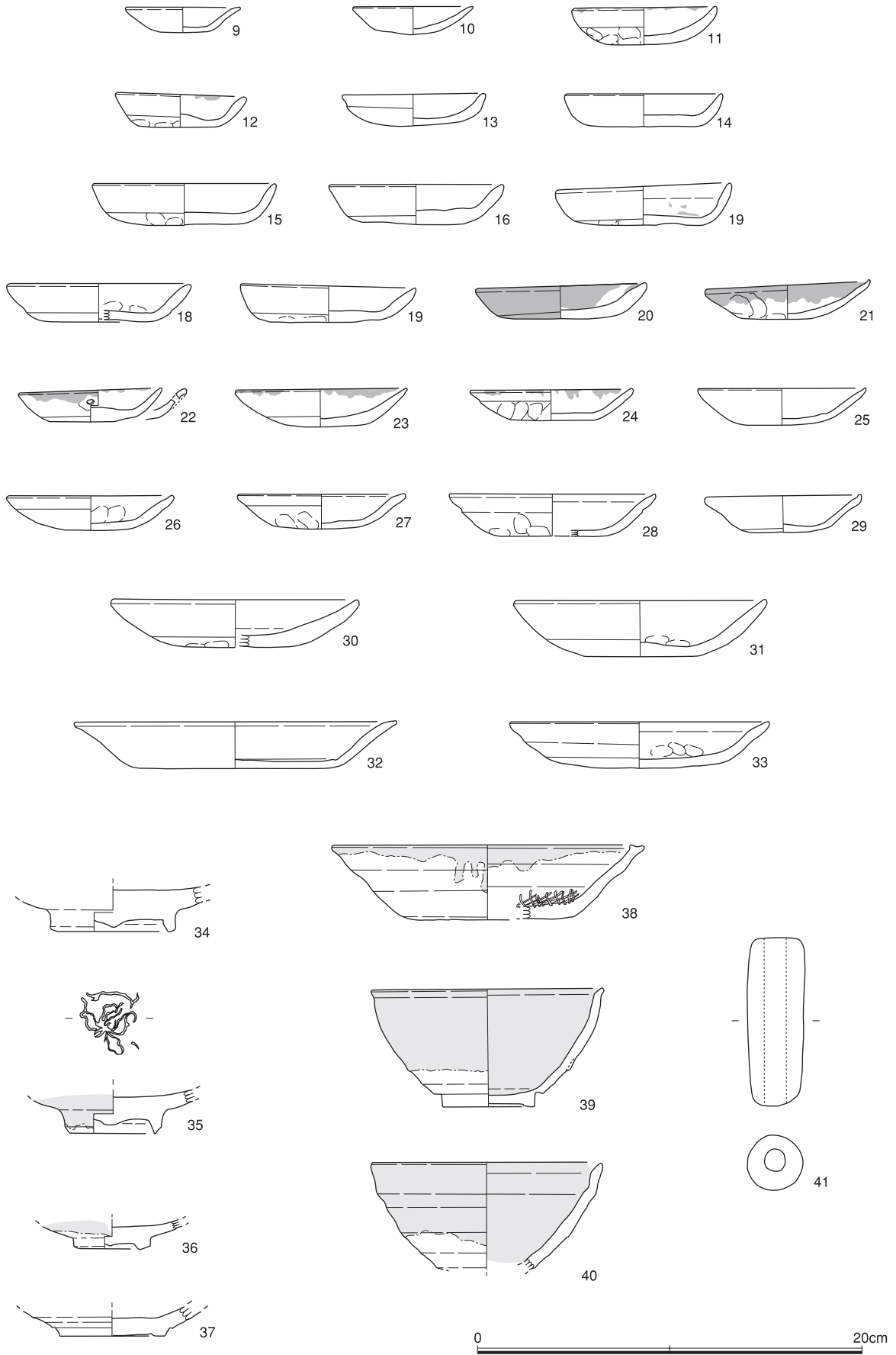
I区上層遺構調査では、主に中世遺物が出土した。本節では遺構出土土器を中心に取り上げる。

1~8は堀1から出土した。1~5は土師質皿である。いずれも口径が8.0~9.0cmの小皿である。1~3は、底部と口縁の境が明瞭で、1は立ち上がりが短く、13世紀前半、2・3は立ち上がりがやや長く、15世紀中頃の所産と見られる。底部の器壁は厚い。4は底部から緩やかに立ち上がり、器壁が薄い。6~8は青磁である。6・7は碗である。ともに口縁端部は外反する。7の外面はケズリ痕が明瞭に残り、灰緑色でガラス質の釉は、外面腰部以下が露胎となる。上田分類D類である。8は瓶の底部である。釉は全面に施され、高台畳付のみ拭き取る。

9~41は堀2から出土した。9~33は土師質皿である。9~29は小皿、30~33は大皿に区分できる。11・23は器壁が厚く、口縁部が底部から緩やかに立ち上がり、丸みを帯びた器形を呈する。一段ナデを施す。12~20・22は全体に器壁が厚く、平坦な底部から、見込脇を押えて口縁を上方に立ち上げる。一段ナデを施す。21・24~29は器壁が薄く、見込から口縁外部をナデで口縁をやや外反させ、端部を上方に引き上げる。33は広めの底部から体部が緩やかに立ち上がり、口縁が外反する。二段ナデを施す。30・31は器壁が厚く、体部が見込から緩やかに立ち上がる。一段ナデを施す。32は器壁が薄く、平坦で広い見込から、口縁が外反しながら立ち上がる。見込脇から外面口縁下にかけて一段ナデを施す。20~24は灯明皿として使用されている。22の口縁部には内面から外に向かう穿孔が一ヶ所確認できる。穿孔は付着している煤の上から施されており、灯明皿として使用されたのち、再利用されたものと考えられる。33は15世紀前半から中頃、11~20・22・23・30・31は15世紀中頃、21・24~28は15世紀後半から16世紀前半、9・10・21・29・32は16世紀前半の所産と見られる。34・35は青磁碗である。ともに削り出し成形された高台は、畳付以内を露胎とする。35の見込には印花文が施され、高台内に目痕が残る。36は白磁皿である。削り出し輪高台の陶質の皿で、白濁釉が施され、外面高台脇以下は露胎である。森田分類D群である。37~39は古瀬戸である。37は平碗である。38は卸皿である。体部は直線的に開き、口縁部



第29図 堀1出土土器実測図(縮尺1/3)

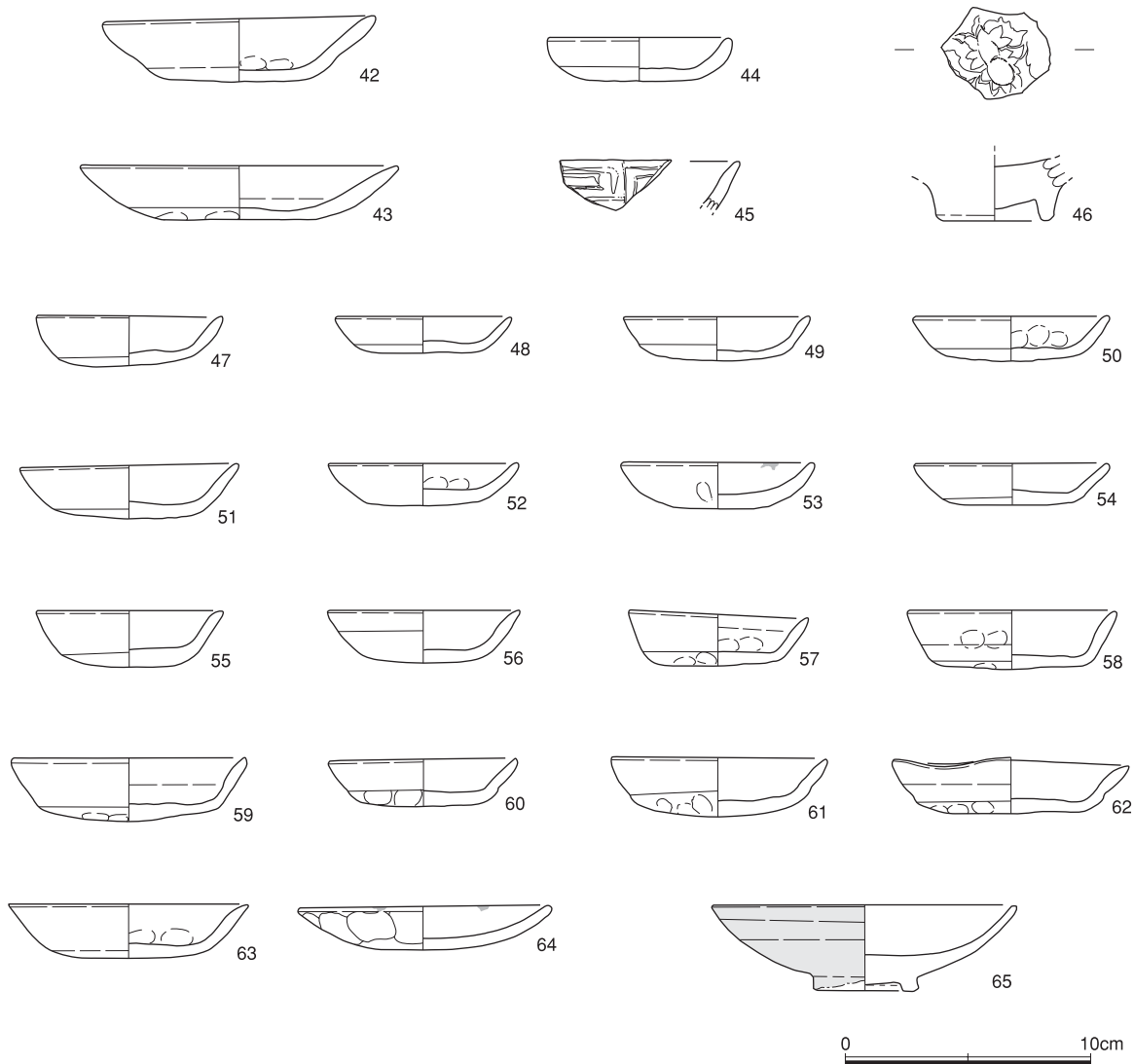


第30図 堀2出土土器実測図（縮尺1/3）

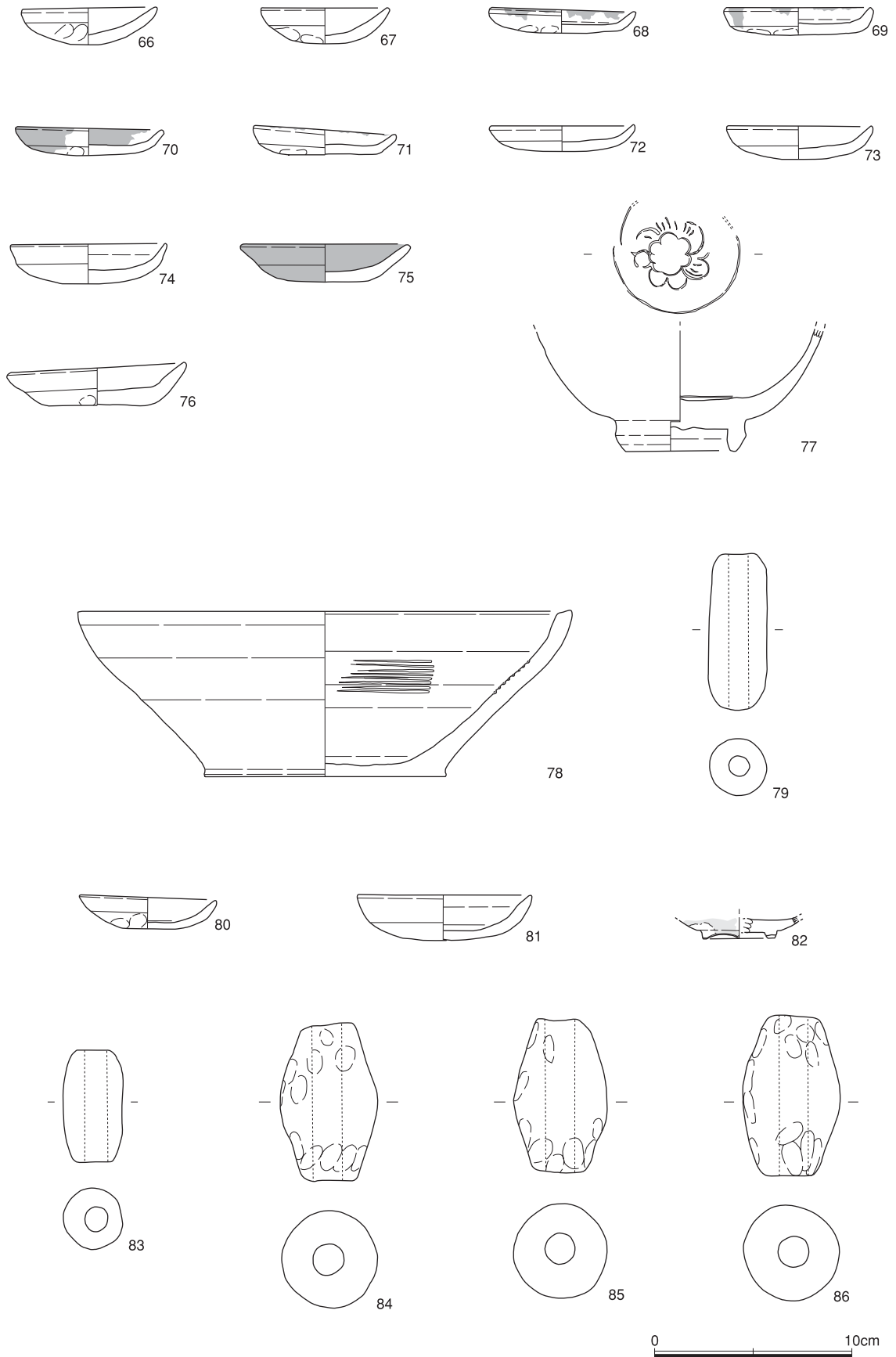
内側には小突起が形成される。口縁部内外面にのみ施釉される。底部は糸切り痕が残る。藤澤編年後Ⅲ期と判断する。39は天目碗である。丸みを帯びた器形をし、口縁端部は短く外反する。底部は削り出し輪高台で、外面腰部以下は錆釉が施される。藤澤編年後Ⅳ期新と判断する。40は中国製天目茶碗である。やや直線的な器形で口縁部は上方に屈曲し、端部は断面三角形に仕上げる。41は土錘である。筒形に成形され、土師質である。

42～46は堀3から出土した。42～44は土師質皿である。42は、見込の立ち上がり部を内側から押えて体部を外反させ、口縁端部を丸く収める。14世紀後半の所産と見られる。43は平たく狭い見込を持つ底部から、厚手の体部が緩やかに丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部にかけて薄く仕上げる。44は小皿である。43・44は15世紀中頃の所産と見られる。45・46は青磁碗である。45は口縁部外面に雷文帯が巡る。46は見込に印花文を持つ。外底部の高台内は釉が拭き取られ、目痕が残る。

47～65は堀4から出土した。47～64は土師質皿である。47～63は底部と口縁部との境が明瞭で、口縁部には一段ナデを施す。15世紀中頃の所産と見られる。64は近世の所産である。65は白磁皿である。小振りの高台を持つ底部から体部を緩く内弯させながら立ち上げ、口縁端部を丸く収める。細かい貫入の



第31図 堀3・4出土土器実測図（縮尺1/3）



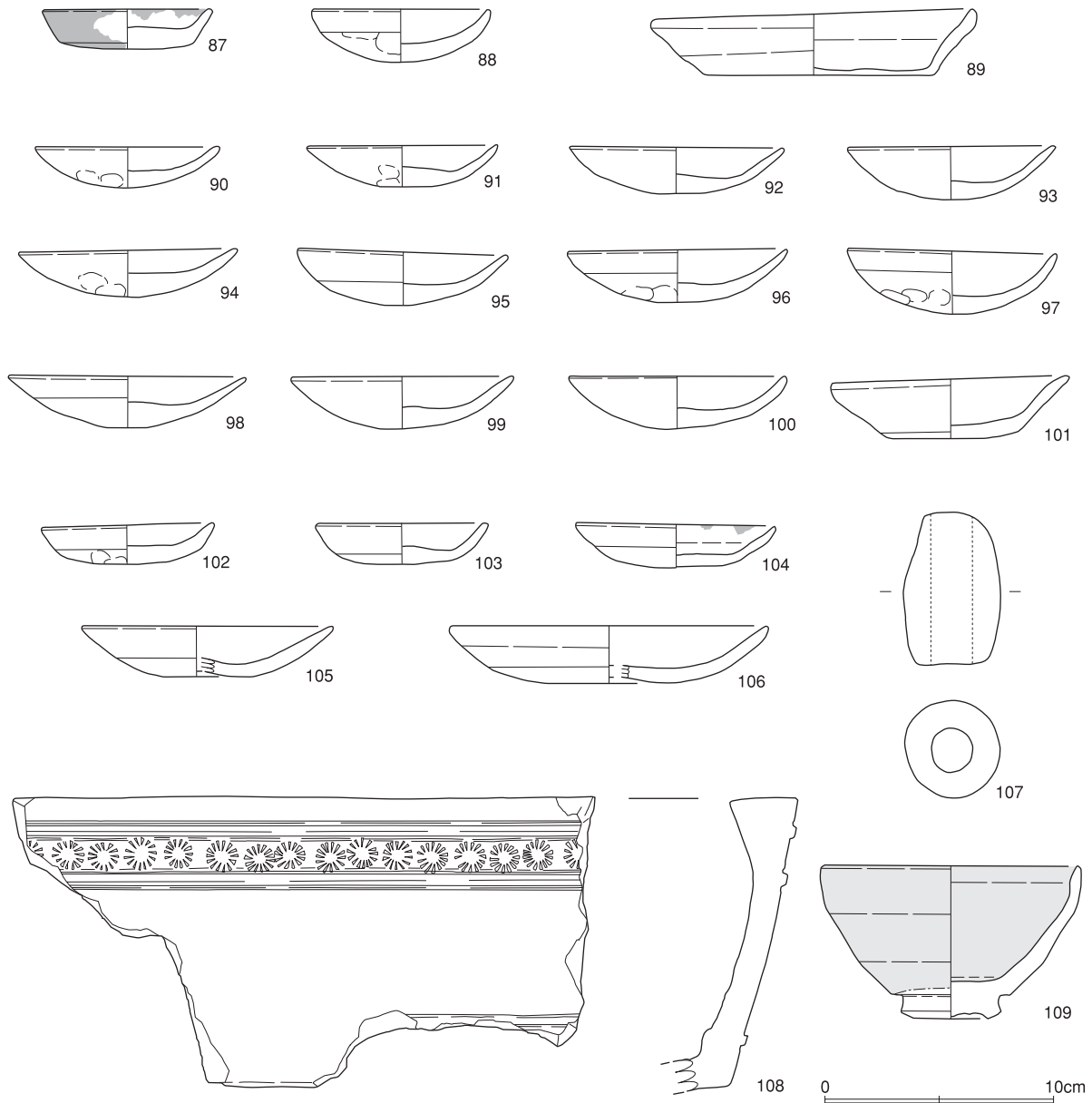
第32図 堀5・7・9出土土器実測図(縮尺1/3)

ある釉は、高台脇まで施される。見込には研磨された砂目痕が残る。森田分類B群である。

66～77は堀5から出土した。66～76は土師質皿である。一段ナデを施す。66・67は丸みを帯びたもの、68～73は底部と口縁部の境が明瞭で、口縁部が短く立ち上がるもの、74は同形で口縁部の立ち上がりがやや長いもの、75・76は口縁部が外反するものである。75・76は15世紀中頃から後半、66～74は15世紀後半の所産と見られる。77は青磁碗である。見込には圏線が巡り、印花文が施される。全面に施釉した後、高台内の釉を拭き取る。上田分類E類である。

78・79は堀7から出土した。78は越前焼の鉢である。体部は底部から直線的に開き、口縁部で上方に立ち上がる。口縁端部はやや内傾して切られる。内面体部に8条一単位の櫛目が、横方向に一ヶ所確認できる。内面体部中央以下は滑らかに摩滅しており、搦鉢として利用されていたものと考えられる。79は土錘である。焼成は良好で、硬く焼き締まる。

80～86は堀9から出土した。80・81は土師質皿である。口縁部には一段ナデを施す。底部と口縁部の



第33図 井戸1・2・5・18・20・22・23・27出土土器実測図（縮尺1/3）

境が明瞭で、口縁の立ち上がりが短い80は、15世紀前半の所産、立ち上がりが長い81は、15世紀中頃から後半にかけての所産と見られる。82は白磁皿である。高台に4箇所のかぎりを入れる。森田分類D群である。83～86は土錘である。すべて土師質である。

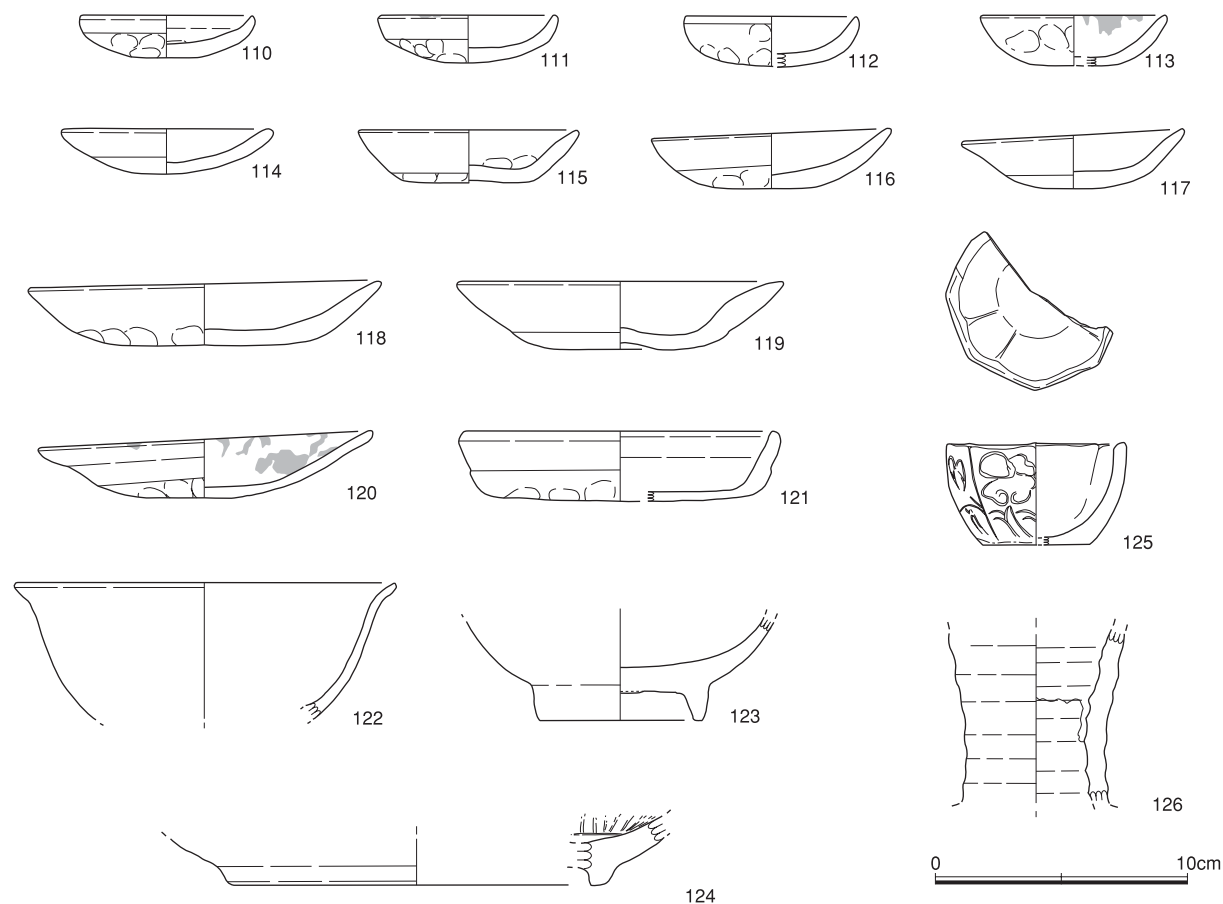
87～89は井戸1から出土した。土師質皿である。87は底部と口縁部との境が明瞭で、立ち上がりが短く、底部の器壁は厚い。88は、器壁が厚く丸みを帯びた底部から、体部が緩やかに立ち上がる。87・88は一段ナデを施す。15世紀中頃の所産と見られる。89は二段ナデを施す。底部と口縁部の境が明瞭で、口縁端部には面取りが施される。器壁は薄い。13世紀中頃の所産と見られる。

90～101は井戸2から出土した。一段ナデを施す土師質皿である。90～100は底部から緩やかに立ち上がり、丸みを帯びた器形をなす。器壁は底部中央が最も厚く、腰部から口縁に向けて先細る。15世紀中頃の所産と見られる。101は底部と口縁部との境が明瞭で、口縁部が外反しながら立ち上がる。15世紀後半の所産と見られる。

102・103は井戸5から出土した。一段ナデを施す土師質皿である。いずれも底部と口縁部の境が明瞭な小皿である。ともに底部の器壁は厚く、102は短い口縁が、103は長めの口縁が立ち上がる。15世紀中頃の所産と見られる。

104は井戸22から出土した。土師質皿である。薄手で、見込から外面体部中央にかけてナデを施す。灯明皿として使用される。16世紀代の所産と見られる。

105は井戸20から出土した。土師質皿である。見込脇から外面腰部にかけて、一段ナデを施す。厚みのある底部から体部が緩やかに立ち上がり、口縁部は先細る。15世紀中頃の所産と見られる。



第34図 土坑51出土土器実測図（縮尺1/3）

106は井戸27から出土した。土師質皿である。二段ナデを施す。厚みのある底部から体部が緩やかに立ち上がり、口縁部は外反気味に作る。口縁端部には面取りが施される。15世紀中頃の所産と見られる。

107は井戸23から出土した。土錘である。土師質である。

108・109は井戸18から出土した。108は方形の瓦質浅鉢である。体部は直線的に外傾し、口縁部で内側に厚みを持たせる。内外面ともに密なミガキが施される。外面には口縁部に2条、腰部に1条の突帯がめぐり、口縁部の突帯間に菊花文のスタンプが施される。109は古瀬戸の天目碗である。体部は直線的にのび、口縁部はほぼ直立する。削り出し輪高台は、暈付を外傾して切る。腰部以下は露胎である。古瀬戸後Ⅱ期である。

110～126は土坑51から出土した。110～121は土師質皿である。大半が一段ナデを施す。110～112は底部と口縁部との境が明瞭で、立ち上がりが短く、器壁が厚い。113・114は丸みを帯びた器形をし、底部から緩やかに立ち上がる。114は口縁端部を丸く収める。115は底部と口縁部の境が明瞭で、体部が直線的に開く。116・118は厚みのある底部から体部が緩やかに立ち上がり、口縁部は先細る。117は底部と口縁部の境が明瞭で、体部は外反気味に立ち上がる。119は全体に厚みがあり、体部が外反気味に開く。120は薄手で、体部は外反気味に立ち上がる。二段ナデを施す。121は、平たい底部から体部が上方に向かい、立ち上がる。一段ナデを施す。121は13世紀前半から中頃、115・119は15世紀前半、110～112・116・118・120は15世紀中頃、113・114・117は15世紀後半の所産と見られる。122は白磁碗である。器壁は薄く、口縁部は外反する。123～125は青磁である。123は碗である。見込に印花文を施す。貫入の入る釉が全面に施され、高台内を輪状に拭き取る。上田分類E類である。124は大皿である。見込脇に圈線が巡り、体部内面には細かい鎬文が施される。125は小鉢である。口縁部は8角の輪花状に作る。外面には草花文の陰刻が施される。露胎の外底部には目痕が残る。126は古瀬戸花瓶の頸部である。ロクロ目を残す器壁に、灰釉が施される。藤澤編年後Ⅲ期である。

127～130は土坑87から出土した。一段ナデを施す土師質皿である。127は底部と口縁部との境が明瞭で、口縁端部は丸く収める。128～130は厚みがあり、底部から体部が緩やかに立ち上がる大皿である。いずれも15世紀中頃の所産と見られる。

131～133は土坑82（堀4の一部）から出土した。131・132は土師質皿である。底部と口縁部との境が明瞭で、一段ナデを施す。15世紀中頃の所産と見られる。133は青磁皿である。腰部は丸く張りがあり、口縁端部が玉縁状に短く外反する。

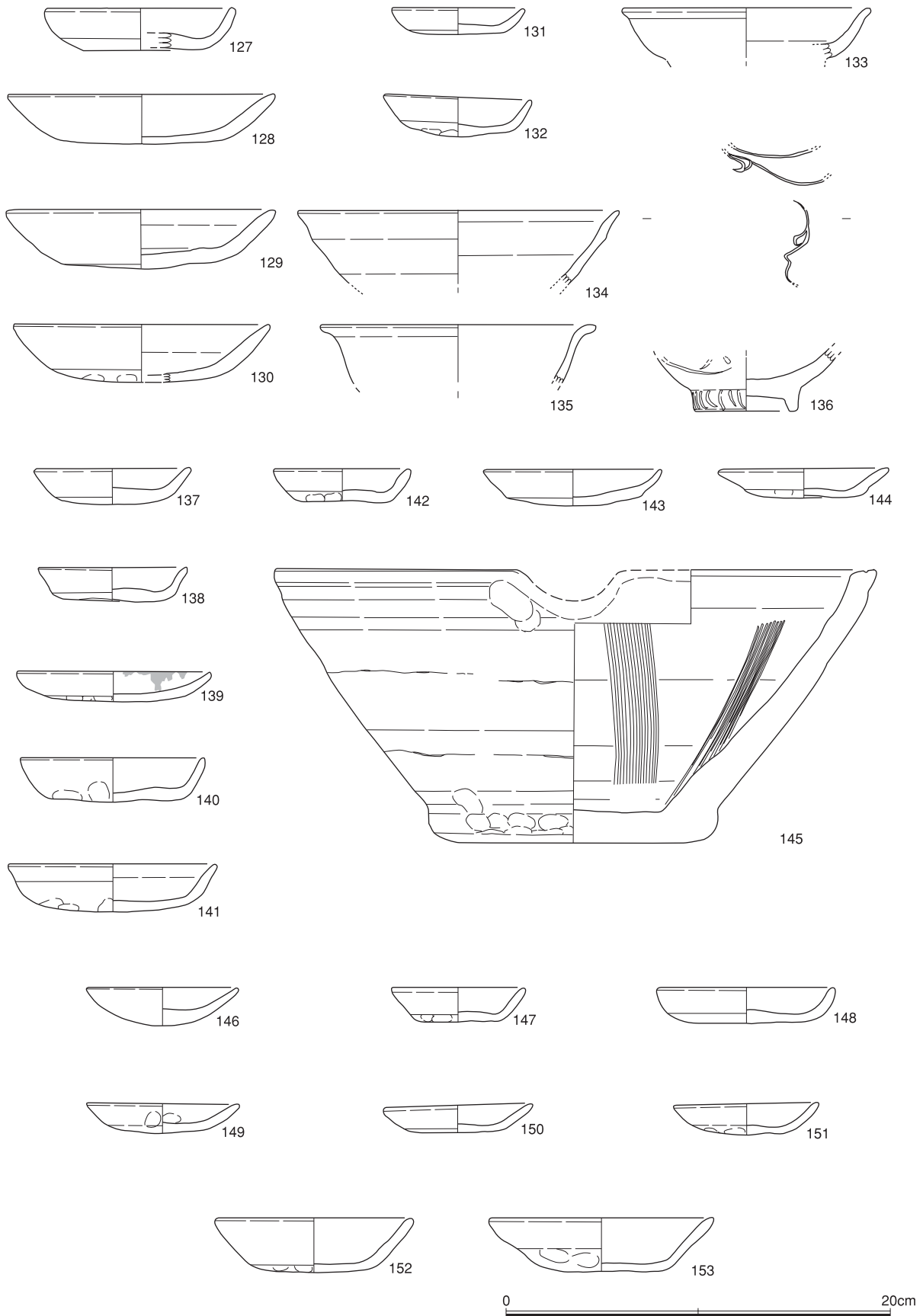
134～136は土坑91から出土した。134は古瀬戸の平碗である。口縁部がわずかに外反し、端部は断面三角形をなす。135・136は青磁碗である。135は口縁部が外反し、端部は丸く収める。上田分類D類である。136は見込と体部外面、および高台外面に線描き文を施す。上田分類C-2類である。

137・138は土坑88から出土した。一段ナデを施す土師質皿である。底部と口縁部の境が明瞭で、口縁端部は丸く収める。14世紀中頃の所産と見られる。

139は土坑71から出土した。土師質皿である。近世の所産である。

140は土坑38から出土した。一段ナデを施す土師質皿である。底部と口縁部との境が明瞭で、口縁部は上方に向かい立ち上がる。15世紀中頃の所産と見られる。

141は土坑77から出土した。一段ナデを施す土師質皿である。底部と口縁部との境が明瞭で、口縁部は外反する。13世紀中頃から後半にかけての所産と見られる。



第35図 土坑出土土器・包含層出土土器実測図（縮尺1/3）

142は土坑78から出土した。一段ナデを施す土師質皿である。底部と口縁部との境が明瞭である。14世紀中頃の所産と見られる。

143は土坑96から出土した。一段ナデを施す土師質皿である。底部はやや丸みを帯び、口縁部は内湾気味に立ち上がる。14世紀中頃の所産と見られる。

144は土坑20から出土した。一段ナデを施す土師質皿である。底部と口縁部との境が明瞭で、口縁部は外反する。14世紀中頃の所産と見られる。

145は土坑37から出土した。越前焼播鉢である。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部上面には沈線が施され、片口を持つ。内面体部には、8条一単位の播り目が間隔を開けて入る。

146～222は包含層から出土した。154～163は須恵器である。154～156は杯蓋、157～161は杯身、162は高台付鉢、163は壺である。9～10世紀の所産と見られる。146～153・164～209は、土師質皿である。181は二段ナデを施し、その他は一段ナデを施す。168は、厚手の平たい底部から短い口縁が上方に立ち上がり、185は緩やかに立ち上がる。13世紀前半の所産と見られる。181は、平たい底部から体部が上方に立ち上がる。13世紀中頃の所産と見られる。177は、見込脇を内側から押えて、体部を外反させる。14世紀中頃の所産と見られる。152・153・165は、見込脇を内側から押えて、体部を立ち上げる。153・165は口縁が外反する。14世紀後半の所産と見られる。146は厚みのある底部から、188は、薄手の底部から体部が緩やかに立ち上がる。147・149～151・170～176・178～180・182は底部と口縁部との境が明瞭で、体部は開き気味に立ち上がる。148は同じく内湾気味に立ち上がる。以上は15世紀中頃の所産と見られる。167はやや薄手で、口縁が外反する。15世紀中頃から後半の所産と見られる。164・166・190は薄手で、見込みから口縁外唇部までをナデ成形する。183・184・186・187・189は、手捏ね成形により内湾気味に口縁を立ち上げるもので、不整形な一群である。これらは16世紀中頃の所産と見られる。191～209は、緩やかに丸みを持って、底部から口縁部に至る浅皿である。近世の所産と見られる。210は古瀬戸の灰釉小皿である。腰部の立上りは緩やかで、底部外面には糸切り痕を残す。口縁部内外面に釉を施し、見込みは薄くハケ塗りされる。211は越前焼の壺である。肩部が大きく張り、底部にかけてはあまり窄まらない。肩部には「大」のヘラ記号が刻まれる。212は白磁碗である。見込には圈線が施される。高台畳付は外傾して切られ、高台外面以内は露胎である。213～215は土錘である。直径の小さい213・214は陶質で焼成が良く、直径の大きい215は土師質である。

参考文献（土器の年代観に関するもの）

上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会

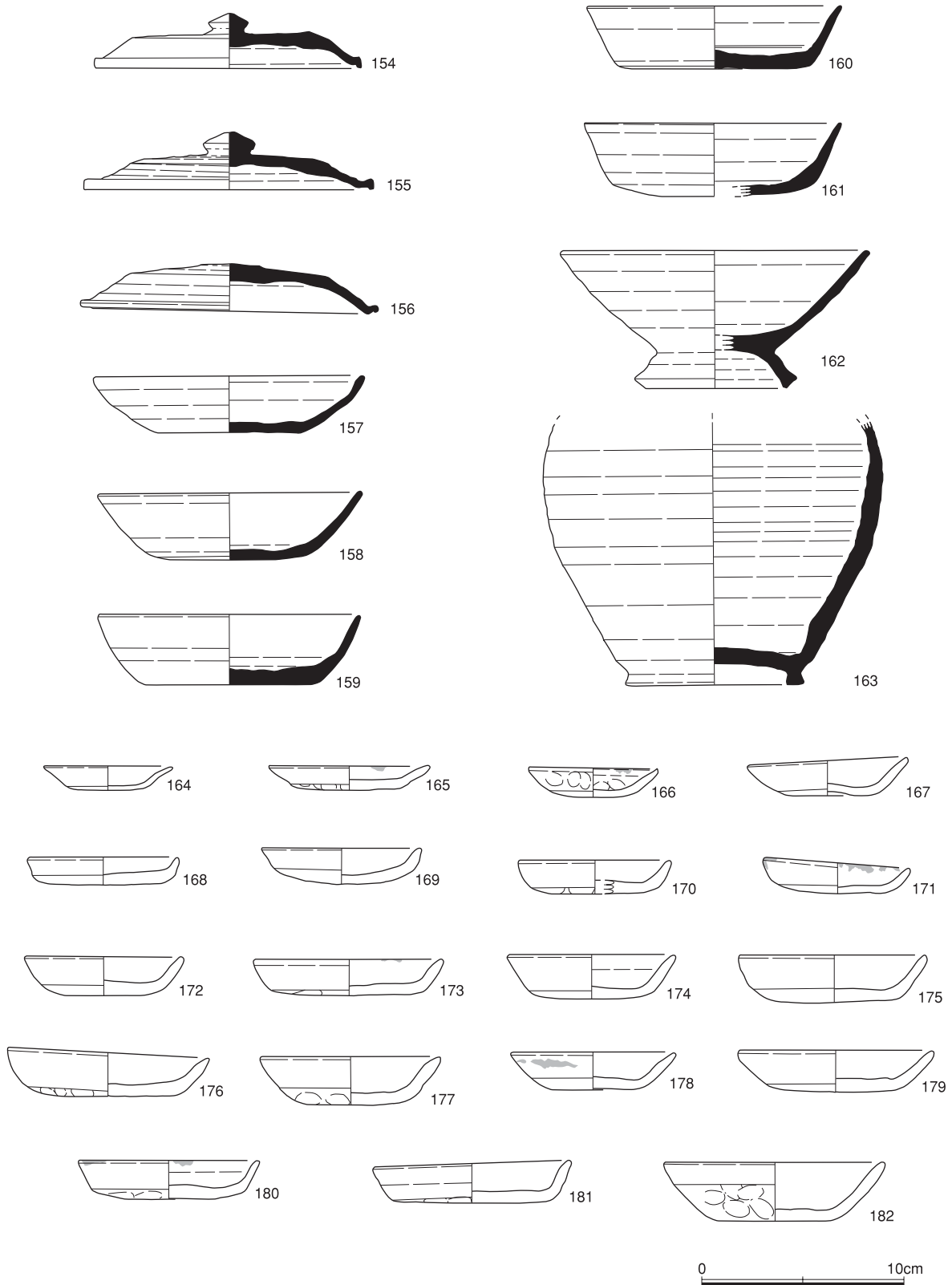
中世土器研究会 1992 「概説 中世の土器・陶磁器」 真陽社

富山正明 1997 「越前国における13～16世紀の土師器編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会編 桂書房

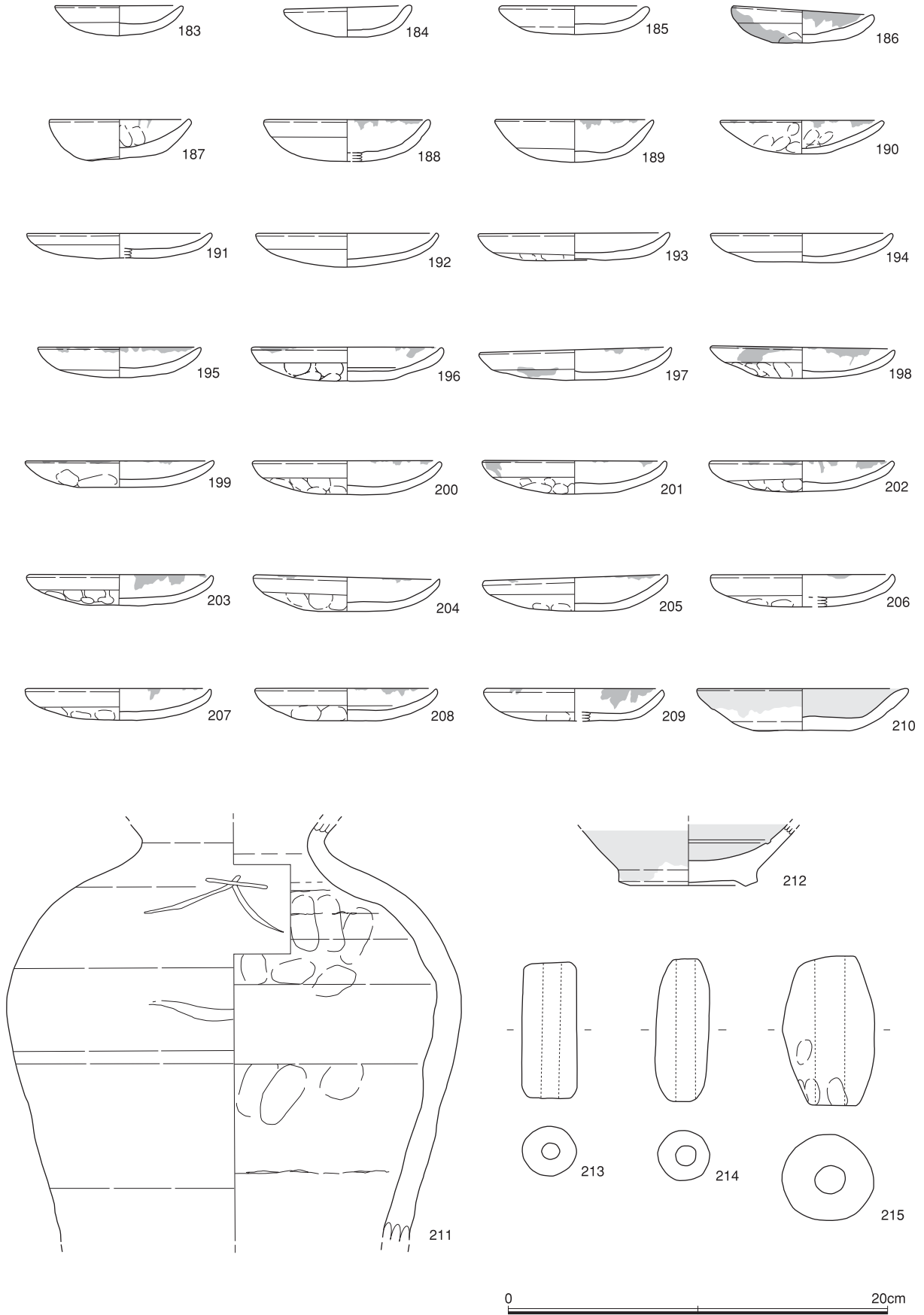
藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年」『研究紀要X』瀬戸市歴史民俗資料館

1995 「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年」『研究紀要第3輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会



第36図 包含層出土土器実測図(1) (縮尺1/3)



第37図 包含層出土土器実測図 (2) (縮尺1/3)

第5表 出土土器観察表

図版番号	器種	グロッド	遺構名	法量		口径	底径	胎土	傷破	色調	残存	分類・時期	備考
				高さ	底径								
1	土師質 皿	—	堀1	7.0	1.8	—	—	クサリ様	良好	5YR7/6 緑色	1/2残存	13世紀前	
2	土師質 皿	—	堀1	8.0	2.1	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR6/4 にふい黄緑色	3/4残存	15世紀	
3	土師質 皿	—	堀1	8.3	2.1	—	—	長石・クサリ様・雲母	良好	7.5YR6/4 にふい黄緑色	ほぼ完全形	15世紀	
4	土師質 皿	G14	堀1	8.8	1.5	—	—	長石・雲母・クサリ様	良好	10YR6/2 灰黄褐色	2/3残存	15世紀	
5	土師質 皿	—	堀1	10.0	1.5	—	—	長石・雲母・クサリ様	良好	5YR7/6 緑色	1/3残存	15世紀	
6	青磁碗	—	堀1	(15.2)	(5.0)	—	—	密	良	2.5GY6/1 オリーブ灰色	1/3残存	上田0類(14世紀後半～15世紀前半)	表面の凹凸が著しい。
7	青磁碗	—	堀1	(16.0)	(5.6)	—	—	密	良好	7.5Y7/1 灰白色	1/5残存	上田0類(14世紀中～後半)	—
8	青磁 瓶	—	堀1	—	(3.7)	3.5	—	密	良好	5GY7/1 灰白～オリーブ灰色	底面のみ残存	—	量付 露胎
9	土師質 皿	J8	堀2	6.0	1.3	—	—	雲母・クサリ様	良好	7.5YR7/4 浅黄褐色	完全形	16世紀	
10	土師質 皿	H14	堀2	6.2	1.5	—	—	長石・雲母・クサリ様	良好	7.5YR7/4 にふい黄緑色	1/2残存	16世紀	
11	土師質 皿	H10	堀2	7.6	1.9	—	—	長石・雲母・クサリ様	良好	7.5YR7/6 緑色	ほぼ完全形	15世紀中	
12	土師質 皿	—	堀2	6.8	1.8	—	—	クサリ様	良好	10YR6/4 浅黄褐色	ほぼ完全形	15世紀中	
13	土師質 皿	H12	堀2	7.6	1.6	—	—	クサリ様	良好	10YR7/3 にふい黄緑色	3/4残存	15世紀中	
14	土師質 皿	H11	堀2	8.2	1.7	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR7/4 にふい黄緑色	1/3残存	15世紀中	
15	土師質 皿	H13	堀2	9.8	2.2	—	—	長石・雲母・クサリ様	良好	10YR6/2 灰白色	ほぼ完全形	15世紀中	
16	土師質 皿	H13	堀2	9.2	2.1	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR7/4 にふい黄緑色	ほぼ完全形	15世紀中	
17	土師質 皿	H12-13	堀2	9.2	2.2	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR6/4 にふい黄緑色	ほぼ完全形	15世紀中	
18	土師質 皿	H13	堀2	9.6	2.0	—	—	クサリ様	良好	7.5YR7/4 にふい黄緑色	1/2残存	15世紀中	
19	土師質 皿	H12	堀2	9.2	2.0	—	—	クサリ様・雲母	良好	7.5YR7/6 緑色	3/4残存	15世紀中	
20	土師質 皿	H12	堀2	9.0	1.8	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR6/4 浅黄褐色	1/2残存	15世紀中	
21	土師質 皿	H11	堀2	8.6	2.0	—	—	雲母・長石・クサリ様	良好	7.5YR7/6 緑色	完全形	16世紀	
22	土師質 皿	H8	堀2	7.6	1.9	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR6/3 にふい黄緑色	ほぼ完全形	15世紀中	
23	土師質 皿	H11	堀2	9.0	2.0	—	—	雲母・クサリ様	良好	7.5YR6/6 緑色	完全形	15世紀中	
24	土師質 皿	H12	堀2	8.8	1.5	—	—	クサリ様・雲母	良好	7.5YR6/3 浅黄褐色	ほぼ完全形	15世紀後半～16世紀前	
25	土師質 皿	H+10	堀2	8.8	1.9	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR6/3 浅黄褐色	ほぼ完全形	15世紀後半～16世紀前	
26	土師質 皿	H+10	堀2	8.8	1.8	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR6/3 浅黄褐色	2/3残存	15世紀後半～16世紀前	
27	土師質 皿	H+10	堀2	8.8	1.8	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR6/3 浅黄褐色	ほぼ完全形	15世紀後半～16世紀前	
28	土師質 皿	H+10	堀2	10.8	2.2	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR6/3 浅黄褐色	2/3残存	15世紀後半～16世紀前	
29	土師質 皿	H12	堀2	8.2	1.9	—	—	長石・雲母・クサリ様	良好	7.5YR6/4 浅黄褐色	3/4残存	15世紀後半～16世紀前	
30	土師質 皿	H+10	堀2	13.0	2.5	—	—	クサリ様・雲母	良好	7.5YR6/8 緑色	1/2残存	15世紀中	
31	土師質 皿	H+10	堀2	13.2	2.9	—	—	クサリ様・雲母・長石	良好	7.5YR6/6 緑色	ほぼ完全形	15世紀中	
32	土師質 皿	J7	堀2	18.8	2.4	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR7/3 にふい黄緑色	1/3残存	16世紀	
33	土師質 皿	H12	堀2	13.6	2.4	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR6/3 浅黄褐色	完全形	15世紀前半～中	
34	青磁碗	H12	堀2	—	(2.4)	5.8	—	密	良好	7.5YR6/2 灰白～オリーブ色	高さの2/3残存	15世紀前	
35	青磁碗	H13	堀2	—	(2.3)	4.4	—	密	良好	2.5GY6/1 オリーブ灰色	高さのみ残存	—	見込みに花が彫刻される
36	古瀬戸 碗	F12	堀2	—	(1.6)	4.0	—	密	良好	2.5Y8/1 灰白色	高さの2/3残存	—	
37	古瀬戸 平碗	H+9	堀2	—	(1.3)	5.4	—	密	良好	5Y7/3 浅黄褐色	高さのみ残存	後期様式 Ⅲ期 15世紀中葉	底部系切りの後、削りだし高台
38	古瀬戸 脚皿	H+2	堀2	(16.3)	3.9	(8.8)	—	密	良好	5Y7/1 灰白色	1/3残存	後期様式 Ⅲ期 15世紀中葉	後期様式
39	天目	H12	堀2	12.0	6.0	4.8	—	—	良好	補7.5YR4/3 褐色 胎7.5YR7/4 にふい黄緑色	1/2残存	15世紀後半	
40	古瀬戸 天目碗	H+9	堀2	(12.0)	(5.6)	—	—	密	良好	5Y2/1 黒	2/3残存	天目0類(後期様式 Ⅲ期 15世紀中葉)	
41	土師 鉢	F2	堀2	8.8	3.0	1.2	—	雲母・クサリ様	良好	5YR6/6 緑色	完全形	15世紀	
42	土師質 皿	G2	堀3	11.1	2.7	—	—	クサリ様	良好	7.5YR7/4 にふい黄緑色	3/4残存	14世紀後半	
43	土師質 皿	H+9	堀3	13.0	2.2	—	—	長石・雲母・クサリ様	良好	7.5YR7/4 にふい黄緑色	1/2残存	15世紀中	
44	土師質 皿	G2	堀3	7.6	1.8	—	—	クサリ様	良好	7.5YR7/4 にふい黄緑色	2/3残存	15世紀中	
45	青磁碗	G2	堀3	—	(2.0)	—	—	密	良好	5GY6/1 オリーブ灰色	口縁部の一部残存	上田0-2類(14世紀後半～15世紀前半)	口縁部外面 露文帯
46	青磁碗	—	堀3	—	(2.4)	4.4	—	密	良好	7.5YR6/3 灰白～オリーブ色	高さのみ残存	—	見込みに花が彫刻される
47	土師質 皿	—	堀4	7.6	2.1	—	—	クサリ様・雲母	良好	7.5YR6/4 浅黄褐色	2/3残存	15世紀中	
48	土師質 皿	G1	堀4	7.2	1.5	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR7/3 にふい黄緑色	3/4残存	15世紀中	
49	土師質 皿	G1	堀4	7.6	1.8	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR7/4 にふい黄緑色	2/3残存	15世紀中	
50	土師質 皿	G1	堀4	8.0	1.8	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR6/3 浅黄褐色	1/3残存	15世紀中	
51	土師質 皿	G	堀4	9.0	2.3	—	—	クサリ様	良好	10YR7/3 にふい黄緑色	3/4残存	15世紀中	
52	土師質 皿	G1	堀4	7.8	1.7	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR7/2 にふい黄緑色	3/4残存	15世紀中	
53	土師質 皿	F4	堀4	8.0	1.9	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR6/3 浅黄褐色	1/3残存	15世紀中	
54	土師質 皿	G1	堀4	8.0	1.7	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR6/4 浅黄褐色	3/4残存	15世紀中	
55	土師質 皿	G1	堀4	7.8	2.2	—	—	クサリ様	良好	10YR7/3 にふい黄緑色	1/3残存	15世紀中	
56	土師質 皿	G1	堀4	7.8	2.1	—	—	クサリ様	良好	10YR7/3 にふい黄緑色	1/3残存	15世紀中	
57	土師質 皿	G1	堀4	7.3	2.3	—	—	長石・雲母・クサリ様	良好	10YR7/3 にふい黄緑色	ほぼ完全形	15世紀中	
58	土師質 皿	G1	堀4	8.5	2.4	—	—	クサリ様	良好	10YR6/3 浅黄褐色	1/2残存	15世紀中	
59	土師質 皿	G1	堀4	9.1	2.6	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR7/4 にふい黄緑色	2/3残存	15世紀中	
60	土師質 皿	G1	堀4	7.6	2.0	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR7/4 にふい黄緑色	ほぼ完全形	15世紀中	
61	土師質 皿	G1	堀4	8.8	2.3	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR6/4 浅黄褐色	4.5残存	15世紀中	
62	土師質 皿	G1	堀4	9.6	2.3	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR6/3 浅黄褐色	ほぼ完全形	15世紀中	
63	土師質 皿	G1	堀4	9.3	2.2	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR6/3 浅黄褐色	3/4残存	15世紀中	
64	土師質 皿	—	堀4	10.2	1.9	—	—	クサリ様	良好	10YR7/3 にふい黄緑色	ほぼ完全形	15世紀中	
65	白磁皿	F100	堀4	12.4	3.5	4.3	—	—	良好	2.5Y8/2 灰白色	4.5残存	14世紀後半～15世紀前	
66	土師質 皿	H19	堀5	6.9	1.9	—	—	雲母・クサリ様	良好	7.5YR7/6 緑色	完全形	15世紀後半	
67	土師質 皿	H12	堀5	6.5	1.8	—	—	雲母・クサリ様	良好	7.5YR7/6 緑色	完全形	15世紀後半?	
68	土師質 皿	H19	堀5	7.5	1.3	—	—	クサリ様・雲母	良好	7.5YR6/4 浅黄褐色	完全形	15世紀後半?	
69	土師質 皿	H10	堀5	7.6	1.4	—	—	クサリ様・雲母	良好	7.5YR7/4 にふい黄緑色	完全形	15世紀後半?	
70	土師質 皿	H10	堀5	7.6	1.5	—	—	雲母・クサリ様	良好	7.5YR6/4 にふい黄緑色	完全形	15世紀後半?	
71	土師質 皿	H10	堀5	7.3	1.5	—	—	クサリ様・雲母	良好	7.5YR7/4 にふい黄緑色	ほぼ完全形	15世紀後半?	
72	土師質 皿	H11	堀5	7.4	1.3	—	—	クサリ様・雲母	良好	7.5YR7/4 にふい黄緑色	1/2残存	15世紀後半?	
73	土師質 皿	H10	堀5	7.4	1.7	—	—	雲母・長石・クサリ様	良好	7.5YR7/4 にふい黄緑色	1/2残存	15世紀後半?	
74	土師質 皿	H10	堀5	8.0	2.0	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR6/3 浅黄褐色	3/4残存	15世紀後半	
75	土師質 皿	H10	堀5	8.6	1.9	—	—	雲母・クサリ様	良好	10YR6/3 にふい黄緑色	完全形	15世紀中～後半	油でクがしまる
76	土師質 皿	H10	堀5	9.2	2.2	—	—	クサリ様・雲母	良好	7.5Y8/6 浅黄褐色	ほぼ完全形	15世紀中～後半	
77	青磁碗	H10	堀5	—	(6.1)	5.6	—	密	良好	5GY6/1 オリーブ灰色	体部下半部残存	—	見込みに花が彫刻される
78	鉢	K22	堀7	25.0	8.3	12.2	—	長石	良好	5YR4/4 にふい赤褐色	—	15世紀?	
79	土師 鉢	K22	堀7	8.0	3.0	1.0	—	長石・雲母・クサリ様	良好	5YR7/4 にふい黄緑色	完全形	15世紀	
80	土師質 皿	J20	堀9	7.0	1.6	—	—	クサリ様	良好	7.5YR6/6 緑色	ほぼ完全形	15世紀前	
81	土師質 皿	J21	堀9	8.8	2.3	—	—	雲母・クサリ様	良好	7.5Y7/2 灰白色	1/2残存	15世紀前半	
82	白磁 小皿	J20	堀9	—	(1.1)	(3.6)	—	白磁	良好	2.5Y8/1 灰白色	高さの1/2残存	森田0類(16世紀前半)	高台に円盤状の執りを入れる。
83	土師 鉢	—	堀9	5.7	3.1	1.1	—	長石・雲母・クサリ様	良好	7.5YR7/3 にふい黄緑色	完全形	15世紀	
84	土師 鉢	J20	堀9	8.0	5.0	1.5	—	クサリ様・雲母	良好	7.5YR6/4 浅黄褐色	完全形	15世紀	
85	土師 鉢	J20	堀9	7.7	4.7	1.5	—	雲母・クサリ様	良好	7.5YR7/4 にふい黄緑色	完全形	15世紀	
86	土師 鉢	J20	堀9	8.1	5.0	1.4	—	雲母・クサリ様	良好	7.5YR7/3 にふい黄緑色	完全形	15世紀	
87	土師質 皿	E-F4～5	井戸1	7.6	1.7	—	—	クサリ様・雲母	良好	10YR6/4 にふい黄緑色	3/4残存	15世紀中	
88	土師質 皿	F4	井戸1	7.8	2.3	—	—	クサリ様	良好	7.5YR6/4 にふい			

第1節 土器

122	青磁碗	F-G5	土坑51	(15.0)	(5.4)	—	密	良好	N8/ 灰白色	1/10残存	森田D'類(14世紀後半~15世紀初葉)	
123	青磁碗	F-G5	土坑51	—	(4.0)	(6.8)	—	良好	2.5GY7/1 明オリブ灰色	1/8残存		高台見込み 蛇の目
124	青磁 大皿	F6-G5	土坑51	—	(1.8)	(14.8)	密	良好	5GY6/1 オリーブ灰色	底部の1/12残存		内面には蓮弁が彫刻される。
125	青磁 小杯八角	F-G5	土坑51	7.0	4.0	4.2	—	良好	7.5GY6/1 緑灰色	1/2残存		
126	古瀬戸 花瓶	F5	土坑51	—	(6.7)	—	密	良好	7.5YR6/2 灰オリブ色	頸部の1/2残存		花籠Ⅲ類 (後期様式 Ⅱ期 14世紀末~15世紀初葉)
127	土師質 皿	JD	土坑87	10.0	2.1	—	雲母・クサリ障・長石	良好	10YR6/4 にふい黄褐色	1/2残存		15世紀中
128	土師質 皿	J12	土坑87	14.0	2.6	—	雲母・クサリ障	良好	10YR7/4 にふい黄褐色	1/2残存		15世紀中
129	土師質 皿	J12	土坑87	14.0	3.1	—	クサリ障・雲母	良好	10YR6/4 にふい黄褐色	1/3残存		15世紀中
130	土師質 皿	J18	土坑87	13.4	3.0	—	クサリ障・雲母	良好	10YR6/4 にふい黄褐色	1/3残存		15世紀中
131	土師質 皿	G1	土坑82(堀4)	7.0	1.4	—	クサリ障・雲母	良好	10YR7/4 にふい黄褐色	3/4残存		15世紀中
132	土師質 皿	G1	土坑82(堀4)	7.8	2.2	—	クサリ障・雲母	良好	10YR6/3 浅黄褐色	ほぼ完形		15世紀中
133	青磁 小皿	G1	土坑82(堀4)	(12.8)	(2.6)	—	密	良好	7.5YR6/2 灰オリブ色	1/12残存		
134	古瀬戸 平壇	K23	土坑91	(16.6)	(3.8)	—	やや密	良好	5Y7/2 灰白色	口縁部の一部残存	後期Ⅲ類 15世紀初	
135	青磁碗	K23	土坑91	(14.2)	(3.0)	—	密	良好	10Y6/2 オリーブ灰色	口縁部の一部残存	上田D類(14世紀末~15世紀前半)	
136	青磁碗	K23	土坑91	—	(3.3)	5.2	密	良好	2.5GY6/1 オリーブ灰色	高台のみ残存	上田O-2類(14世紀後半~15世紀前半)	内外面に劃花文の陰刻、高台外面にストライプ状の陰刻が施される。口縁部外面に劃文帯が施されると想定できる。
137	土師質 皿	J12	土坑88	8.2	1.9	—	クサリ障・雲母	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	2/3残存		14世紀中
138	土師質 皿	I12	土坑88	7.8	1.9	—	雲母・クサリ障	良好	7.5YR6/6 褐色	3/4残存		14世紀中
139	土師質 皿	G5	土坑71	10.2	1.6	—	雲母・クサリ障	良好	10YR7/4 にふい黄褐色	変形	近世	
140	土師質 皿	H9	土坑38	9.8	2.3	—	クサリ障・雲母	良好	7.5YR7/6 褐色	3/4残存		15世紀中
141	土師質 皿	G1	土坑77	11.0	2.5	—	クサリ障・雲母	良好	10YR7/6 明黄褐色	2/3残存		13世紀中~後
142	土師質 皿	G1	土坑76	7.2	1.8	—	クサリ障・雲母	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	3/4残存		14世紀中
143	土師質 皿	G1	土坑96	9.4	1.9	—	クサリ障・雲母	良好	10YR6/4 浅黄褐色	2/3残存		14世紀後
144	土師質 皿	E9-10	土坑20	8.9	1.6	—	長石・雲母・クサリ障	良好	10YR6/2 灰黄褐色	3/4残存		14世紀中
145	瑠鉢	J12	土坑37	—	—	—	—	—	—	—	—	—
146	土師質 皿	—	包含層	8.0	2.0	—	長石・雲母・クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	2/3残存		15世紀中
147	土師質 皿	—	包含層	7.0	1.8	—	クサリ障	良好	10YR7/2 にふい黄褐色	ほぼ完形		15世紀中
148	土師質 皿	—	包含層	9.4	1.9	—	雲母・クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	2/3残存		15世紀中
149	土師質 皿	—	包含層	8.0	1.6	—	クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	変形		15世紀中
150	土師質 皿	—	包含層	9.8	1.5	—	クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	ほぼ完形		15世紀中
151	土師質 皿	—	包含層	7.5	1.7	—	クサリ障	良好	7.5YR6/4 浅黄褐色	変形		15世紀中
152	土師質 皿	—	包含層	10.4	2.8	—	長石・クサリ障	良好	10YR7/4 にふい黄褐色	2/3残存		14世紀後
153	土師質 皿	—	包含層	11.7	2.8	—	クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	完形		14世紀後
154	須恵器 杯蓋	F15	包含層	13.2	2.7	—	長石	良好	5Y5/1 灰色	ほぼ完形		15世紀中
155	須恵器 杯蓋	F14	包含層	14.2	2.8	—	長石	良好	5Y6/1 灰色	1/3残存		15世紀中
156	須恵器 杯蓋	—	包含層	14.8	2.4	—	長石	良好	N6/ 灰色	1/4残存		15世紀中
157	須恵器 杯蓋?	F12	包含層	13.4	2.8	—	—	—	—	—	—	—
158	須恵器 舞台杯	F13-14	包含層	13.2	3.3	—	長石	良好	N4/ 灰色	1/3残存		15世紀中
159	須恵器 舞台杯	F14	包含層	13.0	3.5	8.0	長石	良好	5Y8/2 灰オリブ色	1/3残存		15世紀中
160	須恵器 舞台杯	G13	包含層	12.8	3.1	8.4	長石	良好	5Y8/1 灰色	2/3残存		15世紀中
161	須恵器 舞台杯	J8	包含層	12.8	3.6	—	—	—	—	—	—	—
162	須恵器 杯	F14	包含層	15.4	6.8	7.0	長石	良好	6Y7/1 灰白色	1/3残存		15世紀中
163	須恵器 壺	G13	包含層	—	—	8.8	長石	良好	N5/ 灰色	2/3残存		15世紀中
164	土師質 皿	D6	包含層	6.4	1.2	—	雲母・クサリ障	良好	5YR7/6 褐色	2/3残存		16世紀
165	土師質 皿	J12	包含層	8.0	1.2	—	クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	2/3残存		14世紀後
166	土師質 皿	D-E4	包含層	6.4	1.5	—	クサリ障・雲母	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	3/4残存		16世紀
167	土師質 皿	D2	包含層	8.0	1.9	—	長石・雲母・クサリ障	良好	10YR6/2 灰黄褐色	3/4残存		15世紀中~後
168	土師質 皿	H10	包含層	7.8	1.4	—	雲母・クサリ障	良好	7.5YR7/6 褐色	1/3残存		13世紀前
169	土師質 皿	G10	包含層	8.0	1.8	—	長石・クサリ障・雲母	良好	10YR7/4 にふい黄褐色	3/4残存		13世紀後
170	土師質 皿	G12	包含層	7.6	1.7	—	長石・雲母・クサリ障	良好	10YB4/4 褐色	3/4残存		15世紀中
171	土師質 皿	H10	包含層	7.3	1.8	—	クサリ障・雲母・長石	良好	7.5YR7/3 にふい黄褐色	4/5残存		15世紀中
172	土師質 皿	E8	包含層	8.0	1.9	—	クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	1/2残存		15世紀中
173	土師質 皿	F6	包含層	9.6	1.8	—	雲母・クサリ障	良好	7.5YR7/3 にふい黄褐色	2/3残存		15世紀中
174	土師質 皿	D2	包含層	8.4	2.2	—	長石・雲母・クサリ障	良好	10YR6/3 にふい黄褐色	2/3残存		15世紀中
175	土師質 皿	E7	包含層	9.3	2.4	—	クサリ障・雲母	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	3/4残存		15世紀中
176	土師質 皿	E4	包含層	10.1	2.4	—	雲母・クサリ障	良好	10YR7/2 にふい黄褐色	ほぼ完形		15世紀中
177	土師質 皿	F-G99	包含層	9.0	2.4	—	クサリ障・雲母	良好	7.5YR6/3 浅黄褐色	1/2残存		14世紀中
178	土師質 皿	E2	包含層	8.2	1.9	—	クサリ障・雲母	良好	10YR6/2 灰黄褐色	2/3残存		15世紀中
179	土師質 皿	F7	包含層	9.8	2.1	—	クサリ障・雲母	良好	10YR6/4 浅黄褐色	完形		15世紀中
180	土師質 皿	D2	包含層	9.0	1.9	—	長石・雲母・クサリ障	良好	10YR7/3 にふい黄褐色	1/2残存		15世紀中
181	土師質 皿	D4	包含層	9.8	2.1	—	雲母・クサリ障	良好	10YR7/4 にふい黄褐色	3/4残存		13世紀中?
182	土師質 皿	G6	包含層	11.0	2.9	—	クサリ障・雲母	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	1/3残存		15世紀中
183	土師質 皿	H9	包含層	6.8	1.6	—	クサリ障・雲母	良好	10YR6/3 にふい黄褐色	3/4残存		16世紀
184	土師質 皿	L23	包含層	6.8	1.7	—	クサリ障・雲母	良好	10YR7/4 にふい黄褐色	変形		16世紀
185	土師質 皿	E5	包含層	8.0	1.5	—	クサリ障・雲母	良好	10YR7/3 にふい黄褐色	3/4残存		13世紀前
186	土師質 皿	H10	包含層	7.8	1.9	—	長石・雲母・クサリ障	良好	10YR6/2 灰黄褐色	3/4残存		16世紀
187	土師質 皿	D7	包含層	7.5	2.1	—	長石・雲母・クサリ障	良好	7.5YR6/4 にふい黄褐色	ほぼ完形		16世紀
188	土師質 皿	G8	包含層	8.6	2.2	—	雲母・クサリ障	良好	6YR6/6 褐色	1/2残存		15世紀中
189	土師質 皿	D6	包含層	8.4	2.2	—	雲母・クサリ障	良好	10YR7/3 にふい黄褐色	ほぼ完形		16世紀
190	土師質 皿	C5	包含層	8.7	1.8	—	長石・雲母・クサリ障	良好	7.5YR6/4 浅黄褐色	完形		16世紀
191	土師質 皿	G4	包含層	9.8	1.3	—	雲母・クサリ障	良好	10YR7/3 にふい黄褐色	1/2残存		近世
192	土師質 皿	C4	包含層	9.8	1.8	—	クサリ障	良好	10YR7/3 にふい黄褐色	1/4残存		近世
193	土師質 皿	E6	包含層	10.2	1.4	—	雲母・クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	1/2残存		近世
194	土師質 皿	B7	包含層	9.7	1.6	—	長石・クサリ障・雲母	良好	7.5YR6/4 浅黄褐色	ほぼ完形		近世
195	土師質 皿	D5	包含層	8.8	1.8	—	長石・雲母・クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	3/4残存		近世
196	土師質 皿	E6	包含層	10.2	1.8	—	雲母・クサリ障	良好	10YR6/4 浅黄褐色	3/4残存		近世
197	土師質 皿	D5	包含層	10.2	1.7	—	雲母・クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	4/5残存		近世
198	土師質 皿	E6	包含層	9.8	1.7	—	クサリ障	良好	10YR6/3 浅黄褐色	完形		近世
199	土師質 皿	D9	包含層	10.0	1.4	—	クサリ障	良好	10YR6/3 浅黄褐色	1/2残存		近世
200	土師質 皿	E6	包含層	10.0	1.8	—	クサリ障	良好	10YR6/4 浅黄褐色	変形		近世
201	土師質 皿	D5	包含層	9.8	1.7	—	雲母・クサリ障	良好	10YR6/4 浅黄褐色	変形		近世
202	土師質 皿	E6	包含層	9.8	1.6	—	クサリ障	良好	10YR6/3 浅黄褐色	完形		近世
203	土師質 皿	D5	包含層	9.9	1.6	—	雲母・クサリ障	良好	10YR6/3 浅黄褐色	ほぼ完形		近世
204	土師質 皿	D5	包含層	9.8	1.9	—	クサリ障	良好	10YR7/4 にふい黄褐色	3/4残存		近世
205	土師質 皿	E6	包含層	9.8	1.9	—	雲母・クサリ障	良好	10YR6/3 浅黄褐色	完形		近世
206	土師質 皿	—	包含層	9.8	1.7	—	クサリ障	良好	7.5YR6/4 浅黄褐色	1/2残存		近世
207	土師質 皿	E6	包含層	9.9	1.7	—	クサリ障	良好	10YR6/2 灰白色	完形		近世
208	土師質 皿	E6	包含層	9.7	1.7	—	雲母・クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	3/4残存		近世
209	土師質 皿	D5	包含層	9.6	1.7	—	クサリ障・雲母	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	ほぼ完形		近世
210	古瀬戸 小皿	E7	包含層	(11.0)	2.2	(5.0)	密	良好	5Y6/3 オリーブ黄褐色	1/4残存	緑釉小皿(後期様式 1期 14世紀後半)	底部静止系切り
211	壺	F4	包含層	—	—	—	—	良好	5Y4/4 にふい赤褐色	2/3残存		
212	白磁碗	C3	包含層	—	(3.2)	6.0	密	良好	2. 5GY8/1 灰白色	体部下半部残存	白磁Ⅳ類(12世紀前半)	内面に圈線が入る。体部のケズリ痕は明確
213	土師 土盤	J14	包含層	7.2	3.0	1.0	雲母・クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	変形		
214	土師 土盤	G100	包含層	7.5	2.8	1.0	雲母・クサリ障	良好	5YR7/4 にふい黄褐色	変形		
215	土師 土盤	J20	包含層	7.8	4.3	1.5	長石・雲母・クサリ障	良好	7.5YR7/4 にふい黄褐色	変形		

第2節 石製品 [図版第18、第38・39図、第6～8表]

I 構成と分布

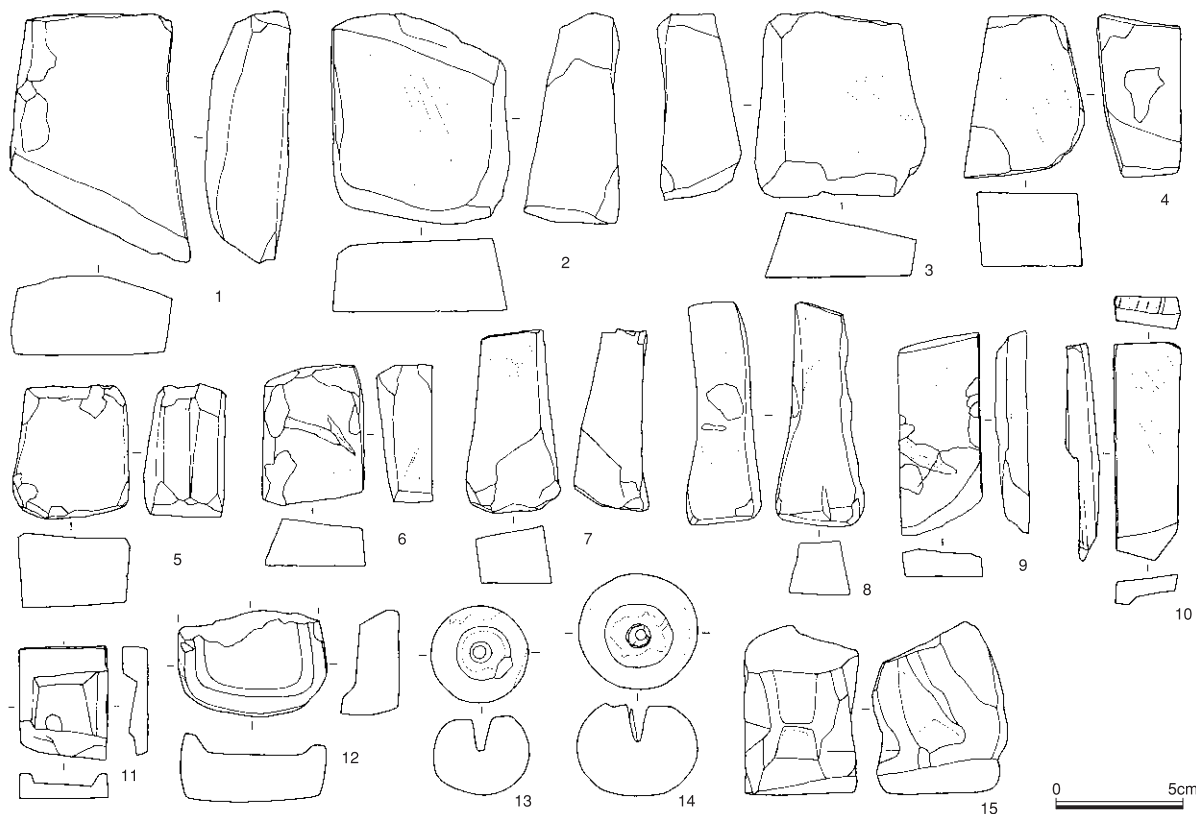
石製品の構成を第6表に示す。生活用具が主体だが、信仰用具に五輪塔や宝篋印塔、狛犬もある。生活用具では、工具に砥石や鞆羽口、文房具に硯、飲食用具に粉挽臼や茶臼、暖房具にバンドコがある。砥石が主体で、バンドコや五輪塔も多い。他は少量で、組合せは多様である。石質は在地産主体。各器種に笏谷石が用いられ、中砥には浄慶寺産もある。遠隔地産では、仕上砥に鳴滝産が少量ある。

石製品の分布を第7表で示す。堀3中心に2列以西、掘立柱建物1・2中心に3～8列、堀2中心に9～14列、井戸や土坑中心に18列以東の4ヶ所に分布がまとまる。特に堀2・3から多く出土した。第7表では、各々分布1～4と示した。また、掘立柱建物1・2のある分布2の表土から、五輪塔がややまとまって出土した。大半が破片であり、後世に移動されたと考えられる。

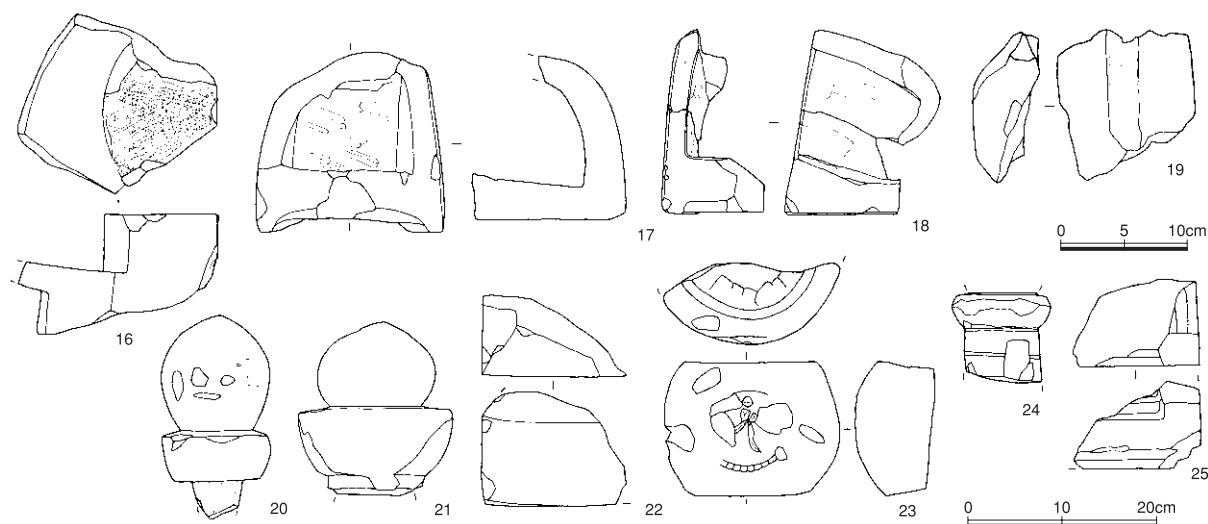
II 石製品の形態

砥石(1～10) 石質から、1～8は中砥、9と10は仕上砥と考えられる。1～3はやや大形で扁平な板状を呈し、側辺が弯曲して反る。いずれも上下端以外が砥面。4～6は厚手の角形を呈す。4は全面、5は上端以外、6は上下端以外が砥面。また、5の右側面は長軸方向、6の表面は斜行する筋状の擦痕が見られる。7と8は角柱形を呈し、側辺が弯曲して反る。7は上下端以外、8は上下端と右側面以外が砥面。9と10は板状の長方形を呈す。共に上下端以外が砥面。9は両側面、10は左側面に長軸方向の鋸による成形痕が見られる。また、10は上端にも表裏方向の成形痕がある。鳴滝産とも考えられる。

硯(11、12) 共に側面は垂直に立ち上がり、裏面は平坦である。11は小形の長方硯。海部右半は深く削り出され、斜行する成形痕が見られる。12は笏谷石製で、在地製作と考えられる。硯尻は、隅が丸く作出される。側面は表裏方向に削られ、裏面は円滑に仕上げられる。



第38図 石製品実測図(1) (縮尺1/3)



第39図 石製品実測図(2) (16~19:縮尺1/6、20~25:縮尺1/8)

錘状石製品(13、14) 扁球形を呈す。器体中央に面が削り出され、穿孔されるが未貫通である。14は、孔に軸とも考えられる木片が遺存している。共に器面には漆が塗られ、14は刷毛目が数条見られる。

狛犬(15) 脚間は削り抜かれず、背や脚部は円滑に仕上げられる。腹部は、正面が上下、側面が前脚側から横方向へ削り込まれる。脚下端に線刻を一周させ、台座が作出される。

茶臼(16) 台部で、受け皿は円滑に仕上げられる。下面と芯棒孔は、丸ノミで整形され、大きくえぐりを持つ。また、臼面の芯棒孔周辺には、同心円状の擦痕がある。

バンドコ(17、18) 前面に上向きの横口が開き、内部は四角く削り抜かれる。共に側壁内面は、平ノミで口から奥壁に向け整形される。また、17は奥壁が丸ノミで横方向に整形される。

轆羽口(19) 円筒形を呈し、先端側は被熱で赤化している。孔内面に長軸方向の線状痕がある。

五輪塔(20~23) 20と21は空風輪。共に空輪と風輪の区分が明瞭で、空輪頂部はわずかに突出する。20はやや縦長で、空輪は短軸、柄は長軸方向に整形されている。21は横に張る形状で、くびれに溝状の間隙がある。風輪下端には、柄ではなく段がある。法量が大きいが、宝篋印塔の相輪上部とも考えられる。破片で判別が困難であった。22は火輪。軒幅は厚く、軒口はやや斜めに切れる。軒端と下面はわずかに反る。23は水輪。球形で、最大径はやや上位に来る。小連弁を有する月輪が浮彫りされ、梵字の「バン」が薬研彫りされている。上面は縁を持ち、ノミで整形され凹む。

宝篋印塔(24、25) 24は相輪。九輪上部から請花にあたる。九輪は線刻される。25は笠。

III 小結

時期と性格について概説する。バンドコは、蓋がなく、身は横口が大半で、平面D字形はわずかである。五輪塔では、空風輪は間延びせず、火輪の軒端の反りはわずかである。水輪の月輪は浮彫りで、梵字は薬研彫りである。小連弁はやや幅広となっている。また、一石五輪塔は見られない。したがって、15世紀中心で、16世紀以降も少量混在すると考えられる。

また、特異な器種について補足しておく。錘状石製品は、嶺北では市荒川興行寺遺跡(永平寺町)や栗住波谷口遺跡(同町)等に類例がある⁽¹⁾。一乗谷朝倉氏遺跡(福井市)第36次調査では、念珠挽の町屋周辺から出土しており、舞錐の重りとされている⁽²⁾。I区上層では、溝1や井戸25から出土し、数珠等は見られない。漆が塗られており、工具とは考えにくいと推察される。

狛犬は小形で装飾性に乏しく、稚拙な作りであった。住吉神社(福井市)では、類似形態の狛犬が多

くあり、江戸時代初期と位置付けられている⁽³⁾。近世以降の民俗例では、魔除や子供の無病息災を祈願して神社に奉納されるという⁽⁴⁾。

以上、I区上層では、生活用具中心に信仰用具もあり、時期や場所ごとの多様な様相が看取される。

参考文献

- (1) 月輪泰 編 2004 『市荒川興行寺遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第76集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 青木隆佳 編 2007 『栗住波谷口遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第97集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- (2) 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1993 『一乗谷と職人』
- (3) 福井県立博物館 1989 『石をめぐる歴史と文化 - 笏谷石とその周辺』
- (4) 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1999 『一乗谷の宗教と信仰』

第6表 石製品組成表 (1)

石質	砥石		硯	錘状石製品	粉挽白	茶白台	バンドコ			輪羽口	狛犬	五輪塔					宝篋印塔		計
	中砥	仕上砥					横口身	D字身	破片			空風輪	火輪	水輪	地輪	破片	相輪	笠	
笏谷石			1	2	1		7	2	5	1	1	3	3	5	1	2	1	2	37
凝灰岩	25																		25
砂岩	3					1													4
頁岩		7																	7
粘板岩			1																1
計	28	7	2	2	1	1	7	2	5	1	1	3	3	5	1	2	1	2	74

第7表 石製品組成表 (2)

調査区		砥石		硯	錘状石製品	粉挽白	茶白台	バンドコ			輪羽口	狛犬	五輪塔					宝篋印塔		計	備考
		中砥	仕上砥					横口身	D字身	破片			空風輪	火輪	水輪	地輪	破片	相輪	笠		
分布1	堀3	5	1			1				2									9	B2, C2, D2, E1, F2	
	他遺構	2						2		1				1				1	7	堀4、土坑82等	
分布2	遺構外	1					1												2	G2, H100	
	遺構内	1									1		1						3	溝19、p2	
分布3	遺構外	7	2					1				2	2	1	1	1			17	C3, E4~7, F7, G4等	
	堀2	3	2	1				2	1		1	1	1						12	H9, H11~14	
分布4	他遺構	3	2		1			1			1		2					1	12	堀5、井戸6、土坑87等	
	遺構外	4								1									5	E11, F10, F13, G12等	
分布4	遺構内	2		1	1			1	1	1									7	堀7・9、井戸25・34等	
計		28	7	2	2	1	1	7	2	5	1	1	3	3	5	1	2	1	2	74	

第8表 石製品観察表

番号	器種	地区	地点	形態	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	遺存
1	砥石	F99	堀4	表面に斜行する擦痕。	凝灰岩	10.0	7.3	3.4	完形
2	砥石	E3	p293	表面に斜行する擦痕。	凝灰岩	8.4	7.1	3.9	完形
3	砥石	C2	堀3	表面に斜行、裏面に長軸方向の擦痕。	凝灰岩	7.5	6.8	3.3	完形
4	砥石	H9	土坑91 (下層遺構)	表面と左側面に斜行する擦痕。	凝灰岩	6.5	4.8	3.3	完形
5	砥石	E8	包含層	表裏面に不定方向の擦痕。	凝灰岩	5.3	4.7	3.2	完形
6	砥石	E8	包含層	表面に不定方向の擦痕。	凝灰岩	5.6	4.1	2.3	完形
7	砥石	H100	下層包含層	表面に斜行する擦痕が顕著。	凝灰岩	7.3	3.8	3.0	完形
8	砥石	F7	下層包含層	表面は斜行、他は長軸方向の擦痕。	凝灰岩	8.9	3.6	3.0	完形
9	砥石	H12	堀2	表面に不定方向、裏面に斜行する擦痕。	頁岩	7.1	3.3	1.4	下半欠
10	砥石	G4	包含層	表裏とも斜行する擦痕。	頁岩	8.7	2.7	1.4	下半欠
11	硯	L24	土坑97		粘板岩	4.5	3.6	1.1	下半欠
12	硯	H12	堀2		笏谷石	4.2	5.9	2.8	上半欠
13	錘状石製品	F14	溝1	漆の被膜が薄く遺存。	笏谷石	φ3.9		3.2	完形
14	錘状石製品	L24	井戸25	器体中央の面に漆が溜り状に遺存。	笏谷石	φ4.8		3.9	完形
15	狛犬	E3	溝19	頭と尾部は欠失。	笏谷石	6.8	4.6	5.4	上半欠
16	茶白	G2	包含層		凝灰質砂岩	14.4	16.1	9.7	3/4欠
17	バンドコ	J20	堀9	底部に煤顕著。	笏谷石	14.4	15.4	13.0	一部欠
18	バンドコ	H11	堀2	側壁と底部に煤。	笏谷石	14.8	8.4	12.6	右半欠
19	輪羽口	H13	堀2		笏谷石	12.1	10.9	5.6	半欠
20	五輪塔空風輪	E4	表土		笏谷石	21.7	φ11.6		完形
21	五輪塔空風輪	C6	包含層		笏谷石	18.5	16.4	12.1	半欠
22	五輪塔火輪	G2	p375 (下層遺構)		笏谷石	15.7	12.0	8.7	大半欠
23	五輪塔水輪	C6	包含層		笏谷石	14.2	18.8	8.6	2/3欠
24	宝篋印塔相輪	E5	表土	宝珠と九輪下部は欠失。	笏谷石	9.6	φ10.6		大半欠
25	宝篋印塔笠	G1	土坑82	下面は二段作出。隅飾突起と左半欠。	笏谷石	9.3	13.5	9.3	大半欠

第6章 まとめ

第1節 遺跡

I 遺跡の内容と区画の設定

I区上層調査で得られた出土遺物の大多数は中世遺物である。その時期は13世紀代から16世紀代までの幅を有し、15世紀代、特に15世紀中葉がその大半を占める。出土量の多寡が遺跡の盛衰をも反映していると見なすならば、遺跡全体としての主体時期も15世紀代、特に15世紀中葉ごろにそのピークがある、と考えられよう。

遺構の内容について見ると、掘立柱建物や井戸などの生活遺構が検出されており、まずは集落跡としての要件を満たしていると言えよう。だが、今回、何よりも注目すべきなのは、堀による大規模な土地区画である。言いかえれば、この大規模な堀割による区画自体も一つの遺構であり、それらが中世の中角集落を形成する一単位として、各々機能していたと考えられるのである。そこで、本章で調査成果を総括するにあたっては、まず各々の区画を設定したのちに、区画ごとにその内容を検討したい。

区画を設定するには、区画の変遷を把握する必要がある。重複する堀の時期については、断面観察より、堀1→堀2→堀5、堀8→堀7という変遷がそれぞれ判明している。ただ、それ以外の堀との層位的な先後（あるいは同時）関係は、現状では検証不可能である。

出土遺物から時期を推定するにしても、掘削後直ちに埋め戻す柱穴や墓壇などの遺構でない限りは、出土遺物の所属時期の下限＝遺構埋没時期の遡及し得る上限、と見なさねばならない。特に、堀などはその機能や規模から、他の遺構よりも遺存期間が長くなるものと考えられ、堀の埋立と区画の廃絶・廃棄は必ずしも同時期であるとは限らない。つまり、区画の廃絶・廃棄後、後世に至って堀を埋立てて整地した、という状況も十分に想定できるのである。

結論として、このように不確定要素が多い現状で、堀の時期変遷を出土遺物より定義付け、区画の時間的・空間的把握を試みるのは、非常に困難である。したがって、ここでは区画の時間的変遷はあえて考慮せず、現状で平面的に把握できる区画のうち、「堀3以東 - 堀1以西 - 堀2・5以南」、「堀4以西」、「堀2・5以北 - 堀9以西」、「堀6～8以東」の四つについて、検討を試みることにする。なお、残りの「堀1以東」と「堀6～8以西 - 堀9以東」については、前者は堀1の埋没とともに比較的早い段階で消滅した可能性が高い上、特に注目すべき状況もないこと、後者は非常に狭く、区画として評価が困難であることから、いずれも検討から除外する。

II 各区画の検討

(1) 堀3以東 - 堀1以西 - 堀2・5以南

I区 - ①（平成7年度調査区：第2図①）にほぼ相当する。I区の大半を占める区画で、掘立柱建物3棟や井戸12基など、多くの遺構がこの区画に属する。なお、この区画は隣接する区画とともに、多様な変遷を遂げている可能性が高く、ある一時期の区画と言うより、区画の変遷の中で確実に切り取れる最小単位として認識すべきであろう。

掘立柱建物1・2は重複して確認されたが、柱穴同士が切り合う箇所はなく、出土遺物もほとんどないので、ともに所属時期を決定するのは難しい。ただ、両者の規模が近似していることから、同様の建物を改築した状況が推測できよう。掘立柱建物3を伴う井戸1は、出土遺物から15世紀中葉までの築造

と考えられるが、掘立柱建物3と掘立柱建物2の方位が一致することから、両者は併存していた可能性が高い。つまり、掘立柱建物2の時期も15世紀中葉前後に位置づけられるものと推測される。

また、堀2・5の跡地は旧市道の範囲とほぼ一致しており、堀が埋没した後の空白地が、道路として活用された様子がうかがえる。

以上、内容を概観すると、I区の中でも主体を成す区画であることに疑いはないが、広さの割に遺構密度が低く、特に建物の数が少ない。非常に閑散とした印象を受け、通常の居住域と考えるには、いささか説得材料に乏しい。

平成元年(1989)に、本事業に伴って社殿等が移転するまでは、当地は白山神社とその境内地であった。明治期の地籍図によると、この区画^{しやち}一帯には「社地」という字名が付いており(第8図)、明治35年(1902)には、九頭竜川改修のため、土地の一部を供出したという。具体的にいつの時代まで遡れるか定かではないが、この区画一帯がかつて神社に関係し、いわゆる日常的な居住域とは一線を画する領域であったことは確かであろう。

現段階では、この区画が中世においても神社に関連した領域であった、と推断できる証拠はない。ただ、「多知」、「西垣内」、「城屯」など、中角館に関わると見られる字名(第8図)、すなわち、中世当時の各地区の様態をうかがわせる字名が、当区画に隣接して残ることには、特に留意しておきたい。

(2) 堀4以西

I区-②(平成9年度調査区:第2図②)に相当する。調査範囲が非常に狭く、遺構も少ないため、現状で検討可能な要素はほとんどないが、曲物の井戸枠を有する大型の井戸(井戸17)があり、注目に値する。また、西隣する調査II区とも連繋する可能性が高く、II区上層遺構調査成果との関連性も考慮する必要がある。

(3) 堀2・5以北・堀9以西

I区-③および④西半部(平成9年度調査区:第2図③、平成10年度調査区:同図④西半部)に相当する。遺構が非常に少なく、井戸が数基あるほかに、人が居住していた痕跡を見出すことはできない。

第3章で触れたように、この区画の大半は湧水による低湿地か沼地と考えられ、土地活用が非常に困難であったことは想像に難くない。区画の西端に複数の溝や、柵列らしきピット列があることから推測すると、区画と言うより、区画外に相当するのかも知れない。

(4) 堀6～8以東

I区-④東半部(平成10年度調査区:第2図④東半部)に相当する。調査範囲は細長く狭いものの、多数の井戸の密集を検出しており、居住域としての性格を強く示している。

検出状況から考えて、調査区はおそらく区画の縁辺部にあたり、建物などいわゆる区画の中核となる遺構は、西方以外の調査区外周辺に存在すると考えられる。なお、地籍図などから推定して、この区画は中角館跡の比定地に最も近接し、館の環濠跡に南隣する箇所と判断される。

第2節 集落と館

前節では、各区画の検討により、区画ごとにその内部の様相がさまざまに異なることを確認した。中世の中角における集落構造の一端を垣間見せる、非常に興味深い成果と言えよう。だが、このように集落内で土地区画が発達したのは何故だろうか。要因は多々考えられるが、そもそもの発端をたどるならば、中角館とその成立に帰結するであろう。

中角は古くから九頭竜川の渡船場で、交通の要衝であり、加えて、一帯には広大な荘園である河合庄が展開していた。中角館の主である乙部氏が、河合庄の管理を任されていたことから考えても、館の成立には、中角を重要拠点として管理しようという意図が働いていたものと推測される。

何より、館の築造も含め、前節で確認したような大規模な土地区画事業をおこなう場合には、背景に相応の資力・労力を行使できる存在が必要である。中角館はそのような力と意志の具現として、中世中角集落における中核施設の役割を担い、成立したと考えられる。

そういった状況にあっては、集落内の区画構造は館を起点として展開していたであろうし、各区画の性格や機能も、館の影響を少なからず受けていたであろう。それゆえに、そのような関係にある集落と館は、その盛衰においても密接に連繋していたものと考えられるのである。

今回報告した調査Ⅰ区は、中角館跡比定地に隣接しており、館本体あるいは館に関連する遺構・遺物の検出が特に期待された。残念ながら、期待したような直接的成果は得られなかったが、今回検出した集落内の土地区画構造は、館の实在を強く示唆する成果とも言える。つまり、今後のさらなる検討により、集落から館の実像を推測することも、あるいは可能であろう。そのような意味で、今回の成果には重大な意義があると確信する。

今後予定するⅡ区上層調査成果報告では、今回の成果も総合しつつ、集落の実態をさらに検証し、館の実像の検討にも努めたい。

圖 版



(1) 遺跡遠景 (東より)



(2) I区 - ①全景



(1) I区 - ②全景



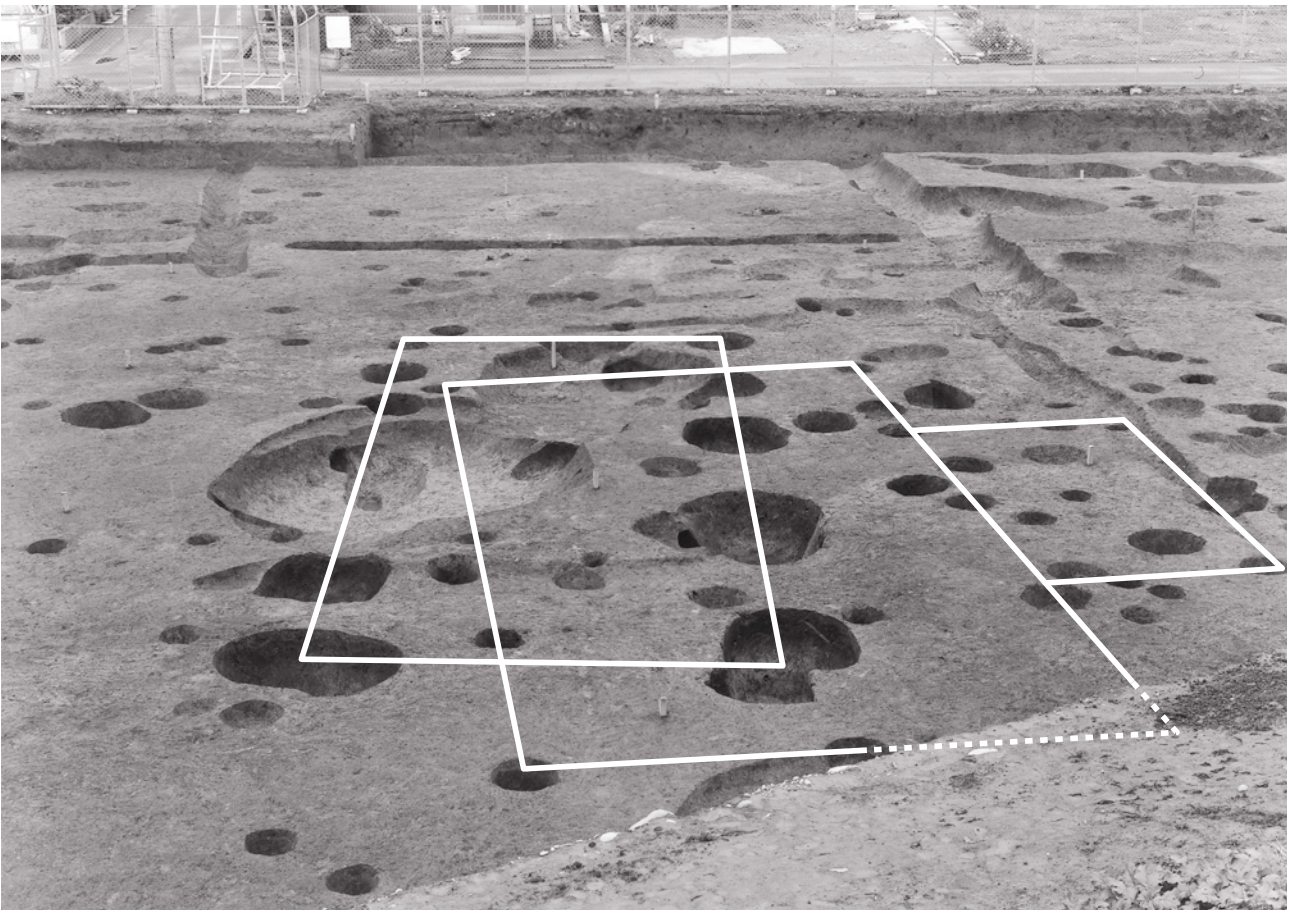
(2) I区 - ③全景



(3) I区 - ④全景



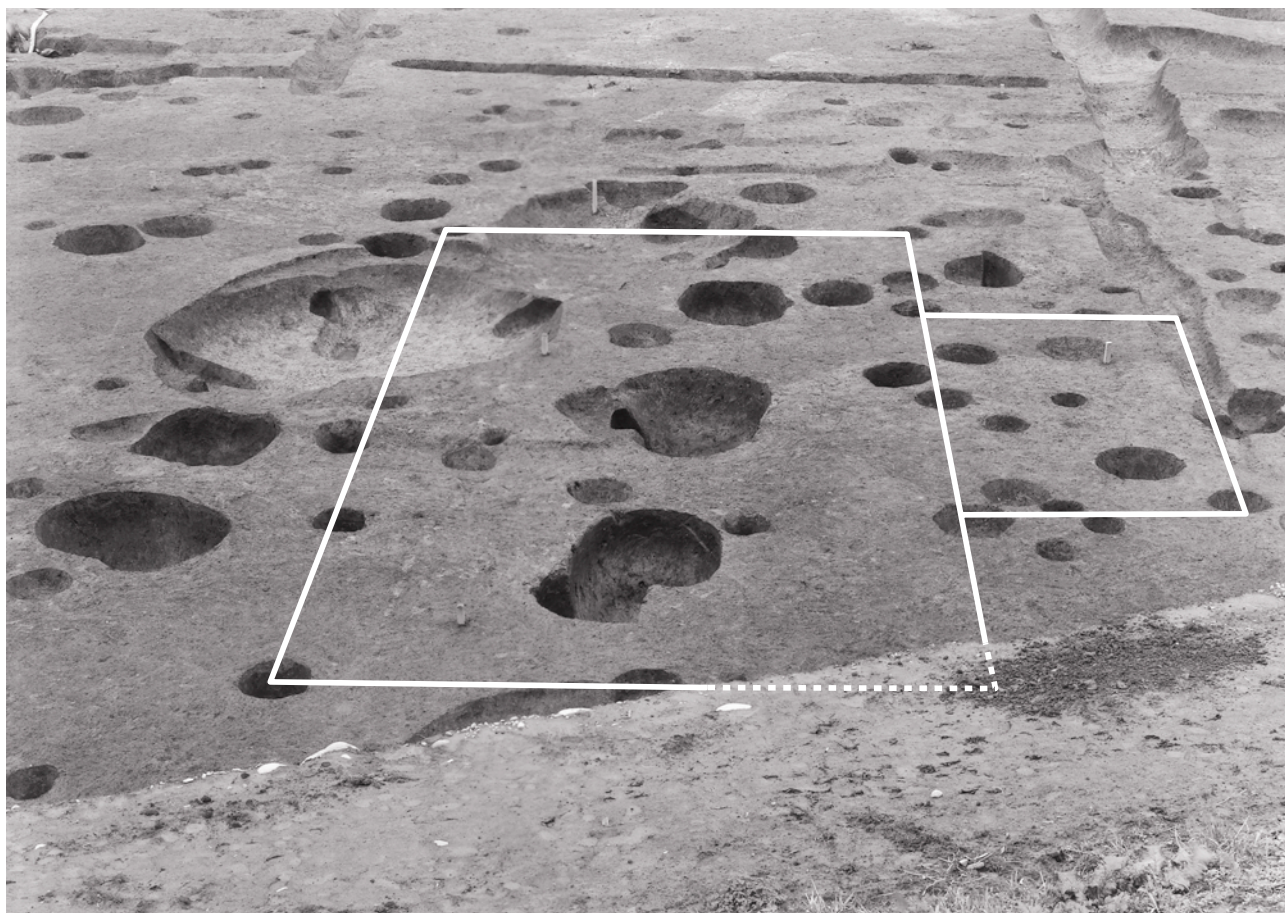
(1) 掘立柱建物1・2 (北より)



(2) 掘立柱建物1・2 (南より)



(1) 掘立柱建物1 (北より)



(2) 掘立柱建物2 (南より)



(1) 堀1 (南より)



(2) 堀2・5 (西より：平成7年度)



(3) 堀2・5 (西より：平成9年度)



(4) 堀2・5断面 (東より：平成9年度)



(1) 堀3 (南より)



(2) 堀3断面 (南より)



(1) 堀3・4 (北より：平成7年度)



(2) 堀4 (西より：平成9年度)



(1) 堀6・7・8 (北より)



(2) 堀6・7・8断面 (南より)



(3) 堀6・7・8断面 (南より)



(1) 堀9 (北より)



(2) 堀9断面 (南より)



(1) 井戸1 (東より)



(2) 井戸3 (北東より)



(3) 井戸7 (西より)



(4) 井戸17 (南より)



(5) 井戸18 (南より)



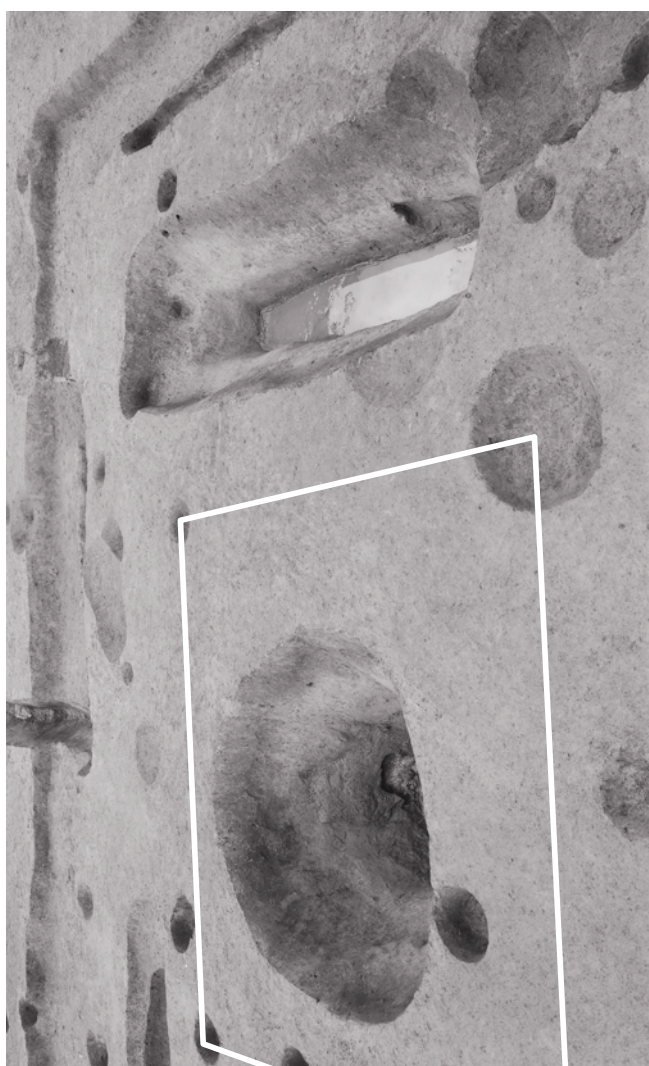
(6) 井戸19 (北より)



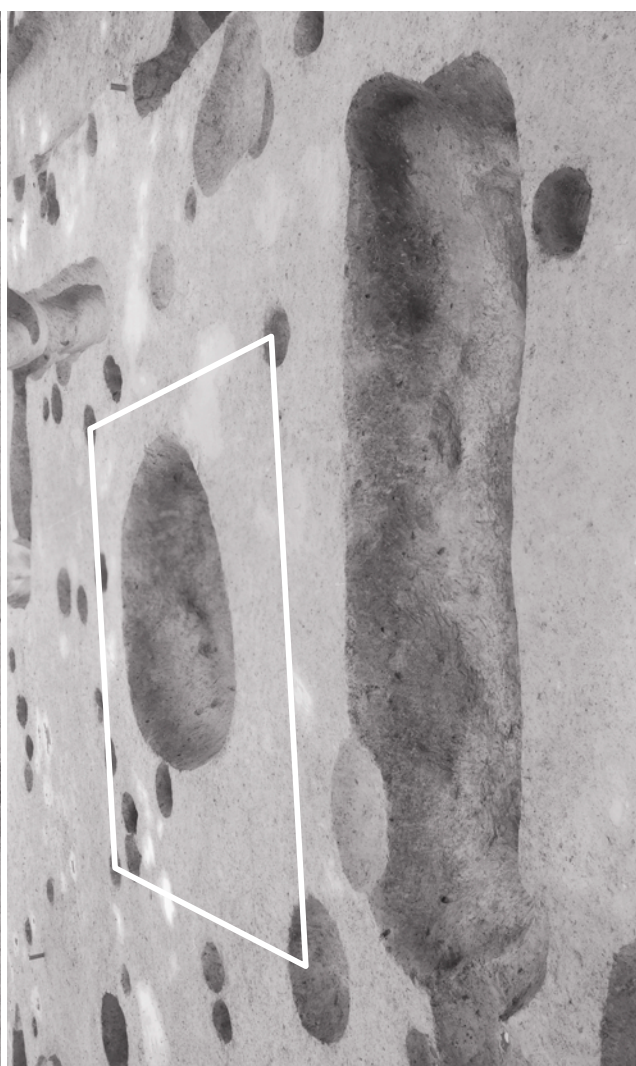
(1) 井戸 23・24・26・29・30 (北東より)



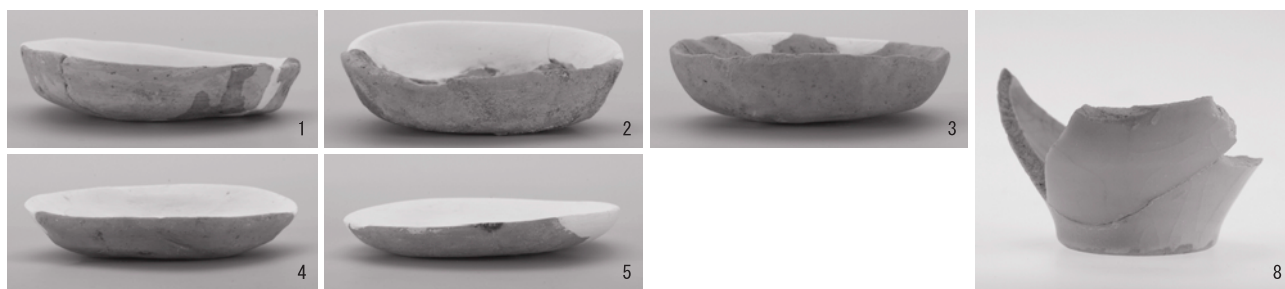
(2) 井戸 20・21・27 (北西より)



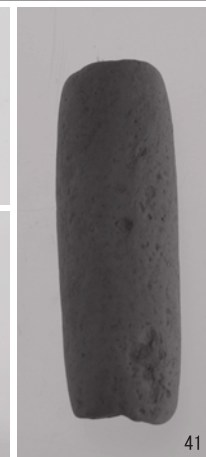
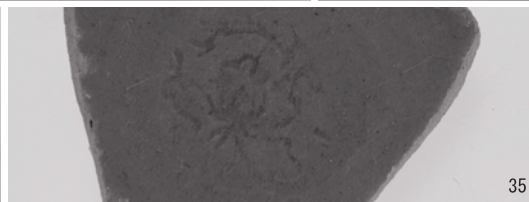
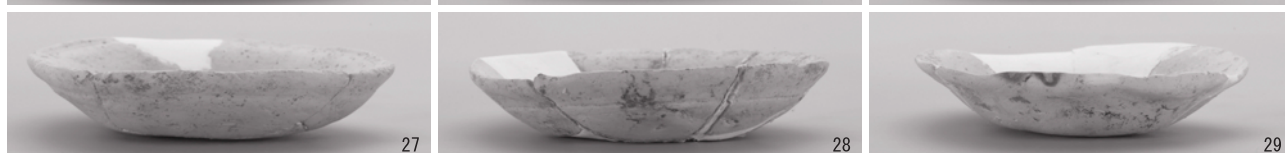
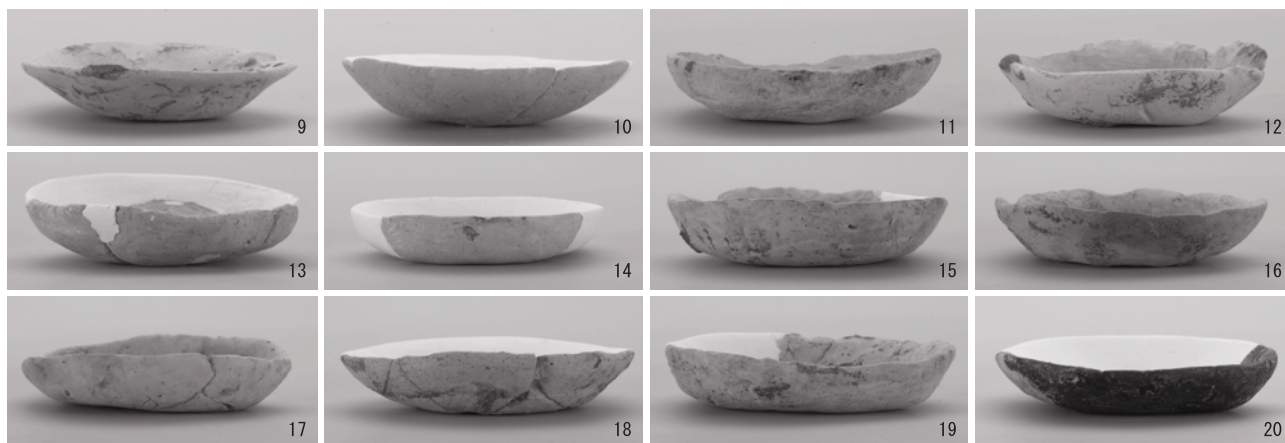
(3) 井戸 1・掘立柱建物 3・土坑 51 (東より)



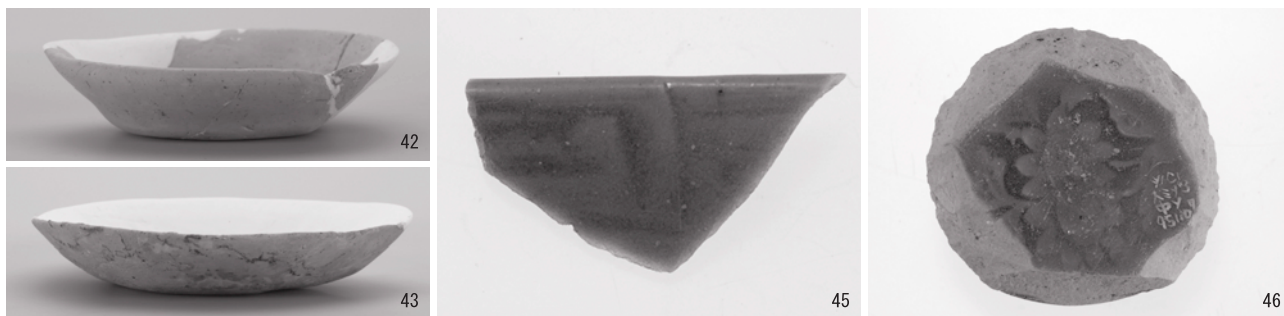
(4) 井戸 1・掘立柱建物 3・土坑 51 (北より)



(1) 堀 1 出土遺物



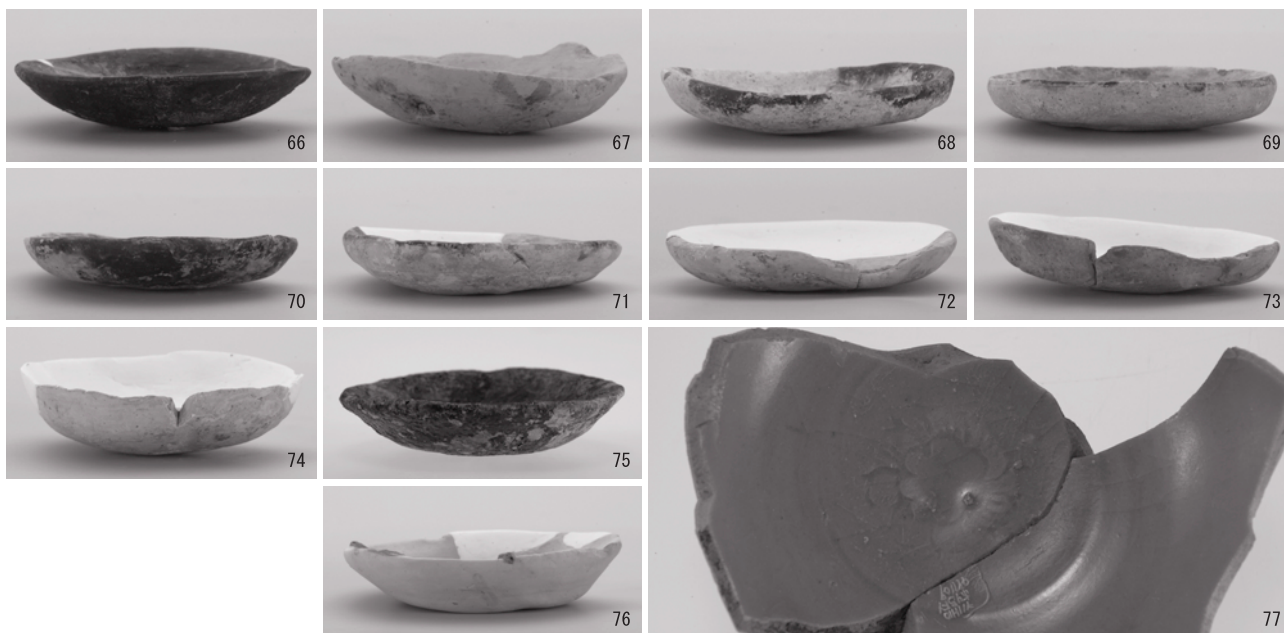
(2) 堀 2 出土遺物



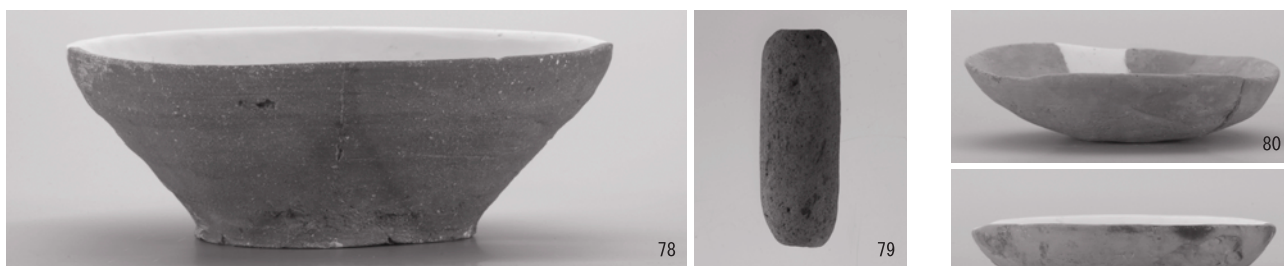
(1) 堀3出土遺物



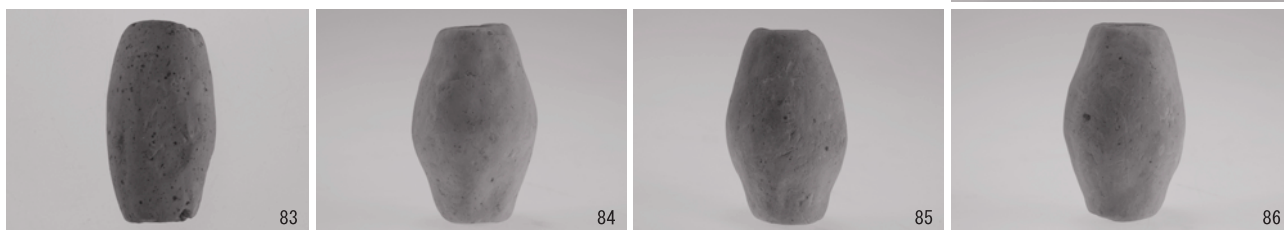
(2) 堀4出土土器



(3) 堀5出土土器



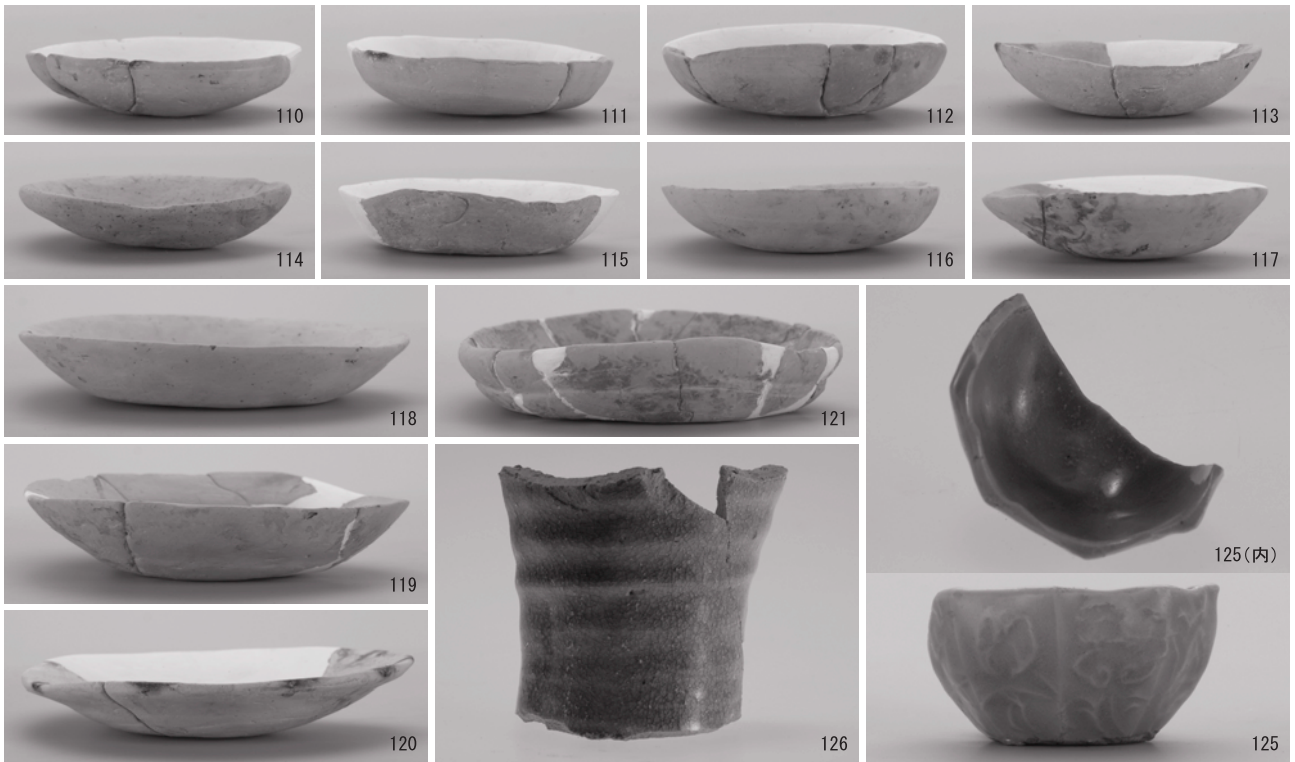
(1) 堀7出土遺物



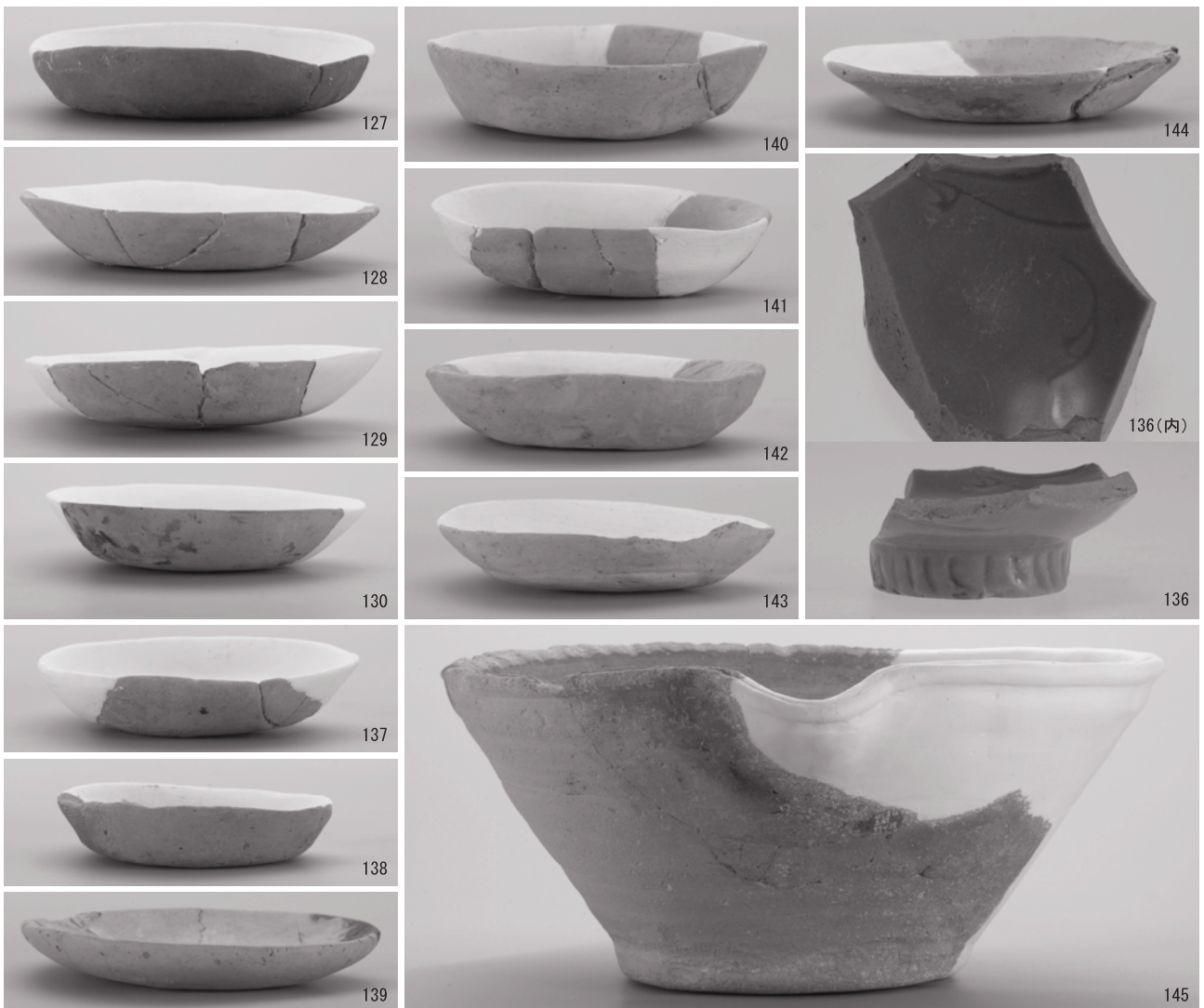
(2) 堀9出土遺物



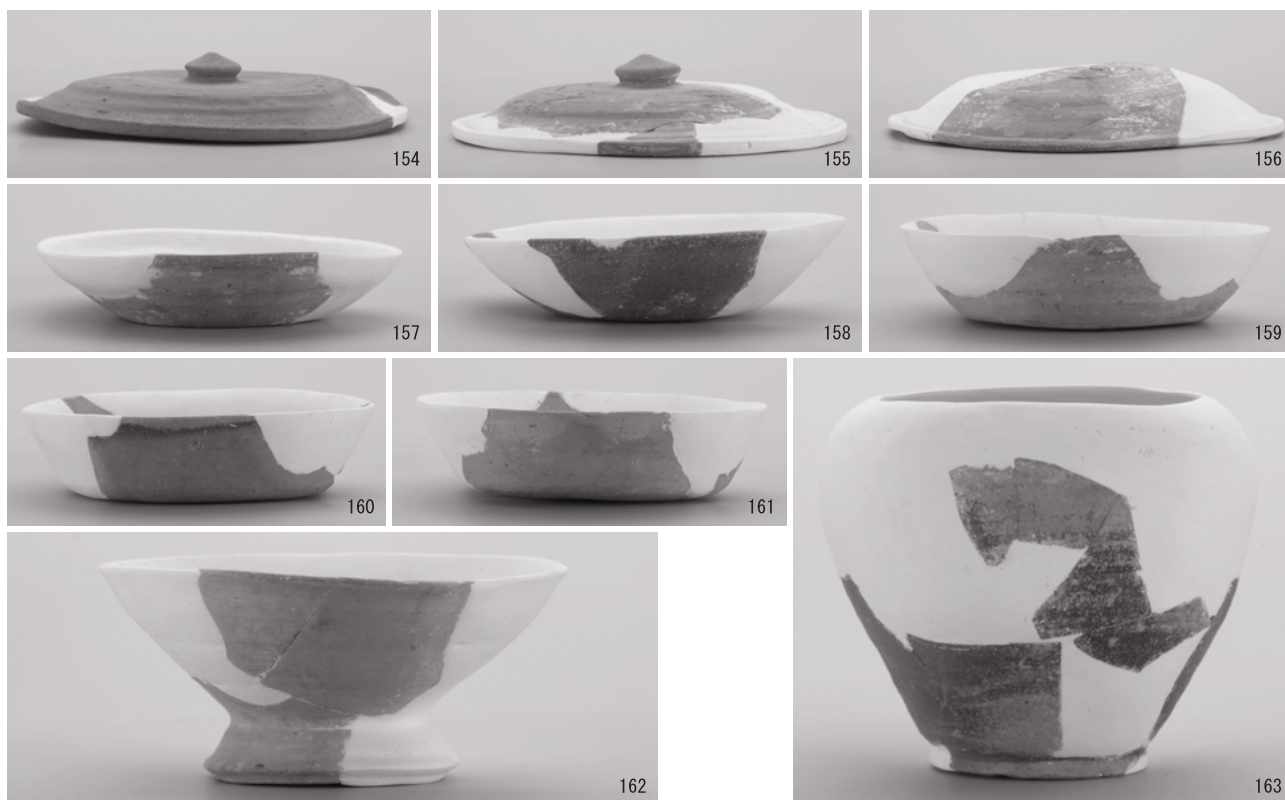
(3) 井戸出土遺物



(1) 土坑51出土遺物



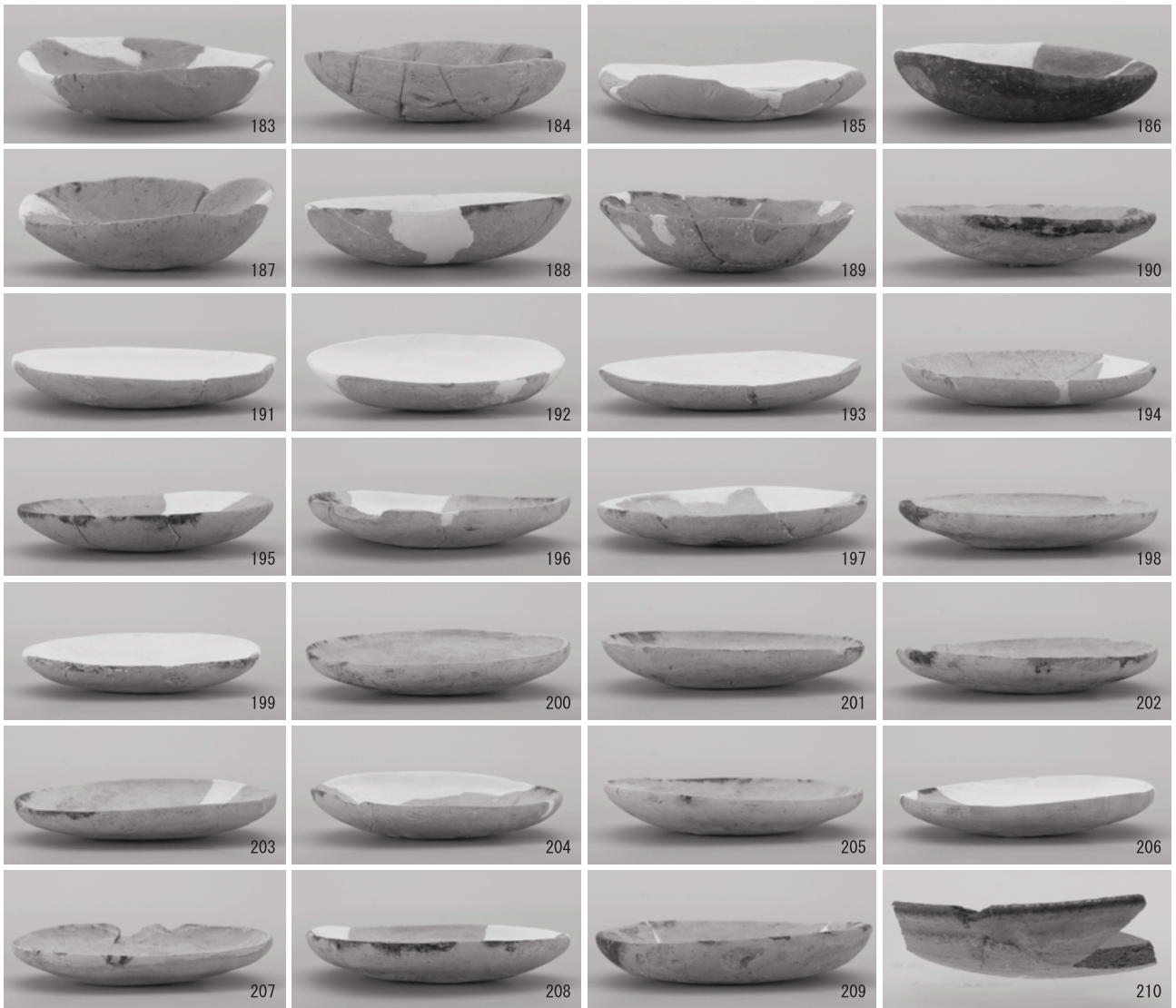
(2) 土坑出土遺物



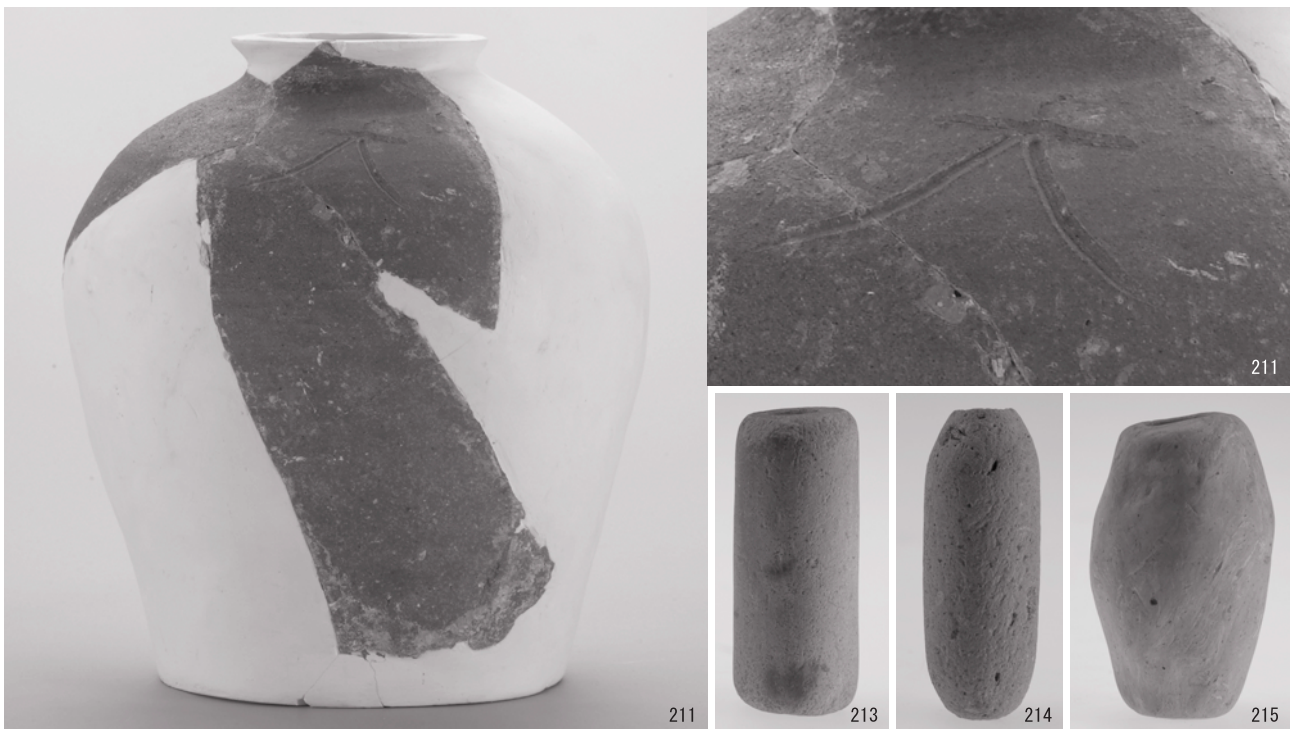
(1) 包含層出土遺物 (須惠器)



(2) 包含層出土遺物 (土師質皿)

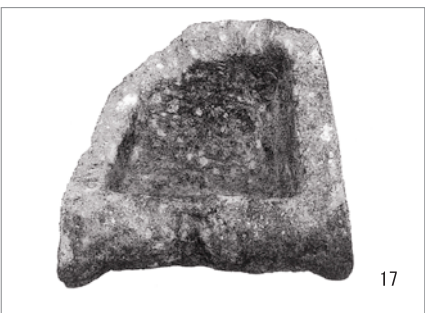
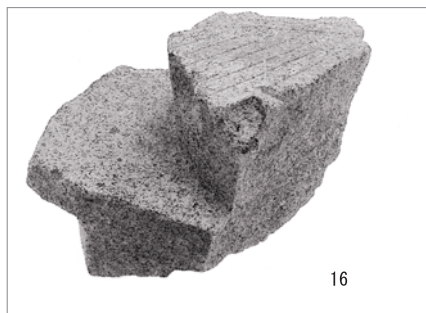
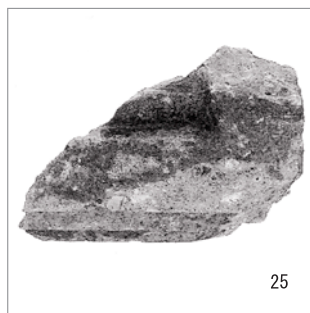
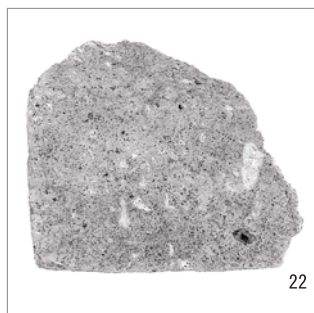
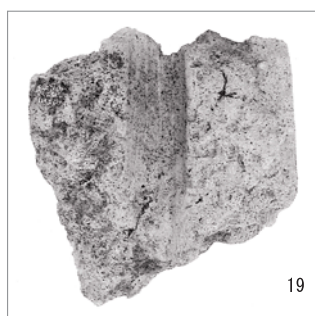
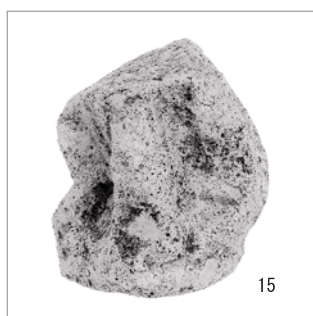
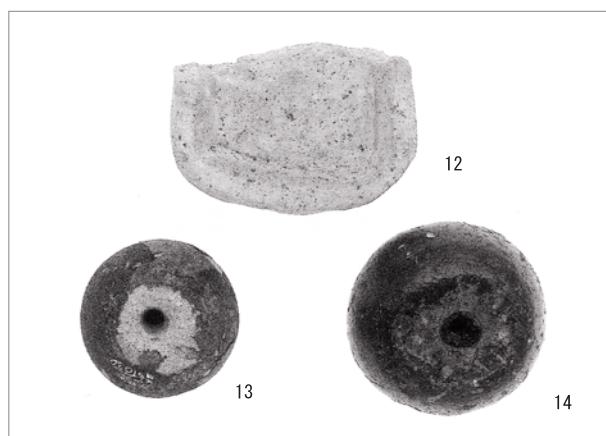
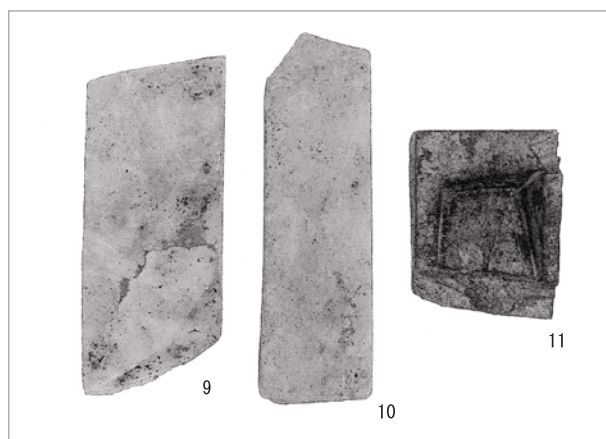
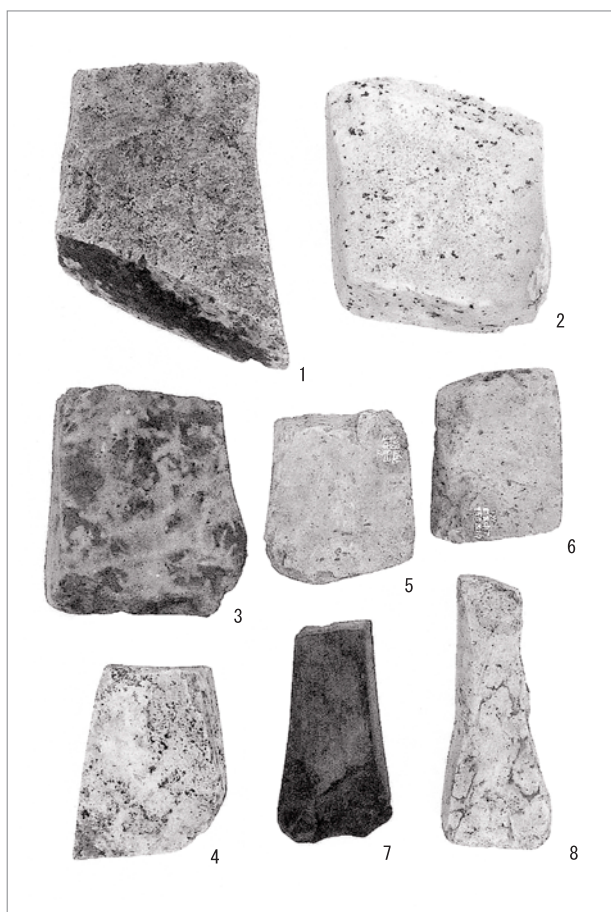


(1) 包含層出土遺物（土師質皿）



(2) 包含層出土遺物（越前焼壺・土錘）

図版第一八 遺物（石製品）



報 告 書 抄 録

ふりがな	なかつのいせき							
書名	中角遺跡1 - I区上層編 -							
副書名								
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第100集							
編著者名	中森敏晴 月輪泰 田中勝之 奥井智子							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2008年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかつのいせき 中角遺跡 (I区上層)	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 なかつのちょう 中角町	18201	01076	36° 06' 03"	136° 12' 18"	19950523 ～ 19981125	2,640m ²	九頭竜川等 河川改修事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
中角遺跡 (I区上層)	集落	中世 (15世紀代 が主体)	掘立柱建物	3棟	土師質皿			中世集落内で、堀による大規模な土地区画を検出した例は、県内でも稀少である。
要約	<p>中角遺跡は中世（上層）と弥生・古墳時代（下層）の二時期の遺構面を持つ複合遺跡である。遺跡内には同じく中世の城館跡である『中角館跡』の比定地が所在する。今回のI区上層調査では、東西・南北方向に掘削された堀と、堀による土地区画内に展開する掘立柱建物や井戸などの遺構を検出した。出土遺物より、集落の主体時期は15世紀代で、特に15世紀中葉ごろにピークがあると考えられる。</p>							

福井県埋蔵文化財調査報告 第100集

中 角 遺 跡 1

— I 区上層編 —

— 九頭竜川等河川改修事業に伴う調査 —

平成20年 3 月21日 印刷

平成20年 3 月28日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井市安波賀町4-10

印刷 足羽印刷株式会社

〒918-8231 福井市問屋町3丁目212
